

# 近世快人伝

夢野久作

青空文庫



## まえがき

筆者の記憶に残っている変つた人物を挙げよ……という当代一流の尖端雑誌新青年子の註文である。もちろん新青年の事だから、郵便切手に残るような英傑の立志談でもあるまいし、神経衰弱的な忠臣孝子の列伝でもあるまいと思つて、なるべく若い人達のお手本になりそうにない、処世方針の参考になんか絶対になりつこない奇人快人の露店を披ひらく事にした。

とはいえ、何しろ相手が了りようけん簡かんのわからない奇人快人揃いの

事だからウツカリした事を発表したら何をされるかわからない。

新青年子もコツチがなぐられるような事は書かないでくれという

ただしがき

但書ただしがきを附けたものであるが、これは但書を附ける方が無理だ。

奇行が相手の天性なら、それを書きたいのがこっちの生れ付きだから是非もない。サイドカーとアドバルン広告球を衝突させたがる人間の

多い世の中である。お互いに運の尽きと諦めるさ。

## 頭山満

ナアーンダ。奇人快人というから、どんな珍物が出て来るかと思つたら頭山<sup>とうやま</sup>先生が出て来た。第一あんまり有名過ぎるじゃないか。あんなのを奇人快人の店に並べる手はない。明治史の裡面に蟠踞<sup>ばんきよ</sup>する浪人界の巨頭じゃないか。維新後の政界の力<sup>ちから</sup>石<sup>いし</sup>じゃないか。歴代内閣の総理大臣で、この先生にジロリと睨<sup>にら</sup>まれて縮み上らなかつた者は一人も居ない偉人じゃないか……とか何

とか文句を云う者が大多数であろう。

……怪けしからん。頭山先生を雑誌の晒さらし物にするとは不埒ふらちな奴じゃ。頭山先生は現代の聖人、昭和維新の原動力だ。そんな無礼な奴は絞め上げるがヨカ……とか何とか腕まくりをして来る黒切符組もないとは限らないが、まあまあ待ったり。話せばわかる。

筆者のお眼にかかった頭山先生は、御自身で、御自身を現代の聖人とも、昭和維新の原動力とも、何とも思つて御座らぬ。「俺は若い時分にチツトばかり、漢学を習うたダケで、世間の奴のように、骨を折つて修養なぞした事はない。一向ツマラ又芸無し猿じゃ」と自分でも云うて御座る。それでいて西郷隆盛の所い謂わゆる、生命いのちも要らず、名も要らず、金も官位も要らぬ九州浪人や、好漢

安永氏の所謂「頭山先生の命令とあれば火の柱にでも登る」という二トロ・グリセリン性の青年連に尻を押されて、新興日本の尻を押し通して御座った……しかも一寸一刻も、寝ても醒めても押し外した事はなかつた。日本民族をして日清、日露の国難を押し通させて、今は又、昭和維新の熱病にかかりかけている日本を、そのまんま、一九三五年の非常時の火の雨の中に押し出そうとして御座る。……ように見えるが、その実、御自身ではドウ思つて御座るかわからない。ただ相も変らぬ芸無し猿、天才的な平凡児として持つて生まれた天性を、あたり憚らず<sup>はばか</sup>発揮しつつしながら悠々たる好々爺<sup>こうこうや</sup>として、今<sup>こんにち</sup>日まで生き残つて御座る。老幼賢愚の隔意なく胸襟<sup>きょうきん</sup>を開いて平々凡々に茶を啜<sup>すす</sup>り、談笑して御座

る。そこが筆者の眼に古今無双の奇人兼、快人と見えたのだから仕方がない。世間の所謂快人傑士が、その足あしもと下にも寄り付けないう奇行快動ぶりに、測り知られぬ平々凡々な先生の、人間性の偉大さを感じて、この八十幾歳の好々爺が心から好きになつてしまつたのだから致し方がない。そうして是非とも現代のハイカラ諸君に、このお爺さんを紹介して、諸君の神経衰弱を一挙に吹飛ばしてみたくなつたのだから止むを得ない。

元來、頭山先生が、この新青年に、きょうが日まで顔を出さないのが間違つている。それも頭山先生が時代遅れのせいではない。却かえつて新青年誌の方が頭山老人の思想よりも立ち遅れている事を筆者は確信しているのだから是非もない。ここに先生の許しを得



て、逸話を御披露する。

とうやまみつる

頭山満翁の逸話といつたら恐らく、浜の真砂まぎこの数限りもあ

るまい。頭山満翁はさながらに逸話を作りに生まれて来たようなもので、その奇行快動ぶりといつたら天下周知の事実と云つても憚らない位である。

しかし仔細に点検して来ると、その鬼神も端倪たんげいすべからざる痛快的逸話の中にも牢乎ろうことして動かすべからざる翁一流の信念、天性の一貫しているところを明白に認める事が出来る。

すなわち翁の行動には智力を用いた形跡がない。何でも行きな  
りバッタリの無造作、無鉄砲を以て押通もつして行くところに、翁の  
真面目しんめんもくが溢るるばかりに流露している。そうしてその真面目が、

日常茶飯事に対しては意表に出づる逸話となり、国事に触れては鉄壁を砕く狂瀾怒濤となつて行くものようである。

蛇は寸にして蛇を呑む。翁が十歳ばかりの年の冬に家人から十錢玉を一個握らせられて、蒟蒻こんにやく買いに遣やられた。その頃の蒟蒻は一個二厘、三厘の時代であつたから、定めし十個か二十個買つて来いという家人の注文であつたろう。

ところが十幾歳の頭山満は蒟蒻屋の店先に立つと黙つて十錢玉を一個投出したので、店の主人は驚いた。

「これだけミンナ蒟蒻をば買いなさるとな」  
翁は簡単にうなずいた。

蒟蒻屋の主人は蒟蒻を山のように数えて、翁の前に持つて来た。

「容れ物をば出しなさい」

翁はやはりだまつて襟えりもと元くつろを寛げた。ここへ入れよという風に、

うつむいて見せた。そうして主人が驚いて見ているうちに、氷よりも冷たい蒟蒻の山を懐ふところ中に掴み込んで、悠々と家うちへ帰った。

頭山翁は終生をこの無造作と放胆振りでもって押通している。

「俺は無器用な奴じゃがのう。しかし、その無器用な御蔭で、天下の形勢の凶星だけは見外みはずさぬようになつとる」云々。

「しかしこの頃俺に書画、骨董こつとうや、刀剣の鑑定を持込んで来るには閉口しとる。一番わからん奴の処へ見せに来る訳じゃからの。ハハハハ」

グロの方ではコンナ傑作がある。

大阪に菊地なにがしという市長が居たことがある。仲々の遣手やりてでシツカリ者という評判であつたが、これに頭山先生が、何かの用を頼むべく会いに行つた事がある。同伴者は先生の親友で、後のちの玄洋社長の進藤喜平太氏であつたというが、市長官舎の応接室に通されて待てども待てども菊地市長が現われて来ない。天下の豪傑、頭山満が来たというので、才物の菊地市長尊大ぶつて、羽根づくろいをするために待たせたものらしいという後こうじん人じんの下馬評である。

ちようどその時に頭山先生は、腹の中でサナダ虫を湧かして、下剤を飲んでいたので、そいつが利いたと見えて待つているうち

に尻の穴がムズムズして来た。そこで頭山先生懐ふところ中から股倉へ手突込んで探ってみると、何かしら柔らかいものがブラリと下っている。掴つまんで引っぱってみると、すぐにプツリと切れてしまった。股倉から手を出してみるといかにも名前の通りに白い、平べったい、サナダ紐ひもみたいなものが一寸ばかりブラブラしている。見ると目の前に、見事な金蔴まきえ絵をした桐の丸胴の火鉢があつたので、頭山先生その丸胴の縁ふちくだんに件のサナダ虫を横たえた。進藤喜平太氏も不審に思つて覗いてみたが、何やらわからないので知らん顔をしていたという。

そのうちに又、頭山先生のお尻の穴がムズムズして来たので、又手突込んで引っぱると、今度は二寸ばかりの奴が切れ離れて

来たヤツを、やはり眼の前の火鉢の縁へ、前の一片ひときれと並べておいた。察するに頭山先生いい退屈しの凌ぎを見つけたつもりであつたろう。悠々と股倉へ手を突込んで一寸、又二寸とサナダ虫の断片を取出して、火鉢の縁へ並べ初めた。

誰でも知っている通りサナダ虫は一丈じょうも二丈もある上に、短かい節々のつながりが非常に切れ易いので、全部を引出し終るにはナカナカ時間がかかる。とうとう火鉢の周囲まわりへ二まわり半ほど並べたところへ、やつとの事、御大将の菊地市長が出て来た。黒羽はぶたえ二重五つ紋ふたえに仙台平せんだいひらか何かの風采堂々と、二人を眼下に見下して、

「ヤア。お待ちせしました」

と云いながら真正面の座布団に坐り込んだが、火鉢の縁へ手を載せたトタンにヒイヤリとしたので、ちよつと驚いたらしくてのひら掌を見ると、白い柔らかい、平べつたい、豆腐の破片みたようなものが手の平へ二三枚へバリ付いている。嗅いでみると異様なたまらない臭いがする。菊地市長いよいよ驚いたらしく背後をうしろかえりみて女中を呼んだ。

「オイオイ。この火鉢の縁の……コ……コレは何だ」

女中が真青に面喰つた。ちよつと見たところ、正体がわからな  
いし、自分が並べたおぼえがないので、返事に窮していると頭山  
先生が静かに口を開いた。

「それは僕の尻から出たサナダ虫をば並べたとたい」

菊地市長は「ウワアツ」と叫んで襖ふすまの蔭に転がり込んで行ったが、それっ切り出て来なかつた。

二人は仕方なしに市長官舎を辞したが、門を出ると間もなく正直者の進藤喜平太氏が、

「折角会えたのに惜しい事をした」

とつぶやいた。頭山先生は又も股倉へ手を突込みながら、

「フフン。あいつは詰らん奴じゃ」

まだある。

これは少々グロを通り越しているが、頭山翁の真面目を百パーセントに發揮している話だから紹介する。頭山翁が玄洋社を提ひっさげ



て、筑豊の炭田の争奪戦をやらせている頃、福岡随一の大料理屋  
 常盤館ときわで、偶然にも玄洋社壮士連の大宴会と、反対派の壮士連の  
 大宴会が、大広間の襖一枚を隔ててぶつかり合つた。

何がさて明治もまだ中途半端頃はんぱの血ちなまぐさ腥なまぐさい時代の事とて、何  
 か一ひと騒動初まらねばよいがと、仲居なかい、芸妓連中げいぎが心も空にサー  
 ビスをやっているうちに果せる哉かな始はじまつた。

合あいの隔へだての襖あしが一齐に、どちらからともなく蹴開けひらかれて、敷居  
 越ししらはに白刃しらばが入り乱れ、遂には二つの大広間をブツ通した大殺陣  
 が展開されて行つた。

大広間に置き並べられた百刃め蠟燭ろうそくの燭台が、次から次にブツ  
 倒れて行つた。

そうして最後に、床の間の正面に端座している頭山満の左右に並んだ二つの燭台だけが消え残っていた。これは広間一面に血の雨を降らせ合っている殺陣連中が、敵も味方も目が眩くらんでいながらに、そうした頭山満の端然たる威風に近づくとハツと気が付いて遠ざかったからであつた。

その頭山満の左右と背後の安全地帯に逃げ損ねた芸者仲居が、小さくなつて固まり合つて、生きた空もなくなつていた。しかし頭山翁は格別変つた気色けしきもなく、活動のスクリーンでも見てるような態度で、眼前めのまえの殺陣を眺めまわしていたが、そのうちにフト自分の傍そばに一人の舞妓がヒレ伏しているのに気が付くと、片手でその背中を撫でながら耳に口を寄せた。

「オイ。今夜俺と一緒に寝るか」

これは頭山翁お気に入り仲居、筑紫お常婆さんの実話である。この婆さんも亦、また一通りならぬ変り物で、ミジンも作り飾りのない性格であつたから、機会があつたら別に紹介したいと思う。

この婆さんが黙つて死んだのでホツと安心して御座る北九州の名士諸君が多い事と思うが、しかしまだまだまだ御安心が出来ませぬぞ。この婆さんから筆者がドンナ話を聞いているか知れたものではないのだから……。

頭山翁のノンセンス振りと来たら又一段と非凡離れがしている。つまるところは聖人以外の誰にでも出来る平々凡々振りであるが、

その平々凡々振りが又なかなか容易に真似られないのだから不思議である。頭山翁の恐ろしさと偉大さは、その平々凡々なノンセンス振りの中に在ると云つてもいい位である。

嘗て頭山翁が持っていた、北海道の某炭坑が七十五万円で売れた事がある。

これを聞いた全日本の頭山翁の崇拜者連中、喜ぶまいことか、吾も吾もと押寄せて、当時靈南坂にあつたかの頭山邸は夜も昼も押すな押すなの満員状態を呈した。下では幾流れとなく板を並べた上に食器を並べて、避難民風にうんしゆう雲集した書生や壯士がいりか入わ代り立たちかわ代り飯を喰うので毎日毎日戦争のような騒動である。

また階上の翁の部屋では天下のインチキ名士連が翁を取巻いて借

銭の後始末、寄附、運動費、記念碑建立、社会事業、満蒙問題など、あらゆる鹿爪しかつめらしい問題を提ひげさせて、厚顔無恥に翁へ持ちかける。

翁はそんな連中に対して面会謝絶をしないのみか、どんな事を頼まれても否いやとは云わない。黙々として話を聞き終ると金かねならば金、印いんぎよう形なら印形を捺おしてやってミジンも躡ちゆうちよ躡ちよしない。市役所へハキダメの物でも渡すように瞬く間に七十五万円を費消してしまった。残るものは借金取りの催促と、雲集した書生壮士ばかりになってしまった。

それでも、まだ印形や金を借りに来るものがある。しかも以前に、二度と来られないようなインチキで翁を引っかけて行った人

間が、シヤアシヤアと又遣つて来るのである。それでも翁は何も云わずに無理算段をした金を遣り、印形を貸す。翁の一家は、そのために、七十五万円の富豪から一躍、明日の米あすも無い窮迫に陥つてしまつたが、それでも避難民張りの米喰虫は雲集するばかり……。

或る人が見かねて、

「これはイカン。何とかしてコンナ恥知らずの連中を逐おい出さねば、先生の御一家は野タレ死にをしますぞ」

と忠告した。翁はニコニコと笑つて疎髯そぜんを撫でた。

「まあそう、急いで逐い出さんでもええ。喰う物が無くなつたらどこかへ行くじやろ」

今一つノンセンス。翁と同郷の福岡にまとのはんすけ的野半助という愉快な代議士君が居た。(別人とも聞いているが)この代議士君……頭山先生は人物が出来とるから禅学をやったらキツト成功する……というので翁を掴まえ、禅学を説き立てた。翁は黙ってウンウンとうなずきながら聞いていたが、とうとうこの愉快な代議士君に引っぱり出されて鎌倉の円覚寺にしやくそうえんおしやう釈宗演和尚を訪う事になった。

釈宗演和尚は人も知る禅風練達の英僧、且つ雄弁家での野代議士の崇拜の的であつた。さるほどに宗演老師は天下の豪傑頭山翁の来訪を喜んで、禅学に就いて弁ずる事ややしほし良久おもむ。徐ろに翁に問

うて曰く、いわ

「あんたは前にも禅学を志された事がありますかな」

翁曰く、

「ウム。在る。しかし素人じゃ」

「ハハア。誰に就いて御修業なされましたかな」

翁そば傍に小さくなっている背広服の的野代議士をかえりみて、

「ナニ。コイツに習うただけじゃ」

釈宗演和尚啞然。

ツイこの間新聞を賑わした法政大学の騒動の時、教授の一人である山崎樂堂がくどう氏が喜多文子きたふみこ五段の紹介か何かで单身、頭山翁を



渋谷の自宅に訪問した。山崎樂堂氏は現代能評界に於ける一方の大御所で、単純率直、達弁の士である。

湯から上つて来た頭山翁は、翁の居間にチヨコンと坐っている樂堂君を見ると突立つたまま云つた。

「君一人か」

「ハイ」

と答えつつ樂堂君は簡単に一礼した。翁はこの時既に法政騒動なりゆきの成行と、樂堂氏の性格に関する概念を掴んでいたらしい事を、この簡単な問答の中から推測し得べき理由がある。

それから樂堂君が持つて生まれた快弁熱語を以て滔々とうとうと法政騒動の真相を披瀝ひれきすると、黙々として聞いていた翁は、やがて膝

の前に拵げられた法政騒動渦中の諸教授の連名に眼を落した。

「ウム。あんまり複雑で、ワシにはよくわからんがのう。この教授の中で正しい事を主張しよる奴の頭の上に丸を付けてくれんか」

樂堂君ちよつと呆れたが命令通りに自分の味方の諸教授連の頭の上に丸を付けて見せると翁はニコニコと笑顔を見せた。

「フーム。正しい奴の方が、不正な奴よりもズツト多いじゃないか」

「ハイ」

翁はマジマジと樂堂君の顔を見た。

「フフ。意気地いくじがないのう。人数にんずの多い方が負けよるのか」

樂堂君は返事に窮した。こう端的に子供アシライにされようとは思わなかったので、眼をパチパチさせていると翁は一層ニコニコし出した。

「ウムウム。まあええから、そげな騒動しよる連中を皆一緒にこへ連れて来なさい。わしが聞き役になってやるけに、両方で議論してみなさい。わしが正しい方に加勢してやる」

山崎樂堂氏は大喜びで帰ってこの旨を全教授に通告した。しかし折角の翁の心入れも、樂堂氏と反対側の諸教授の不出席によってオジャンとなったという。法政騒動裏面史の一席……。

どうしてコンナ巨大な平凡児が日本に出現したかという……つ

まり頭山満の立志伝を書けと云われると筆者も少々困る。頭山満翁には、元来立志伝なるものがない。古往今来、あらゆる英雄豪傑は皆、豪えらい者になろうと志を立ててから、その志に向つて勇往邁まいしん進したに相違ない。つまるところ志を立てなければ豪えらい者になれない訳であるが、頭山翁の生涯を見ると、その志なるものを立てた形跡がない。従つてその立志伝なるものの書きようがないから困るのだ。

勿論、頭山翁は若い時代に、維新後の日本が、西洋文化に心酔した結果、日に月に唯物的に腐敗墮落して行く状況を見て、これではいけないぐらいの事は考えたかも知れないが、それを救うためには自分が先まず大人物にならなければとか、実社会に有力な人

物にならなければとか、又は大衆の人気を集めなければとか、人格者として尊敬されなければ……とかいったようなセセコマしい志を立てた形跡はミジンもない。持つて生れた平々凡々式で、万事ありのままの手掴みで片付けて来ている。そこが頭山翁の古来ありふれた人傑と違っている点で、その平々凡々式の行き方が又、筆者をして頭山翁を好きにならしめた第一の条件になつてゐるらしいのだ。

事実、頭山翁を平凡人なりと断定されて腹を立てる取巻きの非凡人諸君の中には、頭山翁が超特級の非凡人でなければ差支える連中が多いようである。頭山翁の爪の垢を煎<sup>せん</sup>じて第一に服<sup>の</sup>まさせてやりたい人間は、頭山翁を取巻くそんな非凡人諸君に外ならない

のだ。

維新後、天下の大勢を牛耳つて、新政府の政治と、新興日本の利権とを併せて壟断ろうだんしようとして試みた者は、所謂、薩長土肥の藩閥諸公であつた。その藩閥政治の弊害を打破るべく今の議会政治が提唱され初めたものであるが、そもそもその薩長土肥の諸藩士が、王政維新、倒幕の時運に参劃さんかくし、天下の形勢を定めた中に、九州の大藩筑前の黒田藩ばかりが何故に除外されて来たのか。筑前藩には人物が居なかつたのか。もしくは居るとしても、天下を憂い、国を想う志士の気骨きこつが筑前人には欠けていたのかというところ、ナカナカそうでない。事實はその正反对で、恐らく日本広しと雖いえども北九州の青年ほど天性、国家社会を患うれうる気風を持つてゐる者

はあるまいと思われる。そうした事實は、明治、大正、昭和の歴史に出て来る暗殺犯人が大抵、福岡県人である实例を見ても容易に首肯出来るであろう。

維新前の黒田藩には、西郷南洲、高杉晋作に比肩すべき大人物がジャンジャン居た。流石さすがの薩州も一時は筑前藩の鼻息ばかりを窺うかがっていた位である。有名な野村望東尼ぼうとうにを仲介として西郷、高杉の諸豪は勿論、その他の各藩の英傑が盛んに筑前藩と交渉した形勢は、筆者の幼少の時に屢々しばしば、祖父母から語って聞かされた事である。但しそれ等筑前藩の諸英傑が、何故に維新以後、音も香においもなくこの地上から消え失せてしまったかという、その根元の理由に考え及ぶと、筆者も筆を投じて暗然たらざるを得ないもの

がある。

筆者の祖先は代々黒田藩の禄ろくを喰はんでいた者だから黒田様の事はあまり云いたくない。しかし何故に維新後に筑前閥が出来なかつたか……という真相を明らかにするためには、どうしても左さの二つの事実を挙げなければならぬ事を遺憾とする。

一、当時の藩公が優柔不断であつた事。

二、黒田藩士が上下を問わず人情に篤あつく、従つて藩公に対する忠志が、他藩の藩士以上に潔白であつた事。

ところでここで今一つ、了解しておいてもらわねばならぬ事は、昔の各藩の藩士が日本の国体を知らなかつた……換言すれば昔の



武士というものは、自分の藩主以外に主君というものは認識して  
いなかった事である。

これは誠に怪<sup>け</sup>しからぬ事で、今の人には到底考えられない、同  
時にあまり知られていない大きな事実で、同時に時節柄、御同様  
まことに不愉快な史実でもあり得るのであるが、しかしこの史  
実を認識しないで明治維新の歴史を讀んでいると飛んでもない錯  
覚に陥る事がある。すくなくとも王政維新なる標語を各藩に徹底  
させるのが、どうして、あんなに骨が折れたのかと不思議の感に  
打たれるので、黒田藩では特にこうした傾向が甚しかった事が窺  
われるようである。

そこへ藩公が優柔不断と来ているからたまらない。佐幕派が盛

んになると勤王派の全部に腹を切らせる。そのうちに勤王派が盛り返すと今度は佐幕派の全部を誅戮ちゆうりくする。そうすると藩士が又、揃いも揃った正直者ばかりで、逃げも隠れもせずハイハイと腹を切る……といった調子で、最初から一方にきめておけば、どちらかの人物の半分だけは救われたろうに、藩論が変るごに行き戻りに引つかかってバタバタと死んで行つたのだからたまらない。とうとう黒田藩の眼星めぼしい人物は、殆んど一人も居なくなつてしまった。たまたま脱藩して生野いくのの銀山で旗を挙げた平野次郎ぐらいが目つけもの……という情ない状態に陥つた。

しかし世の中は何が仕合わせになるか、わからない。こうした事情で明治政府から筑前閥がノックアウトされたという事が、そ

の<sup>のち</sup>後に於ける頭山満、平岡浩太郎、杉山茂丸、内田良平等々の所謂、福岡浪人の<sup>かつぽ</sup>濶歩の原因となり、歴代内閣の脅威となつて新興日本の氣勢を、背後から鞭撻しはじめた。……何も、それが日本のために仕合せであつたに相違ないと断定する訳ではない。随分迷惑な筋もあつたに違いないが、しかしそうした浪人の存在が、西洋文化崇拜の、唯物功利主義の、義理も、人情も、血も、涙も、良心も無い、厚顔無恥の個人主義一点張りで成功した所謂、資本家、支配階級の悩みの種となり、不言不語の<sup>うち</sup>中に日本人特有の<sup>のち</sup>生命も要らず名も要らず、<sup>かね</sup>金も官位も要らぬ<sup>てい</sup>底の清浄潔白な忠君愛国思想を天下に普及、浸潤せしめた功績は大いに認めなければならぬであらう。

従つて歴史に現われない歴史の原動力として、福岡人を中心とする所謂九州浪人の名を史上に記念しておく必要がないとは言えないであろう。

勿論浪人と雖もいえど生きた血の通う人間である。家族もあればきんた宰丸もある。生命もいのち金もかね官位も要らないとか何とか強情を張るにしても、そんな場面にぶつかると何と何とかが喰ひ繋いで生きて行かなければならない。況んやその命を捧げた乾児どもが、先生とか、親分とかいって蝟集して、たよりすが縋つて来るに於てをやるのである。浪人生活の悩みは実に繋つてこの一点に存すると云つても過言でない。

だから……という訳でもあるまいが、彼等浪人生活者の中にはいつもその浪人式の圧迫力を利用して何かの利権を漁あさっている者が多い。しかしその漁り得た利権を散じて、何等か浪人的立場に立脚した国家的事業に邁進するならばともかく、一旦、この利権を掴むと、今まで骨身にコタエた浪人生活から転向をして、フツツリと大言壮語を止め、門戸を閉して面会謝絶を開業する者が珍らしくない。又はこれを資本として何等かの政権利権に接近し、ついこの間まで攻撃罵倒していた、唯物功利主義者のお台所に出しゆつにゆう入して、不純な栄華に膨れ返っている者も居る。もつとも、そんなのは浪人の中でも、第一流に属する部類で、それ以下の軽輩浪人に到っては、浪人と名づくるのも恥かしいヨタモンとなり、

ギヤングとなり、又は、高等乞食と化しつつ、自分の良心は棚に上げて他人の良心の欠陥を攻撃し、頼まれもせぬのに天下国家、社会民衆の事を思っているのは自分一人のような事を云つて、放蕩無頼の限りをつくし、親兄弟を泣かせている者も居る。生命が惜しくて名誉が欲しくて、金や職業が、焦げつくほど欲しい浪人が滔々として天下に満ち満ちている状態である。

その中に吾が頭山満翁は超然として、一いちいきゆうよう 依旧様、金錢、名譽なんどは勿論の事、持つて生れた忠君愛国の一念以外のものは、数限りもない乾分、こぶん 崇拜者、又は頭山満の沽券と雖も、往來の古草鞋わらじぐらいにしか考えていないらしい。否いな現在の頭山満翁は既に

浪人界の巨頭なぞいう俗な敬称を超越している。そこいらにイクラでも居る好々爺ぐらいにしか自分自身を考えていないらしい。

嘗て筆者は数寄屋橋の何とか治療の病院に通う翁の自動車に乗させてもらったことがある。その時に筆者は卒然として問うた。

「どこか、お悪いのですか」

「ウム。修繕そそくりよるとたい。何かの役に立つかも知れんと思うて……」

その語気に含まれた老人らしい謙遜さは、今でも天籟てんらいの如く筆者の耳に残っている。

以下は筆者が直接翁から聞いた話である。

「世の中で一番恐ろしいものは嬖かかあに正直者じゃ。いつでも本気じやけにのう」

「四五十年も前の事じやった。友達の宮川太一郎が遣つて来て、俺に弁護士になれと忠告しおつた。これからは権利義務の世の中になつて来るけに、法律を勉強して弁護士になれと云うのじゃ。

その後、宮川は牛乳屋をやつておつたが、まだ元気で居るかのう。俺に弁護士になれと云うた奴は彼奴あいつ一人じゃ」

又或時傍の骨格逞しい眼付きの凄<sup>あ</sup>い老人に筆者を引合わせて曰く、

「この男は加波山かばさん事件の生残りじゃ。今でも、良え荷物え（国事犯的仕事。もしくは暗殺相手の意）があれば直ぐに引つ担いで行く



男じゃ」

「西郷南洲の旧宅を訪うたところが、川口雪蓬せつほうという有名な八や釜かまし屋おやしの爺おやしが居った。ドケナ（如何なる）名士が来ても頭ゴナシに叱り飛ばして追い返すという話じやつたが、俺は南洲の遺愛の机の上に在る大塩平八郎の洗心洞せんしんどう記きを引つ搦ふとんで懐こころ中に入いれて来た。それは南洲が自身で朱筆を入れた珍しいものじやつたが、その爺おやしが鬼おやしのようになつて飛びかかつて来る奴を、グツと睨にらみ付けてサツサと持つて来た。それから俺は日本廻国をはじめて越後まで行くうちに、とうとうその本を読み終つたので、叮ていねに礼を云うて送り返しておいたが、ちよつと面白い本じやつ

たよ」

これ程の豪傑、頭山満氏がタツタ一つ屁へこた古垂れた話が残っているから面白い。

その日本漫遊の途次、越後路まで来ると行けども行けども人家の無い一本道にさしかかった。同伴者がペコペコに腹が減つていたのだから無論、大食漢の頭山満氏も空腹を感じていたに相違ないのであるが、何しろ飯屋は愚か、百姓家すら見当らないので、皆空腹を抱えながら日の暮れ方まで歩き続けた。

そのうちに、やっと一軒の汚ない茶屋が路みちばた傍に在るのを発見したので、一行は大喜びで腰をかけて、何よりも先に飯を命じた。

ちようど頭山満氏が第一パイ目の飯を喰い終るか終らない頃、その茶屋の赤ん坊が、頭山満氏のお膳の上の副食物を眼がけて這いかかつて来るうちに、すこしばかり立上つたと思つたと、お膳の横に夥しい粘液を垂れ流し、その上に坐つて泣き出した。

それと見た茶屋の女房が、直ぐに走り上つて来て、何かペチャクチャ云い訳をしながら、自分の前垂れを外して、その赤ん坊の尻を拭い上げて、その粘液の全部を前垂れにグシャグシャと包んで上り口から投げ棄てると、そのまま臭気芬々たる右手を頭山満氏の前に差出した。

「へい。あなた、お給仕しましょう。もう一杯……」

頭山満氏黙々として箸<sup>はし</sup>を置いた。

「モウ良<sup>え</sup>え。お茶……」

頭山翁の逸話は数限りもない。別に一冊の書物になつて位だからここにはあまり人の知らないものばかりを選んで書いた。あんまり書き続けているうちに、諸君の神経衰弱が全癒<sup>な</sup>り過<sup>お</sup>ぎては却<sup>かえ</sup>つて有害だからこの辺で大略する。

次は現代に於ける快人中の快人、杉山茂丸翁に触れて見よう。

## 杉山茂丸

杉山茂しげまる丸なる人物が現代の政界にドレ位の勢力を持っているか、筆者は正直のところ、全然知らない。どんな経歴を以て、如何なる体験を潜りつつ、あの物すごい智力と、不屈不撓ふくつふとうの意力とを養い得て来たかというような事すら知らない。恐らく世間でも知っている人はあるまいと思われるので、筆者が知っているのは、そこに評価の不可能な彼……杉山茂丸の真面目しんめんもくがスタートして

いる事と、同時に、そうであるにも拘らずかかわ、その古今の名探偵以上の智力と、魅力とをもつて、政界の裡面を縦横ムジンに馳けまわり、馳け悩まして行く、その怪活躍ぶりが今こんにち日まで、頭山満翁と同様に、新青年誌上に紹介されないのは嘘だという事を知っているのみである。

杉山茂丸は福岡藩の儒者の長男として生れた。そうして維新改革後、父母と共に先祖伝来の知行所に引込み、そこで自ら田を作り、鋤くわの柄えや下駄を製作し、又は父から授かった漢学を父の子弟に講義し、小学校の先生もつとめた事もあるという。その他の智識としては馬琴ばきん、為ため永ながの小説や経国美談、浮城物語うきしろを愛読し、

ルツソーの民約篇とかを多少かじ嚙かじっただけである。中村正直まさなお訳の西国立志篇を読んだか読まぬかはまだ聞いた事がないが、いずれにしても杉山茂丸事、其日庵主きじつあんしゅの智情意やしなを培った精彩が、右に述べたような漢学ひ一と通りと、馬琴、為永、経国美談、浮城物語、西国立志篇程度のもので、これに、後年になつて学んだ義太夫の造詣ぞうけいと、聞き嚙り式きこりしきに学んだ禅語の情解的智識を加えたら、彼の精神生活の由来するところを掴むのは、さまで骨の折れる仕事ではあるまい。勿論彼の先天的に持つて生まれた智力と、勇氣は別問題にしての話である。

明治と共に生れ、明治と共に老いて来た彼は明治維新の封建制

度破壊以後、滔々とうとうとして転変推移する、百色ひやくいろ眼鏡式の時勢を見てじつとしておれなくなつた。このままに放任しておいたら日本は将来、どうなるか知れぬ。支那から朝鮮、日本という順に西洋に取られてしまうかも知れぬと思つたという。その時代の西洋各国の強さ、殊に英国や露西亞ロシアの強さと来たら、とても現代の青年の想像の及ぶところでなかつたのだから……。

杉山茂丸は茲ここに於て決然として起たつた。頑固一徹な、明治二十年頃まで丁ちよんまげ鬚まげを戴いて、民百姓は勿論、朝野の名士を眼下に見下していた漢学者の父、杉山三郎平灌園かんえんを説き伏せて隠居させ、一切の世事に関与する事を断念させて自身に家督を相続し、一身上の自由行動の権利を獲得すると同時に、赤手空拳、メクラ



滅法の火の玉のようになって実社会に飛出したのが、彼自身の話によると十六歳の時だったというから驚く。大学を卒業してもまだウジウジしていたり、親から月給を貰ってスイートホームを作ったりしている連中とは無論、比較にならない火の玉小僧であった。

その頃、彼の郷里、福岡で、豪傑ゴツコをする者は当然、一人残らず頭山満の率ゆる玄洋社の団中に編入されなければならなかった。だから彼も必然的に頭山満と交を結んで、濛々たるまじわり関羽かんうひ鬚げを表道具として、玄洋社の事業に参劃し、炭坑の争奪戦に兵へい站たんの苦勞を引受けたり、有名な品川弥二郎の選挙大干渉に反抗して壮士を指揮したりした。それが彼の二十歳から二十四五歳前

後の事であつたらうか。

しかし彼は他の玄洋社の諸豪傑連いさぎせんと聊か選せんを異にしていた。その頃の玄洋社の梁山泊りょうざんぱく連は皆、頭山満を首領とし偶像として崇拜していた。頭山満が左の肩を揚げて歩けば、玄洋社の小使へこおびまで左の肩を怒らして町を行く。頭山満が兵児帯へこおびを掴めば皆同じ処を掴む……といった調子であつたが、杉山茂丸だけはソナナ真似を決してしなかつた。否、むしろ玄洋社のこうした気風に対して異端的な考えをさえ抱いていたらしい事が、玄洋社を飛出してから以後の彼の活躍ぶりによつて窺うかがわれる。

彼は玄洋社の旧式な、親分乾分式こぶんの活躍、又は郷党的な勢力を

以て、為政者、議會等を圧迫脅威しつつ、政界の動向を指導して行く遣やりくち口を、手ぬるしと見たか、時代後れおくと見たか、その辺の事はわからない。しかし、たしかにモット近代的な、又は實際的な方法手段をもつて、独力で日本をリードしようと試みて来た人間である事は事実である。

事実、彼には乾兎こぶんらしい乾兎は一人も居ない。乾兎らしいものが近付いて来る者はあつても、彼の懐ふところ中から何か甘い汁を吸おうと思つて接近して来る者が大部分で、彼の人格を敬慕するといふよりも、彼の智恵と胆力を利用しようとする世間師の部類に属する者が多く、それ等の煮ても焼いても喰えない連中を巧みに使ひこなして自分の仕事に利用する。そうして利用するだけ利用し

て最早もはや使い手がないとなると弊履へいりの如く棄ててかえりみないところ  
ろに、彼の腕前のスゴサが常に發揮されて行くのである。嘗て筆  
者は彼からコンナ話を聞いた。

「福沢桃介という男が四五年前に、福岡市の電車を布設するため  
に俺に接近して来たことがある。俺は彼に利用される振りをして、  
彼の金かねを数万円使い棄てて見せたら、彼奴きやつめ、驚いたと見えて、  
フツツリ来なくなつてしまつた。ところが、この頃又ヒヨツコリ  
来はじめたところを見ると、何喰わぬ顔をして俺に仇討あだうちをしに  
来ているらしいから面白いじゃないか。だから俺も一つ何喰わぬ  
顔をして彼奴あだに仇を討たれてやるんだ。そうして今度は前よりも  
ウンと彼奴の金を使つてやるんだ。事によると彼奴めが俺あだに仇を

討ち終おほせた時が身代限りをしている時かも知れぬから見ておれ」

ちなみ

因ちなみに彼……杉山其日庵主は、こうした喰うか喰われるか式の相手に対して最も多くの興味を持つ事を生涯の誇りとし楽しみとしている。そうして未だ嘗て喰われた事がないことを彼に対して野心を抱く人々の参考として附記しておく。

話がすこし脱線したが、其日庵主は玄洋社を離脱してから海外貿易に着眼し、上シャンハイ海ホンコンや香港あたりを馳つぶさけまわって辛酸を嘗なめた。

その上海や香港で彼は何を見たか。

その頃は支那に於ける欧米列強の国権拡張時代であった。従つ

て彼、杉山茂丸は、その上海や香港に於て、東洋人の霊と肉を搾取しつつ鬱積し、醜酵し、糜爛びらんし、毒化しつつ在る強烈な西洋文化のカクテルの中に、所謂白禍はっかの害毒の最も惨烈なものを看取したに違いない。資本主義文化が体现するところの、虚無思想、唯物思想の機構の中に、血も涙も無い無良心な、獸性丸出しの優勝劣敗哲学と、功利道德の行き止まり状態を発見したに違いない。そうして王政維新後、滔々たる西洋崇拜熱と共に鵜呑うのみにされて来た、こうした舶来の思想に侵犯され、毒化されて行きつつ在る日本の前途を見て、逸いちはや早く寒毛樹立したに違いない。

当時の藩閥と、政党者流の行き方は、正にこの西洋流の優勝劣敗哲学、唯物一点張りの黄金崇拜式功利道德の顕現であった。外

国の政治組織を日本の政体の理想とし、権利義務式の功利道徳、法律的理論を以て日本の国体を論じ合いつつ上下共に怪しまなかつた時代であつた。

その中に、藩閥にも属せず、政党の真似もしない玄洋社の一派は、依然として頭山満を中心として九州の北隅に蟠まりつつ、依然として旧式の親分乾分、友情、郷党関係の下に、国体擁護、国粹保存の精神を格守しつつ、日に日に欧化し、墮落して行く藩閥と政党を横目に睨んで、これを脅威し、戦慄せしめつつ、無けなしの錢を掻き集めては朝鮮、滿蒙等の大陸的工作に憂身を窶して来た。

その中に政党屋流にも墮せず、玄洋社流にも共鳴しなかつた彼、

杉山其日庵主は、单身孤往こわう、明治後半期の政界の裡面にグングンと深入りして行つた。

「玄洋社一流の真正直に国粹的なイデオロギーでは駄目だ。将来の日本は毛唐と同じような唯物功利主義一点張りの社会を現出するにきまつている。そうした血も涙も無い惨毒そのもののような社会の思潮に、在来の仁義道德『正直の頭こゝろに神宿る』式のイデオロギーで對抗して行こうとするのは、西洋流の化学薬品に漢法の振出し薬を以て對抗して行くようなものだ。その無敵の唯物功利道德に対して、それ以上の権謀術数と、それ以上の惨毒な怪線を放射して、その惨毒を克服して行けるものは天下に俺一人しか居ない筈だ。だから俺は、俺一人で……ホントウに俺一人で闘つて



行かねばならぬ。俺みたいな人間はほかに居る筈がないと同時に、俺みたいな真似は他人にさせてはならないのだ。だから俺は、どこまでも……どこまでも俺一人で行くのだ」

彼は若いうちに、そう悟り切ってしまったらしい。そうして今日までもこうした悟りを以て生涯を一貫して行く覚悟らしく見える。

それから後の彼の<sup>のち</sup>は実際、目的のために手段を選まなかった。そうして乾児<sup>こぶん</sup>らしい乾児を一人も近づけないまま、万事タツタ一人の智恵と才覚でもって着々として成功して来た。

彼はソレ以来いつも右のポケットに二三人の百万長者を忍ばせ

ていた。そうして左のポケットにはその時代時代の政界の大立物を二三人か四五人忍ばせつつ、彼一流の活躍を続けて来た。「俺の道楽は政治だ」と口癖のように彼は云い続けて来たのであるが、しかし彼が果して、どんな政治を道楽にして来たか、知っている者は一人も居ない。同時に彼の左右のポケットに入れられている財界、政界の巨頭連が、どうして彼のポケットに転がり込んで来たか……もしくは転がり込ませられて来たか、知っているものは一人も居ないようである。そうして唯驚いて、感心して、彼の事を怪物怪物と評判して、彼のためにチンドン屋たるべく利用されているようである。

事実、彼は現代に於ける最高度の宣伝上手である。彼に説明させると日清日露の両戦争の裡面の消息が手に取る如くわかると同時に、その両戦役が、彼の指先の加減一つで火蓋を切られた事が首肯されて来る。世人はだから彼を<sup>あだな</sup>緋名して<sup>ほらまる</sup>法螺丸という。しかし一旦、彼に接して、彼の生活に深入りしてみると、その両戦役前後に於ける朝野の巨頭連は皆、彼の深交があつた事がわかる。事ある毎に<sup>ごと</sup>彼に呼び付けられて、お説教を喰つて引退つていた事が、事実上に証明されて来る。そこで、イヨイヨホントウに心の底から驚いて、彼に何等かの御利益を祈願すべく、お<sup>さいせん</sup>賽銭を懐にして参詣して来る実業家が何人居るかわからない。そうして彼が絶対にお賽銭を取らない神様である事がわかるにつれてイヨイ

ヨ崇拝敬慕の念を高める事になって来る。

そんな人間にはイクラ云つて聞かせる者が居てもわからない。

「君は法螺丸の法螺に引つかかっているのだ。そんな朝野の名士連は、皆、法螺丸に一身上の秘密や弱点を握られているか又は、彼等自身が法螺丸の巧妙、精密を極めた話術に魅せられて、法螺丸にそれだけの実力があるものと信じさせられているのだ。彼が古今無双のシャーロック・ホームズであると同時に、前代未聞のアルセーヌ・ルパンである事を君は知らないのだ。彼はそんな調子で現代日本の政界財界に、あらゆる機会を利用して法螺の空小切手を濫<sup>らんぱつ</sup>発している。その空小切手を掴んだ連中は、その空小切手を潰されちや堪らないもんだから、寄つてたかつてその空小

切手を裏書きすべく余儀なくされているのだ。福沢桃介が法螺丸にシテヤラレた話だつて、眉まゆつば唾つばものかも知れないんだよ」

と狐を落すように卓テーブルをたたいても、

「イヤ。たしかに法螺丸は豪えらいと思うね。それだけの空小切手を廻すだけでも、並の人間には出来ない事じゃないか」

といったような事になってしまう。

事実、法螺丸の法螺は、大隈重信の法螺とは段違いのところがある。少くとも大隈重信の法螺は、百科辞典の範疇いを出でないのに対して、法螺丸の法螺はたしかに百科辞典を超越した一種の洒し落やれけ気と魔力とを兼ね備えている。たとえば医学博士を掴まえて医

術の講釈をこころみ、禪宗坊主を向うに廻わして禅学の弊害を説教する。三井物産の重役が来ると不景気の救済策を授け、外務大臣が来ると軍部の実力を説いて感心させ、軍部の首脳部と会談すると外交の妙諦を説法して頭を掻かせる。皆、彼、彼、法螺丸一流の悪魔のような理解力と、記憶力を基礎として、彼一流の座談の妙諦を駆使した、所謂、巧妙な空小切手であるのみならず、三時間でも五時間でもタツタ一人で喋舌しゃべっておいて、そんな連中が帰ると直ぐに、あとから訪問して待つていた客に、

「イヤ。どうもお待たせしました。彼奴きゃつが来ると長尻でね。僕のを煩悶解決所と心得て一人で喋舌しゃべって帰るのでね」

なぞとズバズバやるので、相当気の強い連中でもグラグラと参

つてしまう。法螺丸の法螺がイヨイヨ後光がさして来る事になる。

次に、法螺丸の法螺の実例を列举してみる。

医学博士を掴まえて曰く、<sup>いわ</sup>

「医者という商売は、商売とは云えませんね。何より先に脈を手  
に取る瞬間から、こいつを殺してやろうとは思っていない。たし  
かに助けてやろうと思つているのだから、商売とは云い条、全然、  
商売気を離れている。人の面さ<sup>つら</sup>え見れば儲けてやろうと思つてい  
る奴ばかり多い世の中にタツタ一つ絶対に信用出来るのはお医者  
様ですね」

と来るから大抵の医学博士は感心してしまう。すっかり喜んで

しまつて、自分の苦心談や、研究の内容などをドン底まで喋舌つてしまう。法螺丸は又、そいつを地獄耳の中に細大洩らさずレコードしておいて、ほかの医学博士に応用する。

「<sup>ドイツ</sup>独逸の医学も底が見えて来ましたね。たとえばインシュリンの研究なんか……」

なぞと引つ<sup>かぶ</sup>冠せて来るから肝を潰してしまふ。その肝の潰れた博士を選んで法螺丸は、政界の有力者の処へ腎臓病のお見舞に差し遣わすのだから深刻である。

禅宗坊主が寄附を頼みに来ると法螺丸曰く、

「禅宗は仏教のエキスみたいなものですな。面壁九年といつて、<sup>だるま</sup>釈迦一代の説法、各宗の精髓どころを<sup>ランビキ</sup>蒸溜器に容れて



煎<sup>せん</sup>じて、煎じて、煎じ詰める事九年、液体だか気体だかわからな  
い。マツチで火を点<sup>つ</sup>けるとボーツと燃えてしまつて、アトカタも  
残らない。最極上のアルコールみたいな宗旨が出来上つた。とこ  
ろで、それは先ず結構としても、その最極上のアルコールをアラ  
キのまま大衆に飲ませようとするからたまらない。大抵の奴は眼  
を眩<sup>ま</sup>わして引つくり返つてしまふ。それから中毒を起して世間の  
役に立たなくなる。物を言いかけても十分間ぐらい人の顔をジイ  
ツと見たきり返事をしないような禅宗カブレの唐<sup>とう</sup>変<sup>へん</sup>木<sup>ぼく</sup>が出来上  
る。又は浮世三分五厘<sup>ぶ</sup><sub>りん</sub>、自分以外の人間はミンナ影法師<sup>かげほし</sup>ぐらいに  
しか見えない。義理人情を超越してしまふから他人の物も自分の  
ものも区別が付かない。女も、酒も、金も、職業も要らない。そ

の代り縦の物を横にもしない。電車に乗せるたんびに終点まで行つてしまふような健康な精神病者や痴呆患者が出来上る。そんな禅宗病患者が殖ふえたら日本は運の尽きだと思ひますよ。私も考えますから、貴方がたもよく考えて下さい」

といったような事を云われると、相手も宗教の問答に來たのじやない。寄附を頼みに來た弱味があるのだから歩ふが悪い。「喝かつ」  
とも何とも云わずに歸つてしまふ。

潰れかかった銀行屋さんが來て、救いを求めると、法螺丸は背中を撫でてやらんばかりにして慰める。曰く、

「そんなに心配しているとその心配で銀行が潰れてしまふよ。百

円紙幣が銀行を經營しているのじゃない。人間が百円紙幣を使つて銀行をやっているんだから、人間さえシツカリしておれば、潰れる氣づかいはないもんだよ。金がかね無くなると同時に銀行が潰れるように思うのは、世間を知らないで算盤そろばんばかり弾はじいている人間特有の錯覺なんだよ。ウンと頑張り給え。世間は広いんだ。人間万事、氣で持つて行くんだ。金なんか氣持ちの家来へみたいなもんだ。コンナ話がある聞き給え。二百万や三百万の金は屁へでもなくなる話だ。

日清戦争以前の事だったが、支那の横暴を憎み、露西亞ロシアの東方経略を警戒した玄洋社の連中が、生命いのち知らずの若い連中を滿蒙の野やに放つて、恐支病と恐露病に陥っている日本の腰抜け政府を激

励し、止むを得なければ玄洋社の力で戦争の火蓋を切ってやろう  
 というので、寄ると触ると腕を撫でたり四股を踏んだりしたもん  
 だが、生憎あいにくな事に金が一文も無い。むろん頭山満も貧乏の天井  
 を打っている時分だ。俺にも相談だけはしてくれたが、三月縛りみつきしば  
 三割天引という東京切つてのスゴイ高利貸連を片端かたっぱしから泣か  
 せて、

かくばかりたふしても武蔵野の

原には尽きぬ黄金草こがねぐさかな

なんてやってた時代だから満蒙経営どころか、わが家賃を払う  
 のすら勿体ない非常時なんだ。

そこへ誰が聞いて来たか、ドエライ話が転がり込んで来たもん

だ。その頃まだ元気で居た日本一の正直物、大井憲太郎という爺さんが、眼の色を変えて担ぎ込んだ話のようにも思うが、とにかくこんな話だ。……その頃まで北海道の砂金といったらカリフォルニアの向う張る勢いで、しかも夕張川の上流の各支流の源泉附近は到る処、砂金ならざるなしという評判で、全国の成金病患者がワンワンと押しかけていたものだ。……ところが不思議な事に、その砂金が、本流の夕張川の下流に在る名前は忘れたが一つの大きな滝を段階として、その下流には一粒の砂金も見当らない。つまるところ、その滝壺の底にはイザナギ、イザナミの尊みこと以来、沈澱している砂金が、計算してみると四百億円ぐらいは在るらしい……というのだ。エライ事を考えたもんだ。

これには流石さすがの頭山満もチヨイト本気になつたらしい。俺も貧すれば鈍するでスツカリ共鳴してしまつて技師を派遣する費用の調達を引受ける事になつた。つまりその滝の横に運河を掘つてその滝の上流を堰せき止めて、滝壺の水を掻き干して、底の方に溜まつている四百億円の砂金をスコップで貨車へ積み込もうという曠こ古うごの大事業だ。その費用を調達のために俺は白真剣しらしんけんになつて東奔西走したものだ。その頃雇つていた抱え俵くるまの車夫に、もしこの事業に成功した暁には、貴様に米俵一杯の砂金を遣ると云つたもんだから、真まに受けた俵夫しやぶの奴め真夏の炎天をキチガイのように走りまわつたものだが、一方にこの話が玄洋社の連中に伝わつた時の壮士連の活気付きようと来たら、それこそ前代未聞の壯觀だ

ったね。四百億円あれば、朝鮮、支那、満洲、手に唾つばきして取るべしと云うのだ。アトは宜しくお願いしますというので弦つるを離れた矢のように、手弁当でビュービューと満洲へ飛んで行く。到る処に根を下し、羽根を拵げて、日本内地から来る四百億円を待つている……という勇敢さだ。その中うちに俺の軍資金調達が不可能になつて、この話はオジャンになつた。一番残念がったのは俺の俵くるま屋やだつたが、満洲に根を下した豪傑連は、そんな事はわからない。一秒もジツとしておれない連中だからグングンと活躍を続け行く。日清日露の両戦役に彼等の活躍がドレ位助けになつたかわからない。現在の満洲国の独立は夕張川の四百億円の御蔭と云つてもいい位だ。否、玄洋社連の四百億円の夢が、満洲に於て現

実化されたと云つてもいいだろう。世の中というものは、そんなものだ。シツカリさえしておれば恐ろしい事はない。気を大きく持つて時節を待ち給え。四百億円という大戦後の独逸を、カイゼルもヒンデンブルグもヒトラーもコミにして丸ごと買える金額だからね。それ位の夢は時々見ていないと早死にをするよ。ハハハハ

可哀相にスツカリ気まりが悪くなった銀行家は、法螺丸の俵くるま引きにも劣るといふミジメな烙印を捺おされて、スゴスゴと歸つて行く。

デモクラシーと社会主義の華やかなりし頃、法螺丸の処に居る秘書役みたいな書生さんが、或る時雑誌を買つて来て、その中に



書いてあるサンジカリズムの項を、先生の法螺丸氏に読んで聞かせた。するとその翌<sup>あく</sup>る日のこと、東京市長をやっていた親友の後藤新平氏が遣つて来たので、法螺丸は早速引つ捉えて講釈を始めた。

法螺丸「貴公はこの頃<sup>フランス</sup>仏蘭西で勃興しているサンジカリズムの運動を知っているか」

後藤新平「何じやいサンジカリズムというのは……」

法螺丸「これを知らんで東京市長はつとまらんど。今の社会主義やデモクラシーなんぞよりも数層倍恐ろしい破壊思想じや」

後藤新平「ふうむ。そんな恐ろしい思想があるかのう。話してみい」

法螺丸「心得たり」

というので、昨日きのう聞いたばかりのホヤホヤのサンジカリズムの話を、その雑誌丸出しの内容に輪をかけたケレンやヨタ交りに、面白おかしく講釈すること約二時間、流石さすがの後藤新平氏も言句も出ずに傾聴すると「シンペイ」するなども何とも云わずに、大急ぎで帰って行つた。アトに昨日雑誌を読んで聞かせた書生さんが手に汗を握つたままオロオロしているのに気が付いた法螺丸、ハツとするにはしたらしいが、何喰わぬ顔で、

「面白いだろう。後藤新平というのは存外正直もんじやよ」

そもそも杉山法螺丸が、どこからこれ程の神通力を得て来たか。

生馬いきうまの眼を抜き、生猿いきざるの皮を剥はぎ、生きたライオンの歯を抜く底ていの神変不可思議の術を如何なる修養によつて会得して来たか。

請う先ず彼の青年に説くところを聞け。

「竹片たけぎれで水をタタクと泡が出る。その泡が水の表面をフワリフ

ワリと回転して、無常の風に会つて又もとの水と空気にフツと立ち帰るまでのお慰みが所謂人生という奴だ。それ以上に深く考える奴がすなわち精神病者か、白痴で、そこまで考え付かない奴が所謂オツチヨコチヨイの蛆虫うじむし野郎だ。この修養が出来れば地蔵様でも閻魔大王えんまでも手玉に取れるんだ。人生はそう深く考えるものじゃない。あんまり深く考えると、人生の行き止まりは三原山と華厳の滝以外になくなるんだ。三十歳まで大学に通つてベース

ボールをやる必要なんか無論ないよ」

「其日庵という俺の雅号の由来を知っているかい。これは俺の処世の秘訣なんだから、少々惜しいが説明して聞かせる。論語の中で会参は日に三度己みたぢのれをかえりみると云った。基督キリストは一日の苦勞は一日にて足れりと云ったが、俺は耶蘇教ヤソではないが其日暮そのひぐらしが一番性に合っているようだね。……まず……朝起きると匆々から飯を喰う隙もないくらいジャンジャン訪問客が遣つて来る。一番多いのが就職口と高利貸で、親の脛すねを噛じつて野球をやったり、女給の尻を嗅ぎまわったり、豆腐屋の喇叭ラッパみたいな歌を唄ったりした功勞によつて卒業免状という奴を一枚貰うと、そいつをオデコの中央に貼り付けて就職の権利でも授かった気で諸官庁会社を

押しまわる。親爺おやじも亦親爺またで、倅せがれを育てるのと債券を買うのと同じ事に心得ているんだから遣り切れない。そこで就職出来ないとなると世の中が悪いと云って俺の処へ訴えに来る。俺が世の中じやなし、知った限りではないんだが、そんな連中もたしかに世の中の一部で、所謂大衆に相違ないんだから仕方なしに俺の責任みたような顔をして文句を聞いてやるんだ。高利貸は又高利貸で、勝手に俺の印いんぎょう形を信用して、手前一存の条件を附けて貸しやがった連中だ。中には一面識もない奴の借銭も混っているんだが、俺が議会に命じて作らせた法律というものを楯に取って来るから仕方ない。日歩ひぶ五銭ぐらいを呉れるつもりで会ってやるんだ。その次が大臣病患者、政権利権の脾胃ひいき虚病み、人格屋の私生児の後

始末、名家名門の次男三男の女出入りの尻拭い、ボテレン芸者の身上相談、鼻垂れ小僧と寝小便娘の橋渡しに到るまで、アラユル社会の難物ばかりが、ハキダメみたいに杉山博士の診察、投薬を仰ぎに来る。しかもどの患者もどの患者も方々の名医の処を持つてまわつて、コジラかした上にもコジラかした救うべからざる鼻ポンや骨がらみばかりがウヨウヨたかつて来るんだから敵かなわない。

もつともそういうこつちもお上かみに鑑札を願っている専門医じゃないのだから、診察料や薬札は一切取らない。その代りに万一助からなくたつて責任は無い。殺すつもりで生かしたり、生かすつもりで殺したりする事も珍らしくないんだが、毛頭怨まれる筋はないんだから呑気な商売だ。ともかくも会つてやつて、ともかく

も病状を聞いてやる。金が有れば払ってやる。面識がある奴には紹介してやる。信用があれば小切手でも何でも書いてやる。それでも方法の附かない難物は、考えておいてやるから明日来いと云つて一先ず追つ払っておく。むろん明日来たつて明後日来たつてあさつて成算の立ちつこない難物ばかりだが、アトは野となれ山となれだ。その日一日を送りさえすればいいのだから、他人の迷惑になろうが、あと後になつて大事件になることが、わかり切つていようが構わない。盲目滅法めくらめつぼうに押しまくつてその日一日を暮らす。それから妻子つまこや書生の御機嫌取りだが、これも生きている利子と思えば何でもない。好きな小説本か何か読んで何も考えずに寝てしまふ。

サテ翌る朝になつたと見えて雀の声がする。パツチリと眼を開

くとサア今日こそは大変な日だぞ。昨日きのうの尻は勿論の事、一昨日おととい、

再昨日さきおととい……

再昨日……昨年、一昨年の尻が一時に固まつて来る日だぞと覚

悟して待つてしているとサア来るわ来るわ。あらん限りのヨタや出鱈でた

目らめを並べたり、

恩人を裏切つたり、正直者を欺だましたりした方法で

もつて押し送つて来た過去の罪業が、一時に聞とぎの声をあげて押し

かけて来る。貴様が教えた通りに喋しゃべつたら議会の空気が悪化して

解散になりそうになった。万一解散になったら俺は一文も運動費

が無いとあれほど云つておいたではないか、という代議士や、貴

方のお世話で娘を嫁に遣つたら相手は梅毒の第三期だったと大声

をあげて泣く母親や、先生から貰つた小切手は銀行で支払ひませ

んというのや、貴方の紹介状に限つて大臣は会わないと云います。



其日庵の紹介には懲り懲りだという話です。お蔭で会社が潰れて二百名の職工が路頭に迷いますというのや、貴方の乾分の弁護士の御蔭で三年の懲役が五年になりました。そのお礼を申上げに来ましたという紋々もんもん俱利迦羅くりからなどが、眼の色を変えて三等急行の改札口みたいにに押かけて来る。地獄に俺みたいな仏様が居るか居ないか知らないが、居るとしたら読むお経は一行も無いね。空気が在るから仕方なしにに生きている。生きているから腹が減るのは止むを得ないという連中ばかりが、元来持つて行き処のない尻を俺の処へ持つて来るんだ。まあまあ待ったり、君等は自分の用事さえ済めば、アトは俺が死んでも構わない了りようけん。簡かんだろう。自分の尻を他人に拭いてもらう奴を小児こどもといい、自分の垂れ物を自

分で片付ける奴を大人という。君は元来大人なのか小供なのか。前をまくって見せる……とか何とか云って追っ払ってしまおうが、その手の利かない奴は、仕方がないから前に倍した手酷い手段で押し片付けて行く。明日の事は考えない。きようさえ片付けばいいという方針だから、何を持って来たって驚かないんだ。

もつと尤もこの頃は年を老とつたせいか、人に会うのと、字を書くのが大儀になった。心臓にコタエて息が切れたり脈が結けつたい滞したりするから、面会と字書きを御免蒙っている。一方から云うと、そんな自分の尻を持って余しているような連中の尻をイクラ拭いてやつたって相手は当り前だと心得ている。俺に尻を拭いてもらうのを楽しみにイクラでも不始末を仕出かす事になる。結局、そんな世

話を続行するのは日本亡国の原因を作るようなものだとつくづくこの頃思い当ったせいでもあるんだがね」

こうして縷述るじゆつして来ると彼の法螺の底力は殆んど底止ていしするところを知らない。

「自ら王将を以て任ずる奴は天下に掃き棄てる程居る。金将たり、銀将たり、飛車角、桂香を以て自ら任じつつ飯喰い種にして行く者が滔々として皆然しかりであるが、その飯喰い種を皆棄てて、将棋盤の外にいて将棋を指している奴は、なかなか居るものでない。だから世間の事が行き詰まるんだ。あぶなくて見ていられなくなるんだ」

という、頭山満以上の超凡超聖的彼自身の自負的心境を、そつくりそのまま認めてやらなければならなくなつて来るのであるが、彼とても人間である。時と場合によつては平凡人以下の血もあり涙もあるばかりでない。彼の手に合わない人物も多少は出現して来るのだから面白い。

頭山満曰く、

「杉山みたような頭の人間が又と二人居るものでない。彼奴は玄きやつ洋社と別行動を執とつて来た人間じゃが、この間久し振りに合うた時には俺の事を頭山先生と云いおつた。ところがその次に会うた時は『頭山さん』とさん付けにして一段格を落しおつたから、感心して見ていると、三度目に会つた時は頭山君と云うて又一段調

子を下げおった。今に俺を呼び棄ての小僧扱いにしおるじやろう  
と思うて楽しみにして待つとる」

これは杉山法螺丸の一番痛いところに軽く触れた言葉で、実に  
評し得て妙と云うよりほかはない。

又或る時、杉山法螺丸が何かのお礼の意味か何かで、頭山満に  
千円以上もする銘刀を一口贈った事がある。無論、飛切り上等  
の拵こしらえつ附つききで、刀剣道楽の大立物其日庵主が大自慢のシロモノ  
であったが、その後のち、法螺丸が頭山満を訪問して、

「どうだ。あの刀は氣に入ったか」

と云うと頭山満ニツコリして曰く、

「うむ。あれはええ刀じゃった。質屋に持って行ったら三十円貸

したぞ。又あつたら持つて来てくれい」

其日庵主もこれには少々驚いたらしい。帰つて来て曰く、

「モウ頭山に物は遣らぬ。あいつの俵に遣つた方がええ」

法螺丸には男の児が一人しか居ない。これが親仁おやしとは大違いの不肖の子で、

「俺みたいな人間になる事はならぬぞ」

という訓戒を文字通りに固く守つて、托鉢坊主になつたり、謡曲の師匠になつたり又は三文文士になつたりして文字通りに路頭に迷いそうなので、親仁も呆れて、感心な奴だと賞めながら月給を支給している。

「俺の倅は実に呆れた奴だ。小説を出版してくれと云うから読んでやると、最初の一二行読むうちに、何の事やらわからなくなる。屁へのような事ばかりを一生懸命に書き立てているのでウンザリしてしまう。たまたま俺にわかりそうな処を読んでみるとツイこの間、ヒドク叱り付けてやった俺の云い草をチャント記憶おぼえていやがって、そっくりその通りを小説の中味に採用していやがるのには呆れ返った。娘を売って喰う親は居るが、親を売って喰う倅が居るもんじやない。一生涯あの倅だけは叱らない事にきめた」

ちなみ 因に、その倅の筆ペンネーム名は夢野久作という。親父の法螺丸が山のように借銭を残して死んでやろうと思つているとは夢にも知らずに、九州の香椎かしいの山奥で、妻子五人を抱えて天然を楽しんでい

る。焼野の雉子きぎす、夜の鶴。この愚息きぎすなぞも法螺丸にとっては、頭山満と肩を並べる程度の苦手かも知れない。



## 奈良原到

(上)

前掲の頭山、杉山両氏が、あまりにも有名なのに反して、両氏の親友で両氏以上の快人であつた故奈良原いたる到翁にがあまりにも有名でないのは悲しい事実である。のみならず同翁の死後いへどと雖も、同

翁の生涯を誹謗し、侮蔑する人々が尠くないのは、更に更に情ない事実である。

奈良原到翁はその極端な清廉潔白と、過激に近い直情径行が世に容れられず、明治以後の現金主義な社会の生存競争場裡に忘却されて、窮死した志士である。つまり戦国時代と同様に滅亡した英雄の歴史は悪態に書かれる。劣敗者の死屍は土足にかけられ、唾せられても致方がないように考えられているようであるが、しかし斯様な人情の反覆の流行している現代は恥ずべき現代ではあるまいか。

これは筆者が故奈良原翁と特別に懇意であつたから云うのではない。又は筆者の偏屈から云うのでもない。

志士としては成功、不成功などは徹頭徹尾問題にしていなかつた翁の、徹底的に清廉、明快であつた生涯に對して、今すこし幅広い寛容と、今すこし人間味の深い同情心とを以て、敬意を払い得る人の在りや無しやを問いたいために云うのである。

その真黒く、物凄く輝く眼光は常に鉄壁をも貫く正義觀念を凝視していた。その怒つた鼻。一文字にギューと締つた唇。殺氣を横たえた太い眉。その間に凝結、ほうはく 磅ほうはく している凄愴せいそうの氣魄はさながらに鉄と火と血の中を突破して来た志士の生涯の断面そのものであつた。青黒い地獄色の皮膚、前額に乱れかかつた縮れ毛。よろい 鎧よろいの仮面に似た黄褐色の怒髭どし、乱髯らんぜん。それ等に直面して、その黒い瞳に凝視されたならば、如何なる天魔鬼神でも一ひと縮ちぢみに縮

み上ったであろう。況いわんやその老いて益々筋骨隆々たる、精悍せいこんそのもののような巨軀こくうに、一刀を提ひっさげて出迎えられたならば、如何なる無法者いゑどと雖も、手足が突張いつて動けなくなつたであろう。どうかした人間だつたら、その翁の真黒い直視に会つた瞬間に

「斬られたツ」という錯覚を起して引っくり返つたかも知れない。

事実、玄洋社の乱暴者の中ではこの奈良原翁ぐらい人を斬つた人間は少かつたであろう。そうしてその死骸を平気で蹴飛ばして瞬またたき一つせずに立去り得る人間は殆んど居なかつたであろう。奈良原到翁の風貌には、そうした冴え切つた凄絶な性格が、ありのままに露出していた。微塵みじんでも正義そむに背く奴は容赦なくタタキ斬り蹴飛ばして行く人という感じに、一眼ひとめで打たれてしまうのであつ

た。

この奈良原翁の徹底した正義観念と、その戦慄に価する実行力が、世人の嫌忌を買ったのではあるまいか。そうしてその刀折れ矢尽きて現社会から敗退して行つた翁の末路を見てホツとした連中が「それ見ろ。いい気味だ」といったような意味から、卑怯な嘲罵を翁の生涯に対して送つたのではあるまいか。

実際……筆者は物心付いてから今日まで、これほどの怖い、物すごい風采をした人物に出会つた事がない。同時に又、如何なる意味に於ても、これ程に時代離れのした性格に接した事は、未だかつ曾て一度もないのである。

そうだ。奈良原翁は時代を間違えて生れた英傑の一人なのだ。

翁にしてもし、元龜天正の昔に生を稟<sup>う</sup>けていたならば、たしかに天下を聳<sup>しょう</sup>動<sup>どう</sup>していたであろう。如何なる權威にも屈せず、如何なる勢力をも眼中に措<sup>お</sup>かない英傑児の名を、青史に垂れていたであろう。

こうした事實は、奈良原翁と対等に膝を交えて談笑し、且つ、交際し得た人物が、前記頭山、杉山両氏のほかには、あまり居なかつた。それ以外に奈良原翁の人格を云<sup>うん</sup>為<sup>い</sup>するものは皆、瘦犬の遠吠えに過ぎなかつた事實を見ても、容易に想像出来るであろう。

明治もまだ若かりし頃、福岡市外（現在は市内）住吉の<sup>にんじん</sup>人<sup>じん</sup>参<sup>じん</sup>畑<sup>ばたけ</sup>という処に、高場<sup>たかばら</sup>乱<sup>らん</sup>子<sup>こ</sup>女史の漢学塾があつた。塾の名前は忘

れたが、タカが女の学問塾と思つて軽侮すると大間違ひ、頭山満を初め後年、明治史の裏面に血と爆弾の異臭をコビリ付かせた玄洋社の諸豪傑は皆、この高場乱子女史と名乗る変り者の婆さんの門下であつたというのだから恐ろしい。彼の忍辱慈悲の法衣の袖に高杉晋作や、西郷隆盛の頭を撫で慈しんだ野村望東尼とは事変り、この婆さん、女の癖に元陽と名乗り、男おとこがみ髪ぼうとうにの総髪に結び、馬うまのりばかま乗袴うまのりばかまに人斬庖刀を横たえて馬に乗り、生命いのち知らずの門下を従えて福岡市内を横行したというのだから、デートトリツヒやターキーがすべにすべつたの、女学生のキミ・ボクがそうろう転んだの候そうろうといつたつて断然ダンチの時代遅れである。時は血ちなまぐさ腥ちなまぐさい維新時代である。おまけに皺苦茶の婆さんだからたまらない。

わが奈良原到少年はその腕白盛りをこの尖端婆さんの鞭撻下にヒレ伏して暮した。そのほか当時の福岡でも持て余され気味の豪傑青少年は皆この人參畑に預けられて、このシウル・モダン婆さんの時世に対する炬かがりびの如き觀察眼と、その達人的な威光の前にタキ伏せられたものだという。

その当時の記憶を奈良原到翁に語らしめよ。

「人參畑の婆さんの処にゴロゴロしている書生どもは皆、順繰りに掃除や、飯めしたき爨たや、買物のお使いに遣られた。しかし自分わしはまだ子供で飯が爨たけんじやったけにイツモ走り使いに逐おいまわされたものじやったが、その当時から婆さんの門下というと、福岡の町は皆ビクビクして恐ろしがつておった。



自分の同門に松浦愚おろかという少年が居った。こいつは学問は一向でけ出来ん奴じゃったが、名前の通り愚直一点張りで、勤王の大義だけはチャント心得ておった。この松浦愚と自分わしは大の仲好しで、二人で醤油買いに行くのに、わざと二本の太い荒縄で樽たるを釣下げ、その二本の縄の端を左右に長々と二人で引っぱって樽をブランさせながら往来一パイになつて行くと往来の町人でも肥こえぐるま料車えぐるまでも皆、恐ろしがって片わきに小さくなって行く。なかなか面白いので二人とも醤油買いを一つの楽しみにしていた。

或る時、その醤油買いの帰りに博多の櫛田神社の前を通ると、社内に一パイ人だかりがしている。何事かと思つて覗いてみると勿体らしい衣冠束帯をした櫛田神社の宮司が、拜殿の上に立つて

長い髯ひげを撫でながら演説をしている。その頃は演説というと、芝居や見世物よりも珍しがって、演説の出来る人間を非常に尊敬しておった時代じゃけに、早速二人とも見物を押しかけて一番前に出て傾聴した。ところがその髯神主の演説に曰いわく、

『……諸君……王政維新以来、敬神の思想が地を払って来たことは実にこの通りである。真に慨嘆に堪えない現状と云わなければならぬ。……諸君……牢記ろうきして忘るる勿れ。神様というものは常に吾が○○以上に尊敬せねばならぬものである。その実例は日本外史ひもとを繙ひもといてみれば直ぐにわかる事である。遠く元弘三年の昔、九州随一の勤王家菊池武時は、逆臣北条探題、少弐しょうに大友等三千の大軍を一戦に蹴散けちらかさんと、手勢百五十騎ひつさを提ひつさげて、この櫛

田神社の社前を横切った。ところがこの戦いは菊池軍に不利であることを示し給う神慮のために、武時の乗馬が鳥居の前で俄かに四足を突張って後退し始めた。すると焦燥りに焦燥っている菊池武時は憤然として馬上のまま弓に鏑矢を番えた。

「この神様は牛か馬か。皇室のために決戦に行く俺の心がわからんのか。」

武士もののふのうわ矢のかぶら一すぢに

思ひ切るとは神は知らずや」

と吟ずるや否や神殿の扉に発矢とばかり二本の矢を射かけた。

トタンに馬が馳け出したのでそのまま戦場に向ったが、もしこの時に武時が馬から降りて、神前に幸運を祈ったならば、彼は戦い

に勝つたであろうものを、斯か様な無礼を働からいて神慮を無視したために勤王の義兵でありながら一敗地に塗まれた……』

衣冠束帯の神主が得意然とここまで喋しゃべ舌べつて来た時に、自分わしと松浦愚の二人はドツチが先か忘れたが神殿に躍り上っていた。アツと云う間もなく二人で髭神主を殴り倒おし蹴倒おす。松浦が片手に提げていた醤油樽で、神主の脳天を食らわせたので、可愛そうに髭神主が醤油の海の中にウームと伸びてしまった。……この賽さい銭せん乞食の奴、神様の広告のために途方もない事を吐ぬかす。皇室あつての神様ではないか。そういう貴様が神威を流けし、国体を誤る国賊ではないか……というたような気持であつたと思うが、二人ともまだ十四か五ぐらいの腕白盛りで、そのような気の利い

た事を云い切らんじやつた。ただ、

『この畜生。罰ばちを当てるなら当ててみよ』

と破われた醤油樽を御神殿に投込んで人参畑へ帰つて来たが、帰つてからこの話をする、それは賞められたものじやつたぞ。大将の婆さんが涙を流して『ようしなさつた。感心感心』と二人の手をおしいただ戴ただいて見せるので、塾の連中が皆、金鷄勲章きんしでも貰うたように俺達の手柄を羨ましがつたものじやつたぞ。ハハハハハ」

人参畑の婆さんがいつまで存命して御座つたか一寸ちよつと調査しかねているが、とにかくにも、こうした人参畑の豪傑青少年連は、その後健児のち社という結社を組織して、天下の形勢を睥睨へいげいする事

になった。これが後ののちの玄洋社の前身であつたが、天下の形勢を憂慮する余り、近所界隈の畑や鶏舎を荒し、犬猫の影を絶ち、営所の堀の墓がまを捕つて来て、臟腑を往来に撒布するなど、乱暴狼藉到らざるなく、健児社の連中といえ、大人でも首を縮める程の無敵な勢力を持つていたものであつた。

その中でも乱暴者の急先鋒は我が奈良原少年で、仲間から黒こくせ旋風李達んぷうりきの綽名あだなを頂戴してゐた。奈良原到が飯めしたき饗あ当番に当ると、塾の連中が長幼を問わず揃つて早起をした……というのは、飯の準備が出来上るまで寢床に潜つてゐると、到少年がブスブス燃えている薪を掴んで来て、寝ている奴の懷中に突込むからであつた。しかもその燃えさしを懷中に突込まれたまま、燃えてしま

うまで黙つて奈良原少年の顔をマジリマジリと見ていたのが塾の中にタツタ一人頭山満少年であつた。そうして奈良原少年が消えた薪を引くと同時に起上つて奈良原少年を取つて伏せて謝罪あやまらせたので、それ以来二人は無二の親友になつたものだという。

ちようどその頃が西南戦争の直前であつた。維新後に於ける物情の最も騒然たる時代であつた。

既掲、頭山、杉山の項にも述べた通り、筑前藩の志士は維新のこうぎよう鴻業後、筑前閥を作る事が出来なかつた。従つて不平士族の数は他地方に優まさるとも劣らなかつた筈である。

そんな連中は有為果敢の材を抱きながら官途に就く事が出来ず

鬱勃たる壮志を抱いたまま明治政府を掌握している薩長土肥の横暴振り、名利の争奪振りを横目に睨んでいた。尊王攘夷を標榜して徳川を倒しておきながら、サテ政権を握ると同時に攘夷どころか、国体どころか、一も西洋二も西洋と夷敵いでき紅毛人の前にペコペコして洋服を着、洋食を喰くらつて、アラン限りブルジョア根性を発揮し、屈辱的条約をドシドシ結びながら、恬てんぜん然ぜんとして徳川五代將軍と肩を並べている大官連の厚顔無恥振りに皆まなじりを決していた。そのうちに福岡にも鎮台が設けられて、町人百姓に洋服を着せた兵隊が雲集し、チャルメラじみた喇叭らっぱを鳴らして干ほしいわし鯛ほしいわしの行列じみた調練が始まった。

その頃、士族の下ツ端連したばの成れの果は皆、警官（邏卒らそつ）、部長、



警部等）に採用されていたものであったが、この羅卒（今の巡查）連中が皆鎮台兵と反りが合そわなかつた。……俺達のような腹からの士族と同じように、町人百姓が戦争の役に立つものか……といったような一種の階級意識から、犬と猿のように仲が悪く、毎日福岡市内の到る処で、鎮台兵と衝突していたものであるが、しかも、そうした不平士族の連中の中には西郷隆盛の征韓論の成立を一日千秋の思いで仰望していたものが少くなかつた。祖先伝来の一党を提ひっさげて西郷さんのお伴をして、この不愉快な日本を離れて士族の王国を作りに行かねばならぬ。武士の生涯は武を以て一貫せねばならぬ。町人や百姓と伍して食物を漁あさり合あわねばならぬ、犬猫同然の国民平等の世界に、一日でも我慢が出来でるか……

とか何とか云つて鼻の頭をコスリ上げている。

そこへ征韓論が破れて、西郷さんが帰国したというのだから一大事である。

その頃、筑前志土の先輩に、越智彦四郎、武部小四郎、今村百八郎、宮崎車之助くるまのすけ、武井忍助にんすけなぞいう血気盛んな諸豪傑が居た。

そんな連中と健児社の箱田六輔ろくすけ氏等が落合おちあつて大事を密議している席上に、奈良原到らう以下十四五かしろを頭かしらくらいの少年連が十六名ズラリと列席していたというのだから、その当時の密議なるものが如何に荒つぽいものであつたかがわかる。密議の目的というのは薩摩の西郷さんに呼応する挙兵の時機の問題であつたが、その謀

議の最中に奈良原到少年が、突如として動議を提出した。

「時機なぞはいつでも宜しい。とりあえず福岡鎮台をタタキ潰せば良<sup>え</sup>えのでしょう。そうすれば藩内の不平士族が一<sup>いちどき</sup>時に武器を執<sup>と</sup>つて集まつて来ましよう」

席上諸先輩の注視が期せずして奈良原少年に集まつた。少年は臆面もなく云つた。

「私どもはイツモお城の石垣を登つて御本丸の掠<sup>むく</sup>の実を喰いに行きますので、あの中の案内なら、親の家<sup>うち</sup>よりも良う知つております。私どもにランプの石油を一カンと火薬を下さい。私ども十六人が、皆、頭から石油を浴びて、左右の袂<sup>たもと</sup>に火薬を入れたまま石垣を登つて番兵の眼を掠<sup>かす</sup>め、兵營や火薬庫に忍<sup>しのびこ</sup>込みます。そう

して蘭法マッ附木ツチで袂たもとに火を放つて走りまわりましたならば、そこから火事になりましょう。火薬庫も破裂しましょう。その時に上の橋と下の橋から斬り込んでおいでになったならば、土百姓や町人の兵隊共は一たまりもありますまい」

これを聞いた少年連は皆、手を拍うつて奈良原の意見に賛成した。口々に、

「遣つて下さい遣つて下さい」

と連呼して詰め寄つたので並居る諸先輩は一人残らず泣かされたという。その中にも武部小四郎氏は、静かに涙を払つて少年連を諫止かんしした。

「その志は忝かたじけないが、日本の前途はまだ暗澹たるものがある。万

一吾々が失敗したならば貴公達あんたが、吾々の後跟あとを継いでこの皇国廓かくせい清の任に当らねばならぬ。また万一吾々が成功して天下を執る段になつても、吾々が今の薩長土肥のような醜い政権利権の奴隷になるかならぬかという事は、ほかならぬ貴公達あんたに監視してもらわねばならぬ。間違うても今死ぬ事はなりませぬぞ」

今度は少年連がシクシク泣出した。皆、武部先生のために死にたいのが本望であつたらしいが結局、小供たちは黙って引込んでおれといふので折角の謀議から逐おいしりぞ退しりぞけられて終しまつた。

かくして武部小四郎の乱、宮崎車之助の乱等が相次いで起り、相次いで潰滅し去つた訳であるが、後から伝えられているところ

に依ると、これ等の諸先輩の挙兵が皆、鎮台と、警察に先手を打たれて一敗地に塗れた原因は、皆奈良原少年の失策に起因していた。奈良原少年一流の急進的な激語が破鐘われがねのように大きいのでその家を取巻く密偵の耳に筒抜けに聞えたに違いないという事になった。それ以来「奈良原の奴は密議に加えられない」という事になって同志の人は事ある毎ごとに奈良原少年を敬遠したというのだから痛快である。しかも前記の乱の鎮定後明治政府に対して功績を挙ぐるに汲々たる県当局では、残酷にも健児社に居残っている少年連を悉く引ことごと捉ひつとらえて投獄した。一味徒党の名前を云えといとしはので、年端も行かぬ連中に、夜となく昼となく極烈な拷問をかけたというのだから、呆れた位では追付かない話である。

その当時の事を後年の奈良原翁は筆者に追懐して聞かせた。

「現在（大正三年頃）玄洋社長をやつとる進藤喜平太は、その当時まあだ紅顔の美少年で、女のように静かな、おとな溫柔しい男じやつたが、イザとなるとコレ位、底強い、頼もしい男はなかつた。熊本県の壮士と玄洋社の壮士とが博多東中洲のあおやぎ青柳の二階で懇親会を開いた時に、熊本の壮士の首領で某なにがしという名高い強い男が、頭山の前に腰を卸して無理酒を強しいようとした。頭山は一滴もイカンので黙つて頭を左右に振るばかりであつたが、そこを附け込んだ首領の某なにがしがなおも、無理に杯を押付ける。双方の壮士が互い違いに坐っているので互いに肩かたひじ臂を張つて睨み合つたまま、誰も腰を上げ得ずにいる時に、進藤がツカツカと立上つて、その首

領某の襟首を背後から引摺むと、杯盤の並んだ上を一気に梯子段の処まで引摺つて来て、向う向きに突き落した。そのあとを見返りもせずニコニコと笑いながら引返して来て『サア皆。飲み直そう』と云うた時には大分青くなつておつた奴が居たようであつたが、その進藤と、頭山満と自分わしと三人は並んで県庁の裏の獄舎ごくやで木馬責めにかけられた。背中の三角になつた木馬に跨またがらせられて腰に荒縄を結び、その荒縄に一つ宛ずつ、漬物石を結び付けてダンダン数を殖ふやすのであつたが、頭山も進藤も実に強かつた。石の数を一つでも余計にブラ下げるのが競争のようになって、あらゆる限り強情を張つたものであつた。三人とも腰から下は血のズボンを穿はいたようになってゐるのを頭山は珍らしそうにキョロキョロ



見まわしている。進藤も石が一つ殖える度毎ごとに嬉しそうに眼を細くしてニコニコして見せるので、意地にも顔を歪める訳に行かん。どうかした拍子に進藤に向つて『コラッ。貴様の面つらが歪つらんどるぞ』と冷やかしてやると進藤の奴、天井を仰いで『アハアハアハ』と高笑いしおつたが、後から考えるとソウいう自分わしの方が弱かつたのかも知れんて、ハハハ。とにかく頭山は勿論、進藤という奴もドレ位強い奴かわからんと思うた。役人どもも呆れておつたらしい。

それから今一つ感心な事がある。

獄舎ごくやにいる間には副食物に時々魚類さかなが付く。……といつても飯

の上に鱈の煮たのが並んでいる位の事じやつたが、そのたんびに

頭山は箸はしの先で上の方の飯を、その鯛と一いっしょ所に払い除のけて、鼻に押当てて嗅いでみる。そうしてイヨイヨ腥なまぐさくないとこまで来てから喰う。尋常に喰うても足らぬ処へ、平生大飯喰くらいの頭山が妙な事をすると思つて理由を聞いてみると、きようは死んだ母親何とかの日に当るけに精進をしよるといふのじゃ。それを聞いてから自分わしはイツモ飯となると頭山の横に座つたものじゃがのう。ハハハ

進藤喜平太翁も、その時分の事を筆者に述懐した事がある。

「拷問ちうたて、痛いだけの事で何でもなかつたが、酒が飲めんのは降参した。飲みとうて飲みとうてならぬところへ、ちようど虎烈刺コレラが流行はやつてなあ。獄卒がこれを消毒まよけのために雪隠せついんに撒ふ

れと云うて酔を呉くれたけに、それを我慢して飲んだものじゃ。むろん米の酔じゃけに飲むとどことなくポーツと酔うたような気持になるのでなあ……まことに面目ない、浅ましい話じゃったが、奈良原が、あの面つら付きでシカメて酔を飲みよるところはナカナカ奇観じゃったよ。奈良原は酒を飲むといつも酔狂をしおつたが、酔では酔興が出来るので残念じゃと云うておつた」

同じ健児社の同志で運よく年少のために捕えられなかった宮川太一郎（今の政友代議士、宮川一貫氏の父君）氏が、同志に与うべく牛肉の煮たのを獄舎に持って行き、門衛の看守に拒まれたので鉄門の間に足を突込んで、死を決して駄だ々だを捏こね始め、終日看守を手古摺てこずらせた揚句あげく、やっと目的を達すると、その翌日からド

シドシ肉を運び始めて大いに当局を弱らせたのもこの時の事であったという。

そのうちに西南の戦雲が、愈いよいよ濃厚になつて来たので、県当局でも万一を慮おもつたのであろう、頭山、奈良原を初め、健児社の一味ことごとを尽く兵営の中の営倉に送り込むべく獄舎から鎖に繋いで引出した。その時は健児社の健児一同、当然斬られるものと覚悟したらしく、互いに顔を見合わせてニツコリ笑つたという事であるが、同じ時に奈良原少年と同じ鎖に繋がれる仲よしの松浦愚少年が、護送の途中でこんな事を云い出した。

「オイ。奈良原。今度こそ斬られるぞ」

「ウン。斬るつもりらしいのう」

「武士というものは死ぬる時に辞世チユウものを詠みはせんか」  
 「ウン。詠んだ方が立派じやろう。のみならず同志の励みになるものじやそうな」

「貴公は皆の中で一番学問が出来とるけに、嘸いくつも詠む事じやろうのう」

「ウム。今その辞世を作りよるところじやが」

「俺にも一つ作つてくれんか。親友の好誼よしみに一つ頒わけてくれい。何も詠まんて死ぬと体裁が悪いけになあ。貴公が作つてくれた辞世なら意味はわからんでも信用出来るけになあ。一つ上等のヤツを頒けてくれい。是非頼むぞ」

流石さすがの豪傑、奈良原少年も、この時には松浦少年の無学さが可

哀そうなような可笑おかしいようで、胸が一パイになつて、暫くの間返事が出来なかつたという。

一方に盟主、武部小四郎は事敗れるや否や巧みに追捕の網を潜くぐつて逃れた。香椎かしいなぞでは泊つている宿へイキナリ踏込まれたので、すぐに脇差を取つて懷中に突込み、裏口に在つた筈むすを拾つて海岸に出て、汐干狩の連中に紛れ込むなぞという際どい落付を見せて、とうとう大分まで逃げ延びた。ここまで来れば大丈夫。モウ一足で目指す薩摩の国境という処まで来ていたが、そこで思いもかけぬ福岡の健児社の少年連が無法にも投獄拷問されているという事実を風聞すると天を仰いで浩嘆こうたんした。万事休すというの

で直に踵ただちきびすを返した。幾重いくえにも張廻はりまわしてある嚴重を極めた警戒網を次から次に大手を振って突破して、一直線に福岡県庁に自首して出た時には、全県下の警察が舌を捲いて震しんが駭がいしたという。そこで武部小四郎は一切が自分の一存で決定した事である。健児社の連中は一人も謀議に参加していない事を明弁し、やはり兵営内に在る別棟の獄舎に繋がれた。

健児社の連中は、広い営庭の遙か向うの獄舎に武部先生が繋がれている事をどこからともなく聞き知った。多分獄吏の中の誰かが、健気けなげな少年連の態度に心を動かして同情していたのであろう。武部先生が、わざわざ大分から引返して来て、縛ばくに就かれた前後の事情を聞き伝えると同時に「事敗れて後のちに天下の成なり行ゆきを監視

する責任は、お前達少年の双肩に在るのだぞ」と訓戒された、その精神を實現せしむべく武部先生が、死を決して自分達を救いに御座ったものである事を皆、無言の裡うちに察知したのであった。

その翌日から、同じ獄舎に繋がれている少年連は、朝眼が醒めると直ぐに、その方向に向つて礼拝した。「先生。お早よう御座います」と口の中で云つていたが、そのうちに武部先生が一切の罪を負つて斬られさつしやる……俺達はお蔭で助かる……という事実がハッキリとわかると、流石さすがに眠る者が一人もなくなつた。毎日毎晩、今か今かとその時機を待つているうちに或る朝の事、霜の真白い、月の白い営庭の向うの獄舎へ提灯が近付いてゴトゴト人声がい始めたので、素破すわこそと皆蹶起けつきして正座し、その方向



に向つて両手を支えた。メソメソと泣出した少年も居た。

そのうちに四五人の人影が固まつて向うの獄舎から出て来て広場の真中あたりまで来たと思うと、その中でも武部先生らしい一人がピツタリと立停まつて四方を見まわした。少年連のいる獄舎の位置を心探しにしている様子であつたが、忽ち雄獅子の吼ほえるような颯さつ爽そうたる声で、天も響けと絶叫した。

「行くぞオオ——オオオ——」

健児社の健児十六名。思わず獄舎の床に平伏ひれふして顔を上げ得なかつた。オイオイ声を立てて泣出した者も在つたという。

「あれが先生の声の聞き納めじやつたが、今でも骨の髄まで泌み透つていて、忘れようにも忘れられん。あの声は今こんにち日まで自分わし

の臟腑はらわたの腐り止めになっている。貧乏というものは辛勞きついもので、妻子が飢え死によるのを見ると気に入らん奴の世話にでもなりとうなるものじゃ。藩閥の犬畜生にでも頭を下げに行かねば遣り切れんようになるものじゃが、そげな時に、あの月と霜に冴え渡った爽快な声を思い出すと、腸はらわたがグルグルとデングリ返つて来る。何もかも要らん『行くぞオ』という気もちになる。貧乏が愉快になつて来る。先生……先生と申うてなあ……」

と云ううちに奈良原翁の巨大な両眼から、熱い涙がポタポタと滾れ落ちるのを筆者は見た。

奈良原到少年の腸はらわたは、武部先生の「行くぞオオ」を聞いて以来、死ぬが死ぬまで腐らなかつた。

## (下)

月明の霜朝に、自分等に代つて断頭場に向つた大先輩、武部小四郎先生の壮烈を極めた だいおんじよう 大音声、

「行くぞオーオ」

を聞いて以来、奈良原到少年の腸は死ぬが死ぬまで腐らなかつた。はらわた

その後、天下の国土を以て任ずる玄洋社の連中は、普通の人民と同様に衣食のために駈廻らず、同時に五斗米に膝を屈しないうちに、自給自足の生活をすべく、豪傑知事安場保和やすばやすかずから福岡市

の対岸に方る向い浜（今の西戸崎附近）の松原の官林を貰つて薪を作り、福岡地方に売却し始めた。奈良原到少年もむろん一行に参加して薪採りの事業に参加して粉骨碎身していたが、その後、安場知事の人格を色々考えてみると、どうも玄洋社を尊敬してないようである。却つて生活の糧を与えて慰撫しているつもりらしく見えたので、或夜、奈良原到はコツソリと起上つて誰にも告げずに山のように積んである薪の束の間に、枯松葉を突込んで火を放ち、悉く焼棄してしまった。つまり天下の政治を云為する結社が区々たる知事風情の恩義を蒙るなぞという事は面白くないという気持であつたらしいが、対岸の福岡市では時ならぬ海上の炬火を望んで相当騒いだらしい。馳付けた同志の連中も、手を拍

つて快哉を叫んでいる奈良原少年の真赤な顔を見て啞然となった。一人として火を消し得る者が無かったという。

こうした奈良原少年の精神こそ、玄洋社精神の精髓で、黒田武士の所謂、葉隠れ魂のあらわれでなければならぬ。玄洋社の連中は何をするかわからぬという恐怖観念が、明治、大正、昭和の政界、時局を通じて暗々の裡に人心を威圧しているのもこの辺に端を發してゐるのではなからうか。

そのうちに四国の土佐で、板垣退助という男が、自由民権という事を叫び出して、なかなか盛んにやりおるらしい。明治政府でもこれを重大視しているらしい……という風評が玄洋社に伝わっ

た。

その当時の玄洋社員は筆者の覚おぼつか束ない又聞きおぼつかの記憶によると頭山満が大將株で奈良原到、進藤喜平太、大原義剛ぎんこう、月成勲つきなりいさお、宮川太一郎なぞいう多士濟々たるものがあつたが、この風聞に就いて種々凝議した結果、とにも角にも頭山と奈良原に行つて様子を見てもらおうではないかという事になつた。

その当時の評議の内容を伝え聞いていた福岡の故老は語る。

「大体、玄洋社というものは、土佐の板垣が議論の合う者同志で作つておつた愛国社なんぞと違つて、主義も主張も何も無い。今の世の中のように玄洋社精神なぞいうものを仰々しく宣言する必要もない。ただ何となしに気が合つて、死生を共にしようといふ

だけでそこに生命いのち知らずの連中が、黙って集まり合うたというだけで、そこに燃え熾さかつている火のような精神は文句にも云えず、筆にも書けない。否文句いや以上、筆以上の壯観で、烈々うたい宇内を焼きつくす概があつた。頭山が遣るといふなら俺も遣らう。奈良原が死ぬといふなら俺も死のう。要らぬ生命いのちならイクラでも在る。貴様も来い。お前も来い。……という純粹な精神的の共產主義者の一団とも形容すべきものであつた。それじゃけに、愛国社の連中は一度ひとたび、時を得て議論が違つて来ると、外国の社会主義者連中と同じこと直ぐに離れ離れになる。もつとも今の政党は主義主張が合つても利害が違つと仲間割れするので、今一段下等なワケじやが、玄洋社となると理窟なしに集まつとるのじゃけに日本の国

体と同じことじゃ。利害得失、主義主張なぞがイクラ違うても、お互いに相許しとる気持は一つじゃけに議論しながら決して離れん。玄洋社は潰れても玄洋社精神は今こんにち日まで生きておつて、国家のために益々さか壮んに活躍しおるのじゃ。そげなワケじゃけに、その当時の玄洋社で一口に自由民権と聞いても理窟のわかる奴は一人も居らんじゃつた。それじゃけに、ともかくもこの二人に板垣の演説を聞いてもろうて、国のためにならぬと思うたならば二人で板垣をタタキ潰してもらおう。もし又、万一、二人が国のためになると思うたならば玄洋社が総出で板垣に加勢してやろう。ナア二人が行けば大丈夫。口先ばかりの土佐ツポオをタタキ潰して帰って来る位、何でもないじやろう」



といったような極めて荒っぽい決議で、旅費を工面して二人を旅立たせた……というのであるが何が扱さて、無双の無頓着主義の頭山満と人を殺すことを屁へとも思わぬ無敵の乱暴者、奈良原到という、代表的な玄洋社式がつかって旅行するのだから、途中は弥次喜多どころでない。天魔鬼神も倒たいとう退三千里に及ぶ奇談を到る処に捲起して行ったらしい。

当時の事を尋ねても頭山満翁も奈良原翁もただ苦笑するのみであまり多くを語らなかつたが、それでも辛うじて洩れ聞いた、差支えない部類に属するらしい話だけでも、ナカナカ凡俗の想像を超越しているのが多い。

二人とも或る意味での無学文盲で、日本の地理なぞ無論、知ら

ない。四国がドツチの方角に在るかハッキリ知らないまんまに、それでも人に頭を下げて尋ねる事が二人とも嫌いなまんまに不思議と四国に渡つて来たような事だったので、途中で無茶苦茶に道に迷つたのは当然の結果であつた。

「オイオイ百姓。高知という処はドツチの方角に当るのか」

「コツチの方角やなモシ」

「ウン。そうか」

と云うなりグングンその方角に行く。野でも山でも構わない式だからたまらない。玄洋社代表は迷わなくても道の方が迷つてしまふ。その中うちに或る深山の谷間を通つたら福岡地方で珍重する忍しの草のぶくさが、左右の崖に夥しく密生しているのを発見したので、奈

良原到が先ず足を止めた。

「オイ。頭山。忍草しのぶが在るぞ。採って行こう」

「ウム。オヤジが喜ぶじやろう」

「というので道を迷っているのも忘れて盛んにむしり始めたが、その中に日うちが暮れて来たので気が付いてみると、荷車が一台や二台では運び切れぬ位、採り溜めていた。

「オイ。頭山。これはトテモ持って行けんぞ」

「ウム。チツと多過ぎるのう、帰りに持って行こう」

それから又行くと今度は山道七里ばかりの間人家が一軒も無い処へ来たので、流石さすがの玄洋社代表も腹が減かつって大いに弱かつった。ところへ思いがけなく向うからさるるを前後に荷かついだ卵売りに出会った

ので呼止めて、二人で卵を買つて啜<sup>すす</sup>り始めたが、卵というものはイクラ空腹でも左程沢山に啜れるものでない。十個ばかり啜<sup>うち</sup>る中に、二人とも硫黄臭いゲツプを出すようになる、卵売りは大いに儲けるつもりで、道<sup>みちばた</sup>傍の枯松葉を集めて焼卵を作り、二人にすすめたので又食欲を新にした二人は、したたかに喰べた。

ところでそこまでは先ず好都合であつたがアトが散々であつた。そこからまだ半道も行かぬ中<sup>うち</sup>に二人は忽ち鶏卵中毒を起し、猛烈な腹痛と共に代る代る道傍<sup>かが</sup>に踏み始めたので、道が一向に抄<sup>はかど</sup>らな<sup>しか</sup>い。併し強情我慢の名を惜しむ二人はここでヘタバツてなるものかと齒を噛みしめて、互いに先陣を争つて行くうちに、やつと人家近い処へ来たので二人とも通りかかった小川で尻を洗い、宿屋

に着くには着いたが、あまりの息苦しさに、ボーオとなつて腰を  
かけながら肩で呼吸いきをしているところへ宿屋の女中が、

「イラツシャイマセ。どうぞお二階へお上りなされませ」

と云つた時には階子段を見上げてホツとタメ息を吐ついたという。  
それからその翌日の事。二人とも朝ツパラからヘトヘトに疲れ  
ていたので、宿屋からすすめられるままに馬に乗つたら、その馬  
を引いた馬士まごが、途中の宿場で居酒屋に這入つた。するとその馬  
が一緒に居酒屋へ這入ろうとしたので乗っていた頭山が面喰らつ  
たらしい。慌てて居酒屋の軒先に掴まって両足で馬の胴を締め上  
げて入れまいと争つたが、とうとう馬の方が勝つて頭山が軒先に  
ブラ下つた。その時の恰好の可笑おかしかつたこと……と奈良原翁が

筆者に語って大笑いした事がある。

そのうちに高知市に近付くと眼の前に大きな山が迫つて来て高知市はその真向いの山向うに在る。道路はその山の根方をグルリとまわつて行くのであるが、その山を越えて一直線に行けば三分の一ぐらいの道程みちのりに過ぎない……と聞いた二人の心に又しても曲る事を好まぬ黒田武士の葉隠れ魂……もしくは玄洋社魂みたいなものがムズムズして来た。期せずして二人とも一直線に山を登り始めたが、その山が又、案外峻岨けんそな絶壁だらけの山で、道なぞは無論無い。殆んど生命いのちがけの冒険続きでヘトヘトになつて向うへ降りたが、後から考えると、たとえ四里でも五里でも山の根方をまわつた方が早かつたように思った……という。やはり奈良原

翁の笑い話であつた。

そうした玄洋社代表が二人、そうした辛苦艱難しんくかんなんを経てヤツと高知市に到着すると、板垣派から非常な歓迎を受けた。現下の時局に処する玄洋社一派の主義主張について色々な質問を受けたり議論を吹っかけられたりしたが、頭山満はもとより一言も口を利かないし、奈良原到も、今度はこつちから理窟を云いに来たのではない、諸君の理窟を聞きに來ただけじゃ……と睨み返して天晴れ玄洋社代表の貫禄を示したのでイヨイヨ尊敬を受けたりらしい。

それから二代表は毎日毎日演説会場に出席して黙々として板垣一派の演説を静聴した。そうして何日目であつたかの夕方になつて二人が宿屋の便所か何かで出会うと、頭山満は静かに奈良原到

をかえりみて微笑した。

「……どうや……」

「ウム。よさそうじやのう。此奴こやつどもの方針は……国体には触さわら  
んと思うがのう、今の藩閥政府の方が国体には害があると思うが  
のう」

「やってみるかのう……」

「ウム。遣るがよかろう」

と云つて奈良原到は思わず腕を撫でたという。実は奈良原とし  
てはブチコワシ仕事の方が望ましかつた。土佐の板垣一派の仕事  
を木葉微塵こつばみじんにして帰るべく腕よりに撚よをかけて来たものであつたが、  
それでは持つて生れた彼一流の正義観が承知しなかつた。



「演説はともかく、板垣という男の至誠には動かされたよ、この男の云う事なら間違うてもよい。加勢してやろうという気になつた」

と後年の奈良原到翁は述懐した。

玄洋社が板垣の民権論に加勢するに決した事がわかると当時の藩閥政府はイヨイヨ震しんがい駭がいした。玄洋社と愛国社に向つて現今の共産党以上の苛烈な圧迫を加えたものであったが、これに対して愛国社が言論に、玄洋社が腕力に堂々と相並んで如何に眼醒めざましい反抗を試みたかは天下周知の事実だからここには喋ちようちよう々ちようちようしない事にする。

「結局。自由民権のあらわれである自治政治と議会政治は、板垣

の赤せきせい誠せいを裏切つて日本を腐敗墮落させた。日本人は自治権を持つ資格のない程に下等な民族であることを現実の通りに暴露したに過ぎなかつたが、これに反して板垣の人格はイヨイヨ光つて来るばかりである。昨日きのう、久し振りに板垣と会つて来たが昔の通りに立派な男で、手を握り合つて喜んでくれた。耳が遠くなつて困ると云いおつたがワシが持つて生れた破鐘われがねごえ声で話すと、よくわかるよくわかるとうなずいておつた。今のような世の中になつたのはつまるところ、自由民権議論もよくわからず、日本人の素質もよく考えないままに、板垣の人物ばかりを信用しておつた頭山とワシの罪じゃないかと思つとる」

ところでこの辺までは先ず奈良原到の得意の世界であつた。

幸いにして議会が開設されるにはされたが、その当初は選挙といつても全然暴力選挙のダイナマイト・ドン時代で、選挙運動者は皆、水盃の生命いのちがけであつた。すこしばかりの左翼や右翼のテロが暴露しても満天下の新聞紙が青くなつて震え出すような現代とは雲泥の差があつたので、従つて奈良原到一流のモノスゴイ睨みが到る処に、活躍の価値を発見したものであつたが、それから、日本政界の腐敗墮落が甚しくなるに連れて、換言すれば天下が泰平になるに連れて、好漢、奈良原到も次第に不遇の地位に墜ちて来た。

しかもその不遇たるや尋常一様の不遇ではなかつた。遂には玄

洋社一派とさえ相容れなくなつた位、極度に徹底した正義観念——もしくは病的に近い潔癖に禍わざわいされた御蔭で、奈良原到翁は殆んど食うや喰わずの慘澹たる一生を終つたのであつた。

それから後の奈良原到翁の経歴は世間の感情から非常に遠ざかつていたし、筆者も詳しくは聞いていないのであるが大略左さのような簡単なものであつたらしい。

明治二十年頃（？）福岡市須崎すさきお台場だいばに在る須崎監獄の典獄

（刑務所長）となり、妻帯後間もなく解職し、爾後、数年閑居、

日清戦役後、台湾の巡查となつて生蕃せいばん討伐に従事した。それか

ら内地へ帰来後、夫人を喪い、数人の子女を親戚故旧に托し、独ひとり

福岡市外千代町役場ちよまちに出仕していたが、その後辞職して自分の娘

の婚嫁先である北海道、札幌、橋本某氏の農園の番人となり、閑日月を送る事十三年、大正元年、桂内閣の時、頭山満、杉山茂丸の依嘱を受けて憲政擁護運動のため九州に下り、玄洋社の二階に起居し、後、<sup>のち</sup>大正六七年頃、<sup>たいしゅう</sup>対州の親戚某氏の処で病死した。享年七十……幾歳であつたか、実は筆者も詳しく知らない。

その遺児の長男、奈良原牛<sup>うしのすけ</sup>之介というのが又、親の血を受けていたらしい。天下無敵の快男児で、乱暴者ばかり扱い<sup>な</sup>狂<sup>な</sup>れていて内田良平、杉山茂丸も持て余した程の喧嘩の専門家であつた。その乱暴者を、極めて<sup>おとな</sup>溫柔<sup>おとな</sup>しい文学青年の筆者と同列に可愛がつたのが筆者の母親で、痛快な、男らしい意味では筆者よりも数十層倍、深刻な印象を、負けん気な母親の頭にタタキ込んでいる筈

であるが、この男の伝記は後日の機会まで廻避して、ここには前記、失意後の乱暴オヤジ、奈良原到翁の逸話を二三摘出してこの稿を結ぶ事にする。

奈良原翁は少年時代に高場乱子、武部小四郎等から受けた所謂黒田武士の葉隠れ魂、悪く云えば馬鹿を通り越しても満足せぬ意地張根性じばりがドン底まで強かった。氣に入らない奴は片端かたっぱしからガミつける。処嫌わずタタキつける。評議の席などで酔つ払つた奈良原到が、眼を据えて睨みまわすと、いい加減な調子のいい事を云っている有志連中は皆青くなつて、座が白けてしまったという。そんな連中が奈良原の貧乏な事をよく知つていて、時世おく後れ

の廃物だとか、玄洋社の面つらよごしとか何とか、在る事無い事デマを飛ばして排斥したので、奈良原到は愈々いよいよ不遇に陥つたものらしい。

しかし後年の奈良原到翁には、別にそんな連中を怨んだような語気はなかった。多分、新時代の有志とか、代議士とかいうものは一列一体に太平の世に湧いた蛆うじむし虫ぐらいにしか思つていなかったのであらう。一依旧様、権門に媚こびず、時世に諛おもねらず、喰えなければ喰えないままで、乞食以下の生活に甘んじ、喰う物が無くなつても人に頭を下げない。妻子を引連れて福岡の城外練兵場へ出て、タンポポの根などを掘つて来て露命を繋いでいたというのだから驚く。御本人に聞いてみると、

「ナニ、タンポポの根というても別に喰い方というてはない<sup>かない</sup>。妻が塩で茹<sup>ゆ</sup>で、持って来よつたようじゃが最初の中<sup>うち</sup>は香気が高くてナカナカ美味<sup>おいし</sup>いものじゃよ。新牛蒡<sup>ごぼう</sup>のようなものじゃ。しかし二三日も喰いよると子供等が飽いて、ほかのものを喰いたがるのは困つたよ。ハツハツハツ」

と笑つているところは恰<sup>まる</sup>で飢饉の実話以上……ここいらは首陽山<sup>わらび</sup>に蕨<sup>わらび</sup>を採つた聖人の兄弟以上に買ってやらなければならぬと思う。別に周の世を悲しむといったような派手なメアテが在つた訳ではなかつたし、聖人でも何でもない。憐れな妻子<sup>みちづ</sup>が道伴<sup>みちづ</sup>れだつたのだから尚<sup>なおさら</sup>更である。

その時代の事であつたらうと思うが、筆者の母親の生家に不幸



のあつた時のこと、仏に旧交のあつた奈良原到が、どこから借りて来たものか上下チグハグの紋服はかまに袴はかまを穿はいて悔みに来た。

「ほんの心持だけ……」

と皆に挨拶をして香こうでん 奠でんと書いた白しら紙かみの包みを仏前に供うえ恭うやうやしく礼拝して帰つたので皆顔を見合わせた。一体あの貧乏人がイクラ包んで来たのだろう……といふので打寄つて開いてみると中には何も這入つていなかった。正真正銘の白紙だけだったので皆抱腹絶倒した。

しかし心ある二三の人は涙を浮べて感心した。

「奈良原到は流石さすがに黒田武士じや、普通の奴なら貧乏を恥じて、挨拶にも来ぬところじやが……」

生存している老看守某の話によると、奈良原到の須崎典獄時代には、囚人の奈良原を恐るる事、想像の外であつたという。ドンナに兇猛な囚人でも、奈良原典獄が佩劍はいけんを押えて、

「その縄を解け。こつちへ連れて来い」

と云つて睨み付けると、今にも斬られそうな殺気に打たれたらしい。眼を白くして縮み上つたという。

或る夜のこと、死刑にする筈の四人の囚人が、破獄したという通知が来たので、奈良原典獄は直ぐに駈付けて手配をさせた。そうして自身は制服のままお台場の突角とっかくに立って海上を見渡していると、やや暫くしてから足下の石垣をゾロゾロ匍はい登つて来る

者が居る。よく見ると、それがタツタ今破獄したばかりの四人の囚人たちで、海水にズブ濡れのまま到翁の足下にひれ伏して三拝九拝しているのであった。

後から取調べたところによると、その囚人はトテも兇暴、無残な連中で、看守をタタキ倒して破獄の後、お台場の下に浮かべてある夥しい材木の蔭に潜んで追捕の手を遣り過し、程近い潮場の下の釣船を奪って逃げるつもりであったが、その中に四人の中の一人が、

「……オイ……石垣の上に立って御座るのがドウヤラ典獄さんらしいぞ」

と云うと皆、恐ろしさに手足の力が抜けて浮いていられなくな

った。齒の根がガチガチ鳴り出して、眼がポオとなつてウツカリすると波に漑さらわれそうになつて来たので四人がだんだん近寄つて来て……これはイカン。こんな事ではドウにもならんから、破獄を諦らめよう。一思いに奈良原さんの前に出て行つて斬られた方がええ……という事に相談がきまると、不思議にも急に腰がシヤンとなつて、身内が温まつて、勇氣が出て来た。吾お後れじと石垣を匍はいのぼ登つて来た……という話であつた。これなぞは囚人特有の一種の英雄崇拜主義の極端なあらわれの一つに相違ないので、奈良原の異常な性格を端的に反映した好逸話でなければならぬ。

「その頃の囚人の気合は今と違つておつたように思ふなあ」と嘗かつて奈良原翁は酒を飲み飲み筆者に述懐した。

「ワシは長卷ながまき直なおしの古刀を一本持つておつた。二尺チョツと位と思われる長さのもので、典獄時代から洋サアベル剣に仕込んでおつたが、良う切れたなあ。腕でも太股でも手ごたえが変らん位で、首を切るとチャプリンと奇妙な音がして血がピューと噴水のように吹出しながらたおれる。ああ斬れた……と思う位で水も溜まらぬというが全くその通りであつた。その癖刀身は非常に柔らかくて鉛か鉛のような感じがした。台湾の激戦の最中に生蕃の持つてゐる棒なぞを斬ると帰つて来てから鞆さやに納まらん事があつたが、それでも一晩、床の間に釣り下げておくと翌る朝は自然と真直まっすぐになつておつた。生蕃征伐に行つた時、大勢の生蕃を珠数じゆずつなぎに生捕つて山又山を越えて連れて帰る途中で、面倒臭くなると斬つてし

まう事が度々であつた。あの時ぐらい首を斬つた事はなかつたが、ワシの刀は一度も研とがないまま始終切味が変らんじやつた。

生蕃という奴は学者の話によると、日本人の先祖という事じやが、ワシもつくづくそう思うたなあ。生蕃が先祖なら恥かしいドロコロではない。日本人の先祖にしては勿体ない位、立派な奴どもじや。彼奴等きやつは、戦争に負けた時が、死んだ時という覚悟を女子供の端はしくれまでもチャンと持っているので、生きたまま捕虜にされるつらると何とのう不愉快な、理窟のわからんような面付きをしておつた。彼奴等は白旗を揚げて降参するなどいう毛唐流の武士道を全く知らぬらしいので、息の根の止まるまで喰い付いて来よつたのには閉口したよ。そいつを抵抗出来ぬように縛り上げて珠数つ

なぎにして帰ると、日本人は賢い。首にして持つて帰るのが重たいためにこうするらしい。俺達は自分の首を運ぶ人夫に使われて  
いるのだ……と云うておつたそうじゃが、これにはワシも赤面したのう。途中で山道の谷合いに望んだ処に來ると、ここで斬るの  
じやないかという面つらつき付で、先に立つてゐる奴が白い齒を剥むき出  
して冷笑しいしい、チラリチラリとワシの顔を振り返りおつたの  
には顔負けがしたよ。そんな奴はイクラ助けても帰順する奴じや  
ないけに、総督府の費用を節約するために、ワシの一存で片かたっぱ  
端しから斬り棄すてる事にしておつた。今の日本人の先祖にしてはチ  
ツと立派過ぎはせんかのうハツハツハツハツ」

日本に帰って千代町の役場に奉職している時は毎月五円の月給（巡査の月給二円五十銭、警部が三円時代）を貰っていたが、その殆んど全部が酒代さかてになつていた事は云う迄もない。今は故人になつた前の福岡市の名市長、佐藤平太郎氏は神戸署の一巡査の身で、外人の治外法権制度に憤慨し、神戸居留地域を離るる一間ばかりの処で、人力車夫に暴行して逃げて行く外人を斬つて棄て、天下を騒がした豪傑であるが、氏は語る。

「巡査を罷やめて故郷に帰り、久し振りに昔の面めん小手こて友達てんどうの奈良原を千代町の寓居に訪うてみると、落ちぶれたにも落ちぶれないにも四畳半といえ、四畳半、三方の壁の破れから先は天下の千畳敷ちぢぢに続いている。その秣まぐさを積たんだような畳ぢぢの中央しんじゆに虱しらみに埋うまつた



まま悠々と一升徳利を傾けている奈良原を発見した時には、流石さすがの僕も胸が詰ったよ。僕も相当、落ちぶれたおぼえはあるが、奈良原の落ちぶれようには負けた。アンマリ穢きたないので上りかねているのを無理に引っぱり上げた奈良原は大喜びだ。

『久し振りだ。丁度いいところだから一杯飲め。まずその肴さかなを抓つまめ』という。見ると禿はげちよろけた椀の蓋に手前が川で掴んで来たらしい一寸すんぐらいの小蝦こえびが二匹乗っかっている。『遠慮なく喰え』という志は有難いが、それを肴に奈良原が一升の酒を飲むのかと思うと涙がこぼれた。一匹の小蝦が咽喉のどを通らないのを無理に冷酒ひやざけで流し込んで『これが土産だ』と云ってその時の僕の全財産、二十銭を置いて来た」云々。

そうした貧乏のさなかに大変な事が起つた。奈良原翁が病氣になつたのだ。

何だか酒が美味おいしくない。飯が砂を嚙むようで、頭がフラフラして死にそうな気がするので、千代町役場からその月の俸給を一円借りて近所の医者いしやの処へ行つた。一円出して診察を請うて薬を貰つたが、

「どうです。助かりますか」

と問うてみると若い医者いしやが首をひねつた。

「どうも非道ひどい肺炎ですから、絶対に安静にして寝ておいでなさい。御親戚の方か何かに附添つておもらいなさい」

奈良原翁は、こうした言葉を「もう助からない」意味と取つて

非常に感謝した。

……俺はイヨイヨ死ぬんだ。奈良原到がコレ以上に他人に迷惑をかけず、コレ以上に世道人心の腐敗墮落を見ないで死ぬるとは、何たる幸福ぞ。よしよし。一つ大いに祝賀の意を表して、愉快に死んでやろう……。

奈良原翁は、その足で今一度役場に立寄つて町長に面会した。

「オイ。町長。イヨイヨ俺も死ぬ時が来たぞ」

「ヘエツ。何か戦争でも始まりますか」

「アハハ。心配するな。今医者が俺を肺炎で死ぬと診断しおつた。そこでこれは相談じゃが、香奠と思うて今月の俸給の残りの四円を貸してくれんか」

「へエへエ。それはモウ……」

というので四円の金を握ると今度は酒屋へ行つて、酒を一樽買つて引ひきせん栓を附けて例の四畳半へ届けさせた。

その樽と相前後して帰宅した奈良原翁は、軒先の雨垂落あまだれおちの白い砂を掻集めて飯茶碗へ入れ、一本の線香を立て樽と並べて寢床の枕元に置いた。それから大きな汁椀に酒を引いて、夜具の中でガブリガブリやっているうちにステキないい心持になった。ハハア。こんな心持なら死ぬのも悪くないな……なぞと思ひ思ひ朝鮮征伐の夢か何かを見ている中うちに前後不覚になつてしまった。

そのうちにチューチューという雀の声が聞えたので奈良原翁はフツと気が付いた。ハハア。極楽に来たな。極楽にも雀が居るか

な……なぞと考へて又もウトウトしているうちに、今度は博多灣の方向に當つてボオ——ボオ——という蒸氣船の笛が鳴つたので奈良原翁はムツクリと起上つて眼をこすつた。見ると、誰が暴れたのかわからないが昨夜の大きな酒樽が引つくり返つて、栓が抜けている横に、汁椀が踏潰ふみつぶされている。通夜つやの連中に飲ましてやるつもりで、残しておいた酒は一滴も残らず破れ疊が吸い込んで、そこいら一面、真赤になつて酔払つてゐる。

その樽と、枕を左右に蹴飛ばした奈良原翁は、蹠々そうそうろうろう 踵々かかとかかと として昨日きのうの医者うの玄関に立つた。診察中の医者うの首筋を、例の剛力でギューと掴んで大喝した。

「この藪医者。貴様のお蔭で俺は死しにそこ損そこのうたぞ。地獄か極楽へ

行くつもりで、香奠を皆飲んで終うた人間が、この世に生き返つたらドウすればええのじゃ」

度を失つた医者にはポケットから昨日の皺苦茶の一円札を出して三拜九拝した。

「……………どうぞ御勘弁を、息の根が止まります」

「馬鹿奴<sup>め</sup>……………その一円は昨日<sup>きのう</sup>の診察料じゃ。それを取返しに来るような奈良原到と思うか。見損なうにも程があるぞ」

「どうぞどうぞ。お助けお助け」

「助けてやる代りに今日の診察料を負けろ。そうして今一遍、よく診察し直せ。今度見損うたなら斬つてしまふぞ」

<sup>ちなみ</sup>因にその診察の結果は全快、間違いなし。健康 申<sup>もうしぶん</sup>分なし。

長生き疑いなしというものであった。

大正元年頃であった。桂内閣の憲政擁護運動のために、北海道の山奥から引っぱり出された奈良原到翁は、上京すると直ぐに旧友頭山満翁を当時の寓居の靈南坂に訪れた。

互いに死生を共にし合った往年の英傑児同志が、一方は天下の頭山翁となり、一方は名もなき草叢裡そうそうりの窮措大翁きゆうそだいとなり果てたまま悠々きゆうかつ久じよ濶じよを叙する。相共に憐れむ双鬢そうかんの霜といったような劇的シインが期待されていたが、実際は大違いであった。両翁が席を同じゆうして顔を見合せてみると、双方ともジロリと顔を見交してアゴを一つシャクリ上げた切り一言も言葉を交さな

かつた。知らぬ者が見たら、銀座裏でギヤング同志がスレ違つた程度の手軽い挨拶に過ぎなかつたが、しかし、その内容は雲泥の違いで、両翁とも互いに、往年の死生を超越して気魄が、老いて益々さかん壯なるものが在るのを一瞥の裡うちに看取し合つて、意を強うし合つているらしい。その崇高とも、厳肅とも形容の出来ない気分が、席上にほうはく磅して来たので皆思わず襟えりを正したという。

それから入いりかわ代り立代り来る頭山翁の訪客を、奈良原翁はジロリジロリと見迎え、見送っていたが、やがて床の間に置いてある大きなすずりいし硯石に注目し、訪客の切れ目に初めて口を開いた。

「オイ。頭山。アレは何や」

頭山翁は、その硯をかえりみて微笑した。



「ウム。あれは俺が字を書いてやる硯タイ」

奈良原翁は、それから間もなく頭山翁に見送られて玄関を辞去したが、門前の広い通りを黙って二三町行くと、不意に立止つてからす鴉の飛んで行く夕空を仰いだ。タツタ一人でかせん呵然として大笑した。　「頭山が字を書く……アハハハ。頭山が字を書く。アハハ。頭山が書を頼まれる世の中になつてはモウイカン、世の中はオシマイじゃワハハハハハ……」

そこいらに遊んでいる子供等が皆、ビツクリして家の中へ逃込んだ。

奈良原翁が晴れの九州入をする時に、当時二十五か六で、文学

青年から禅宗坊主に転向していたばかりの筆者は、思いがけなく到翁の侍従役を仰おおせつ付けられて、共々に新橋駅（今の汐留駅）に来た。翁は旧友から貰ったという竹製のカンカン帽に、手織木もめん綿縞じまの羽織着流し、青竹の杖、素足に古い泥ダラケの桐下駄きりげた、筆者は五リン刈の坊主頭に略法衣りやくほうえ、素足に新しい麻裏という扮装である。荷物も何も無い気楽さに直ぐに切符売場へ行つて、博多までの二等切符を買つて来ると、三等待合室の中央に立つて待っている到翁が眼早く青切符を見咎みとがめてサツと顔色を変えた。

「それは中等の切符じゃないかな」

その頃から十四五年前ぜんまでは二等の事を中等と云つた。従つて一等の白切符を上等と称し、三等の赤切符を下等と呼んだ。

「はい。昔の中等です。御老体にコタえると不可い得けせんから……」

「馬鹿ッ」

という大喝が下等待合室を、地雷火のように驚かした。

「馬鹿ッ。アンタは、まだ若いのに何という不心得な人かいな。

吾々のような人間が、国家に何の功労があれば中等に乗るかいな。下等でも勿体ない位じゃ。戻いて来なさい。馬鹿ナッ」

と云ううちに青竹の杖が、今にも筆者の坊主頭に飛んで来そうな身構えをした。……飛んでもない国士のお供を仰付けられた……と思いきい大勢の下等客の視線を浴びながら、買換えに出て行った時の、筆者の器量の悪かったこと……。

それから予定の通り下等の急行列車に乗込むと、又驚いた。

ちようど二人分の席が空すいていたので、窓際の席を翁にすすめると翁は青竹の杖を突張つて動かない。

「イヤイヤ。アンタ窓の処へ行きなさい。わしは年寄で、夜中に何度も小便に行かねばならぬけにウルサイ」

どちらがウルサイのかわからない。云うがままに窓の前に席を取ると又々驚いた。

筆者に尻を向けて、ドッコイシヨと中央の通路向きに腰を卸おろした翁は、袂たもとから一本の新しい日本蠟燭ろうそくを出して、マッチで火を点つけた。何をするのかと思うと、その蠟ろう涙るいを中央の通路のマン中にポタポタと垂らしてシツカリとオツ立てた。驚いて見ているうちに、今度は腰から煤すす竹筒だけづつの汚ない煙草入を出して、その蠟

燭の火で美味おいしそうに何服も何服も刻煙草きざみたばこを吸うのであつたが、まだ発車していないので、荷物なんかを抱えて通抜けようとする奴なんかがあると、翁が殺人狂じみた物凄い眼を上げて、ジロジロと睨むので、一人残らず引返して出て行く。痛快にも傍若無人にもお話にならない。見るに見かねた筆者が、

「マツチならコチラに在りますよ」

と云ううちに煙草を吸い終つた翁は、蠟燭の火を蠟涙と一緒に振切つて、古新聞紙に包んで袂そでに入れた。蠟涙を引っかけられた向側の席の人が慌ててマントの袖そでを揉んでいたが、翁は見向きもしなかつた。

「マツチや線香で吸うと煙草が美味おいしゆうない。燃え火で吸うの

が一番美味おいしいけになあ」

奈良原翁の味覚が、そこまで発達している事に氣附かなかつた筆者は全く痛み入ってしまった。この塩あんばい梅では列車に放火して煙草を吸いかねないかも知れない。

「北海道の山奥で雪に埋れていると酒と煙草が楽しみでなあ。炉の火で吸う煙草の味は又格別じや。もつとも煙草は滅多に切れぬが酒はよく切れたので閉口した。万止むを得ん時には砂糖湯を飲んだなあ。アルコールも砂糖も化学で分析してみると同じ炭素じやけになあ」

筆者はイヨイヨ全く痛み入ってしまった。同時にそこまで考える程に苦しんだ翁が氣の毒にもなつた。

国府津こうづに着いてから正宗の瓶と、弁当を一個買つて翁に献上すると、流石さすがに翁の機嫌が上等になつて来た。同時に翁の地声がダンドン潤おいを帯びて来て、眼の光りが次第に爛々らんらんけいけい炯々けいけいと輝き出したので、向い合つて坐つていた二人が気味が悪くなつたらしい。箱根を越えない中うちにソコソコと荷物を片付けて、前部の車へ引移つてしまつたので、翁は悠々と足を伸ばした。世の中は何が倖しあわせになるかわからない。筆者もノウノウと両脚を踏伸ばして居ねむりの準備を整える事が出来た。その二人の脚の間へ翁が又、弁当箱の蓋にオツ立てた蠟燭の火を置いたので、筆者は又、油断が出来なくなつた。

翁は一服すると飯を喰い喰い語り出した。

「北海道の山の中では冬になると仕様がなないけに毎日毎日聖書を読んだものじゃが、良え本じやのう聖書は……アンタは読んだ事があるかの……」

「あります……馬太伝マタイと約翰伝ヨハネの初めの方ぐらいのもんです」

「わしは全部、数十回読んだのう。今の若い者は皆、聖書を読むがええ。あれ位、面白い本はない」

「第一高等学校では百人居る中で恋愛小説を読む者が五十人、聖書を読む者が五人、仏教の本を読む者が二人、論語を読む者が一人居ればいい方だそうです」

「恋愛小説を読む奴は直ぐに実行するじやろう。ところが聖書を



読む奴で断食をする奴は一匹も居るまい」

「アハハ。それあそうです。ナカナカ貴方は通人ですなあ」

「ワシは通人じゃない。頭山や杉山はワシよりも遙かに通人じゃ。恋愛小説なぞいうものは見向きもせぬのに読んだ奴等が足下にも及ばぬ大通人じゃよ」

「アハハ。これあ驚いた」

「キリストは豪い<sup>えら</sup>奴じやのう。あの腐敗、墮落したユダヤ人の中で、あれだけの思い切った事をズバリズバリ云いよったところが豪い。人触<sup>ふ</sup>るれば人を斬り、馬触<sup>ふ</sup>るれば馬を斬るじや、日本に生れても高山彦九郎ぐらいのネウチはある男じや」

「イエス様と彦九郎を一<sup>いっしょ</sup>所にしちや耶蘇<sup>やそ</sup>教信者が憤<sup>おこ</sup>りやしませ

んか」

「ナアニ。ソレ位のところじゃよ。彦九郎ぐらいの気概を持った奴が、猶太ユダヤのような下等な国に生れれば基督キリスト以上に高潔な修業が出来るとも知れん。日本は国体が立派じゃけに、よほど豪い奴でないとは光らん」

「そんなもんですかねえ」

「そうとも……日本の基督教は皆間違うとる。どんな宗教でも日本の国体に捲込まれると去勢されるらしい。愛とか何とか云うてきんたま辜丸きんたまの無いような奴が大勢寄集まつて、涙をボロボロこぼしおるが、本家の耶蘇はチャンと辜丸きんたまを持っておつた。猶太でも羅ウマ馬ウマでも屁とも思わぬ爆弾演説を平気で遣やりつづけて来たのじゃから

恐らく世界一、喧嘩腰の強い男じやろう。日本の耶蘇教信者は殴られても泣笑いをしてペコペコしている。まるで宿引きか男めかけのような奴ばかりじや。耶蘇教は日本まで渡つて来るうちにインド印度洋かどこかできんたま辜丸を落いて来たらしいな」

「アハハハハ。基督の十字架像に大きなきんたま辜丸を書添えておく必要がありますな」

「その通りじや。元來、西洋人が日本へ耶蘇教を持込んだのは日本人を去勢する目的じやつた。それじやけに本家本元の耶蘇からして去勢して来たものじや。徳川初期の耶蘇教禁止令は、日本人のきんたま辜丸、保存令じやという事を忘れちやイカン」

筆者はイヨイヨ驚いた。下等列車のうち中で殺人英傑、奈良原到翁

から基督教ときんたま宰丸の講釈を聞くという事は、一生の思い出と気が付いたのでスツカリ眼が冴えてしまった。

奈良原到翁の逸話はまだイクラでもある。筆者自身が酔うた翁に抜刀で追かけられた話。その刀をアトで翁から拝領した話などかずかぎり数限もないが、右の通、翁の性格を最適切にあらわしているものだけを挙げてアトは略する。

ちなみ因に奈良原翁は嘗て明治流血史というものを書いて出版した事があるという。これはこの頃聞いた初耳の話であるが、一度見たいものである。

次は江戸ツ子のお手本、はなかわどすけろく花川戸助六、ばんずいんちちようべえ幡随院長兵衛にさぶろうに對照してヒケを取らない博多ツ子のお手本、故、篠崎仁三郎君を

御紹介する。

## 篠崎仁三郎

(上)

……縮ちぢみや屋新助じゃねえが江戸っ子が何でえ。徳川三百年の御  
 治世がドウしたというんだ。憚はばかんながら博多の港は、世界中で一  
 番古いんだぞ。埃エジプト及の歴アレキサンドリア山港よりもズツト古いんだ。神

世の昔××××様のお声がかりの港なんだから、いつから初まつたか解かれねえ位だ。くれえツイこの頃まで生きていた太田道灌どうかんのお声がかりなんてえシミツタレた町たあ段式が違うんだ。

勿もつたい体なくも日本文化のイロハのイの字は、九州から初まつた

んだ。アイヌやコロボツクルの昔から九州は日本文化の日下ひのしたかい

開山さんなんだ。八幡様や太閤様の朝鮮征伐、唐から、天竺てんじくの交通の

カナメ処になつて、外国をピリピリさせていた名所旧跡は、みんな

博多を中まんなか心にして取囲んでいるんだ。唐津、名護屋なごや、怡土城いと、

太宰府、水城みずき、宇美うみ、宮崎みやざき、多々羅たたら、宗像むなかた、葦屋、志賀島しかのしま、

残のこのしま島、玄海島、日本海海戦の沖の島なんて見ろ、屈辱外交の

旧跡なんて薬にしたくもないから豪気だろう。伊豆の下田の黒船

以来、横浜、浦賀、霞が関なんて毛唐に頭ア下げつ放しの名所旧跡ばつかりに取巻かかっている東京なんかザマア見やがれだ。

もう一ペン云ってみようか。江戸ツ子が何でえ。博多には博多ツ子が居るのを知らねえか。名物の博多織までシャンとしているのが見えねえか。博多小女郎の心意気なんか江戸ツ子にやあわかるめえ。

日増しの魚や野菜を喰っている江戸ツ子たあ臍はらわた腑わたが違うんだ。

玄海の荒海を正面に控えて「襟えりあか垢かの附かぬ風」に吹き晒さらされた

哥あんちゃん兄あにだ。天下の城しやちほこの鯨じやうの代りに、満蒙露西亞ロシヤの夕焼雲を横目

に睨にらんで生れたんだ。下水どぶの親方の隅田川に並んでいるのは糞くそ

船ねばつかりだろう。那珂川なかの白砂では博多織を漂さら白しろすんだぞ畜



生……。

芸妓げいしやを露払いにする神田のお祭りが何だ。博多の山笠やまがさか昇きは

電信柱を突きたおすんだぞ。飛鳥山あすかの花見ぐらいに驚くな。博多

の松囃子ドンタクを見ろ。町中が一軒残らず商売を休んで御馳走を並べて、

全市が仮装行列ドンタクをやるんだ。男という男が女に化けて、女という

女が男に化けて飲み放題の踊り放題の無礼講が三日も続くんだぞ。

謝肉祭カーニバルの上を行くんだ。巡查や兵隊までが仮装ドンタクと間違えられ

る位、大あばれに暴れるんだぞ。そんな馬鹿騒ぎの出来る町が日

本中のどこに在るか探してみろ。それでいて間違いななんか一つも

ないんだ。翌る日になると酔うた影も見せずにキチンと商売を初

めるんだ。絹はなてんずくめの振袖でも十両仕立ての袴はなてん纏はなてんでもタツタ一

度で泥ダラケにして惜しい顔もせずに着棄て脱ぎ棄てだ。三味線知らぬ男が無ければ、赤い扇持たぬ娘も無い。博多は日本中の諸芸の都だ。町人のお手本の居る処だぞ。来るなら来い。臟腑はらわたで来い。大竹を打割って締込みにして来い……。

×

×

×

ここに紹介する博多はかたつこ児の標本、篠崎仁三郎君は、博多大浜おおはまの魚市場でも随一の大株、湊屋みなとやの大將である。近年まで生きていた評判男であるが正に名僧仙崖せんがい、名娼明月めいげつと共に博多の誇

りとするに足る不世出の博多ツ子の標本と云つてよかろう。但、博多語が日本の標準語でないために、その洒脱な言葉癖をスケッチしてピントを合わせる事が出来ないのが、千秋の遺憾である。

同君の経歴や、戸籍に関する調査は面倒臭いから一切ヌキにして、イキナリ同君の真面目しんめんもくに接しよう。

筆者が九州日報の記者時代、同君を博多旧魚市場に訪問して

「博多ツ子の本領」なる話題について質問した時の事である。短軀肥満、童顔豊頬にして眉間に小豆大あずきの疣いぼを印したミナト屋の大将是快然として鉢巻を取りつつ、魚鱗うろこの散乱した糶ばんだい台あぐらに胡座を掻き直した。競場せりばで鍛い上げた胴間声どうまを揺すつて湊屋一流の怪長

広舌を揮い始めた。

「へエ。貴方あなたは新聞記者さん……へエ。結構な御商売だすなあ。社会の木魚タタキ。無冠の太夫……私共のような学問の無いものにや勤まりまつせん。この間も店の小僧に『キネマ・ファンたあ何の事かいなあ』て聞かれましたけに、西洋の長唄の先生の事じやろうて教えておきましたたれア違いますそうで。キネマ・ファンちう者は日本にも居るそうで。私は又、杵屋きねや勘五郎が風邪引いたかと思つておりましたが……アハハハ。

魚市場の商売ナンテいうものは学問があつちや出来まつせん。早よう云つてみたなら詐欺インチキと盗人ぬすとの混血児あいのこだすなあ。商売の中こでも一番商売らしい商売かも知れませんが……。

第一、生魚しなものをば持つて来る漁師が、漁獲高とれだかを数えて持つて来る者は一人も居りまつせん。沖で引つかかつた鯖さばなら鯖、小鯛こだいなら小鯛をば、穫れたら穫とれただけ船に積んでエツサアエツサアと市場の下へ漕ぎ付けます。アトは見張りの若い者か何か一人残つて、櫓ろかいを引上げてそこいらの縄なわ暖簾のれんに飲みげに行きます。

その舟の中の魚を数え上げるのは市場の若い者で、両手で五匹ぐらいずつ一掴みにして……ええ。シトシトシト。フタフタ。ミスミス。ヨスヨスヨスと云いおる中うちに、三匹か五匹ぐらいはチャンと余計に数えております。永年数え慣れておりますケン十人見張つておりまして同じ事で、メ《しめ》て千とか一万とかになつた時には、二割から三割ぐらい余分に取込んでおります。

そいつを私が糶ぼんだい台だいに並べて、

『うわアリヤリヤリヤ。拳けんけん々安かア安かア安かア。両拳りゃんこ両拳

両拳。うわアリアリア安か安か安か』

と糶せるうちに肩を組んで寄つて来た売子の魚屋やつが十尾コン一円二十  
 銭で落いたとします。その落いた魚屋やつの襟印を見て帳面に『一円  
 五十銭……茂兵衛』とか何とか私共一流の走書やつきに附込んだ魚を  
 泄さらうように引つ担いで走り出て行きます。払いの悪い奴なら一円  
 七十銭にも八十銭にも附けておきますので、後で帳面を覗のぞきに來  
 ても一円三十銭やら二円五十銭やら読み分ける事は出来まつせん。  
 学問のある人の書くような読み易い字で、帳面をば附けたなら私  
 共の商売は上つたりで……。つまり何分なんぶかの口こうせん銭を取つた上に、

数える時に儲ける。帳面に附ける時に又輪をかける。独博<sup>ひとりばくち</sup>奕の  
 雁木<sup>かんぎやすり</sup>鑪という奴で行き戻り引つかかるのがこの市場商売の正体  
 で、それでもノホホンで通つて行くところが沽券<sup>こけん</sup>と申しますか、  
 顔と申しますか。しかもその詐欺<sup>インチキ</sup>と盗人の附景氣のお蔭で、品  
 物がドンドン捌<sup>さば</sup>けて行きますので、地道に行きよつたら生<sup>なまもの</sup>物は  
 腐つてしまいます。世の中チウものは不思議なもんだす。

……へエ。博<sup>はかたっこ</sup>多児の資格チウても別段に困難<sup>むずか</sup>しい資格は要り  
 ません。懲役に行かずに飯喰いよれあ、それで宜<sup>え</sup>え訳で……もつ  
 ともこれが又、博多児の資格の中でも一番困難しい資格で御座い  
 ます。ほかの資格は何でもない事で……個条書にしたなら四ツか

五つ位も御座いまいしょうか。

◇ 第一個条が、十六歳にならぬ中に柳町の花魁おいらんを買うこと――

◇ 第二個条が、身代構わずに博奕を打つ事――

◇ 第三個条が、生命いのち構わずに山笠やまを昇かつぐ事――

◇ 第四個条が、出会い放題に××する事――

◇ 第五個条が、死ぬまで鰻ふくを喰う事――

◇ 第六個条が……まあコレ位に負けといて下さい。芸者を連れて松ドンタク囃子ドンタクに出る事ぐらいにしといて下さい。もつともこれは私共の若い時代じぶんの事で、今は若い者が学校に行きますお蔭かげで皆、賢明りこうになりました故けに、そげな馬鹿はアトカタも無のうなりました。その



代り人間が信用悪うなりましたが。

……へエ。私はその資格を通つたかと仰言るのですか。これ

は怪しからん。通つたにも通らぬにも甲の上ダラケの優等生で：

…へエ。

十五になつて高等小学校を出ると直ぐに紺飛白の筒ツポを着

て、母様の臍線をば仏壇の引出から掴み出して、柳町へ走つ

て行きましたが、可愛がられましたなあ。『小か哥 兄 小か哥

兄』ち云うと息の止まる程、花魁に抱き締められましたなあ。

ハハハ。帰りがけに真鍮の指環をば一個花魁から貰いましたが、

その嬉しさというものは生れて初めてで御座いました。日本一の

色男になつたつもりで家へ帰つても胸がドキドキして眼の中が熱

つうなります。そこで上りかまち框に腰をかけて懐中ふつくらからその貰うた指環をば出して、てのひら掌の中央まんなかへ乗せて、タメツ、スガメツ引つくり返かやいておりますと、背後うしろからヌキ足さし足、覗いて見た親父おやじが、大きな拳骨で私の頭をゴツウ——ンと一つ啖くらわせました。その拍子だいじに大切な指環がどこかへ飛んで行いてしまいました。

私は土間へ引つくり返つてワンワン泣き出しました。何をいうにも今年十五の色男だすけに根どたまつから他愛どたまがありません。そこへ奥かかさんから母親かかさんが出て来まして、

『何事なんごと、泣きよるとナ』

と心配して聞きましたから、

『指環いびがねの無のうなつたあ。ウワア——』

と一層、高音たかねを揚げて精一ぱいに泣出しますと、母親は私の坊主頭を撫でながら、

『ヨカヨカ。指環ぐらい其中いんま、買うちやる』  
と慰めてくれました。私は腹立ち紛れに、

『アンタに買うてもろうたチャ詰まらん』

と怒鳴つてメチャメチャに泣出しましたが、あん時はダイブ失恋しておりましたナア。

鰻ふくも、ずいぶん喰いましたなあ。

私の口から云うのも何で御座いますが、親父は市場でも相当顔の利いた禿頭はげで御座いましただけに、その頃はまだ警察から禁とめ

られておりました。フクを平気で自宅うちの副食物ごさいにしておりました。まあだ乳離れしたバツカリの私の口へ、雄精しろうこなどを箸で挟んで入れてくれますので母親がビツクリして、

『馬鹿な事ばしなさんな。年端としはも行かん児供こどもが中毒あたつて死んだならどうしなさるな』

と押しめますと、親父は眼を剥むいて母親ははを怒鳴がみ付けたそうです。

『……甘いこと云うな。鰻うなぎをば喰きい能らんような奴は、博多の町では育ち能らんぞ。今から慣ならしておかにや、詰あまらんぞ。中毒あたつて死ぬなら今の中うちじやないか』

そげな調子で、いつから喰くい初はめたか判わか然かりませんが、鰻うなぎでは随分、無茶をやりました。

最初は一番毒の少ないカナトウ鰻をば喰いましたが、だんだん免疫なれて来ますと虎鰻、北枕ナンチいうものを喰わんとフク喰うたような気持になりまつせん。北枕などを喰うた後で、外へ出て太陽光なたに当たると、眼が眩もうてフラフラと足が止まらぬ位シビれます。その気持の良ええ事というものは……。

それでもダンダンと毒に免疫なれて来ると見えて、後日しまいには何ともうなつて来ます。北枕を喰うた奴も一町内に三人や五人は居るような事でトント自慢になりまつせんケニ、一番恐ろしいナメラという奴を喰うてみました。

ナメラというのは小さい鰻で、全身ごたいが真黒でヌラツとした見るからに気味きびの悪い恰好をしておりますが大抵の鰻好ふくくいが『鰻は洗

いよう一つで中毒あたらん。しかしナメラだけはそう行かん』と申します。そうかと思うと沖から来る漁夫りょうしなどは『甘い事云いなさんな。ナメラが最極いっち上利く』と云う者も居ります。

そこで私共の放蕩あくたれ仲間が三四人申合わせてそのナメラを丸のままブツ切りにして味噌汁に打込んで一杯飲やる事にしましたが、それでも最初はヤツパリ生命いのちが惜しいので、そのナメラの味噌汁をば浜外れの蒲鉾小舎かまぼこやに寝ている非人に遣ってみました。

『ホラ……余り物もんば遣るぞ』

と云うて蒲鉾小舎の入口に乾ほいて在る面桶めんつつに半分ばかり入れてやりましたので、非人はシキりに押頂いておりましたが、暫くしてから行ってみますと、喰うたと見えて面桶が無い。本人もま

だ生きて煙草を吸うている様子です。そこで安心して皆で喰べましたが、美味うもう御座いましたなあ。ソレは……トテモ良ええ気持に酒が廻まわわつてしまいました。

それから帰り途しなにその非人の処を通りかかりましたが、酔うたマギレの上機嫌で、

『最前の味噌チリ喰うたか』

と尋ねてみますと老としより人の躰いざりの非人が入口に這い出して来てペコペコ拝み上げました。

『ハイハイ。ありがとうございます様で御座ります。アナタ方も召上りしましたか』

と爛ただれた瞳めをシヨボシヨボさせました。

『ウン。喰うた。トテモ美味かつたぞ』

と正直に答えますと、暫く私どもの顔を見上げておりました非人は、先刻、呉れてやった味噌チリの面桶を筵の蔭から取出しました。

『へい。それなら私も頂戴しまつしよう』

とモウ一ペン面桶を拝み上げてツルツル喰い始めたのには驚きました。非人で試験してみるのが、正反對に非人から試験された訳で……。

これはマア一つ話ですがそげな来歴で、後日にはそのナメラでも満足せんようになって、そのナメラの中でも一番、毒の強い赤肝を雁皮のように薄く切ります。それから大きな禪盃に極



つばらみず  
上井戸水を一パイ張りまして、その中でその赤肝の薄切りを  
両手で丸めて揉みますと、盥一面に山のごと泡が浮きます。まる  
で洗濯石鹼あらいしやぼんを揉むようで……その水を汲み換え汲み換え泡の影  
が無のなるまで揉みました奴の三杯酔を肴さかなにして一杯飲もうモノ  
ナラその美味うまさというものは天上界だすなあ。喰い残りを掃溜へ  
捨てた奴を、鶏とりが拾いますとコロリコロリ死んでしましますがな  
あ。

……へエ。私は四度死んで四度とも生き返りました。四度目に  
はもう絶望つまらんちいうて棺桶へ入れられかけた事もあります。私の  
兄貴分の大惣だいそうナンチいう奴は棺の中でお経を聞きながらビツク  
りして、ウウ——ンと声を揚げて助かりました位で……イエイエ。

作りごとじや御座いまっせん。この理窟ばかりは大学の博士はかせさんでもわからん。へエ。西洋の小説にもそのような話がある……墓の下から生いき上あがった……へエ。それは小説だっしようが、これは小説と違います。正直正銘シラ真劍のお話で……。

御承知か知りませんが、鰻うなぎに中あた毒たると何もかも麻痺しびれてしもうて、一番いちばんしまい間際がけに聴覚のみみだけが生き残ります。

最初はじめ、唇くちの周囲ぐるりがムズ痒かゆいような氣持もちで、サテは少ちっと中毒ちゆうどくったかナ……と思ううちに指さきの尖端せんから不自由ふじゆうになつて来きます。立たとうにも腰こしが抜ぬけているし、物云ものいおうにも声こゑが出でん。その中うちに眼まなこがボウ——ツとなつて来て、これは大おほ変ごとが出来できたと思おもうた時ときには

モウ横に寝ているやら、座っているやら自分で判然わかんようになつております。ただ左りようほう右の耳だけがハッキリ聞こえておりますので、それをタヨリに部屋の中の動静ようすを考えておりますところへ、聞慣れた近所の連中の声がガヤガヤと聞こえて来ます。気の早い連中で、モウ棺箱いを担い込んで来ている模様です。

『馬鹿共が。又三人も死んでケツカル。ほかに喰う品物もんが無いじやあるまいし』

『知らぬ菌蕈なば喰うて死んだ奴と鰻喰うて死んだ奴が一番、見みともないナア』

『駐在所ちゆうざいにや届けといたか』

『ウン。警察では又かチウて笑いよつた。いま警察から医師いしやが来

て診察するち云いよった』

『診察するチウて脈の上った人間はドウなるもんかい』

『棺の中へ入れとけ。ドツチにしても形式かたばかりの診察じやろうケニ』

『蓋だけせずに置けや。親兄弟が会いげに来るケニ……』

『親兄弟も喜ぼうバイ、此輩こやつどもが死んだと聞いたならホツとしよろう』

『可哀相に……泣いてやる奴も居らんか……電信柱の蟬ばっかりか。ヤ……ドツコイシヨ……』

『重たいナア。死んだ奴は……』

『結構な死し態ようタイ。良ええ了き簡しバイ。鯁えに喰くわれよる夢でも見よ

ろう』

『ハハハ。鰻の方が中毒<sup>あた</sup>ろうバイ』

『しかしこの死態<sup>ぎま</sup>をば情<sup>いろおなご</sup>婦<sup>め</sup>い見せたナラ、大概の奴<sup>やつ</sup>が愛想<sup>あいそ</sup>尽かすばい。眼<sup>めん</sup>球<sup>たま</sup>をばデングリ返<sup>がや</sup>いて、鼻<sup>はな</sup>汁<sup>じゆ</sup>垂れカブって、涎<sup>よだく</sup>流<sup>なが</sup>つとる面相<sup>つら</sup>あドウかいナ』

『アハハハ。腐<sup>く</sup>った鰻<sup>うなぎ</sup>に似<sup>に</sup>とる。因果<sup>てきめん</sup>覲<sup>めん</sup>面<sup>めん</sup>バイ』

『オイオイ。ここは湊屋の仁三郎が長<sup>なが</sup>うなつとる。誰<sup>たれ</sup>か両脚<sup>あし</sup>の方<sup>かた</sup>ば抱<sup>かか</sup>えやい』

『待<sup>まち</sup>て待<sup>まち</sup>て。その仁三郎は待<sup>まち</sup>て。今俺<sup>いま</sup>が胸<sup>むね</sup>の処<sup>ところ</sup>をば触<sup>あた</sup>つて見<sup>み</sup>たれあ、まだどここの温<sup>ぬく</sup>い様<sup>さま</sup>ある。まあだ生<sup>なま</sup>きとるかも知<sup>し</sup>れん』

『ナニ。生<sup>なま</sup>きとるかも知<sup>し</sup>れん。馬鹿<sup>ばか</sup>吐<sup>く</sup>け。見<sup>み</sup>てんやい。眼<sup>めん</sup>球<sup>たま</sup>ア白<sup>しろ</sup>

うなつとるし、きんたま 鞆丸も真黒う固まつとる。あざり 浅蜷貝の腐つたゴト

口開けとる奴とばドウするケエ』

『まあまあ。そう云うな。一人息子じゃけに、念入れとこう』

この時ぐらい親の恩を有難いと思うた事は御座いません。親というものが無かつたならこの時に私は、ほかの連中と一所に棺はこ箱へ入れられて、それなりけりの千秋楽になつておりました訳で：

…。

『その通りその通り。助けてくれい助けてくれい』

と呼ぼうにも叫ぼうにも声は出ず、手も合わせられませぬ。耳を澄まして運を天に任かせておるその恐ろしさ。エレベーターの中で借金取りに出会つたようなもので……へエ……。

それでもお蔭様で生き上りますと又、現金なもので、折角、思  
 い知った親の恩も何も忘れて博奕は打つ……××はする……。

……へエ。その××ですか。これはどうも商売の奥の手で、こ  
 の手を使わぬ奴は人氣が立たず。魚類さかなが売れません。まあ云うて  
 みればこの奥の手を持たん奴は魚売の仲間かずに這入らんようなもの  
 で……へへへ。

その頃、私はまあだ問屋とんやの糶台ぼんだいに座らせられません。禿頭はげの  
 親爺おやしがピンピンして頑張がんぢやうつておりましたので……その親父おやしが引い  
 てくれた魚類さかなの荷籠めごに天秤ぼおこ棒ぼうを突込んで、母親かかさんが洗濯せんたくしてくれ  
 た裨纏はんてん一枚、草鞋わらじ一足、赤禪あかべこ一本で、雨風あめかぜを蹴破けやぶつてワアツ

と飛出します。どこの町でも魚類さかなう売りは行商人あきないにんの花形役者はながたで：  
 早乙女あんにゃんが採った早苗なえのように頭てつの天頂ペンに手拭てのぐいをチヨツト  
 捲き付けて、

『ウワ——イ。ナマカイランソ（鯛鯛の事）、ウワ——アアイイ：  
 …』

と横筋よこすじ違かいに往來おおかんば突抜けて行きます。号外おなごと同じ事ことで、こ  
 の触おらび声ごえの調子一つで売れ工合おなごが違いますし、情婦おなごの出来工合おら  
 が違いますケニ一一生懸命せいけんめいの死物狂しぶつくるいで青天井せいてんせいを向むかいて叫おらびます。  
 そこが若い者のネウチで……。

しかも呼込まれる先々が大抵レコが留守留守だすケニ間違まごいの起おこり  
 放題で、又、間違まちがうてやりますと片身かたみの約束やくそくの鯖さばが一本で売れた



りします。おかげでレコも帰って来てから美味いものが喰えると  
いう一挙両得になるワケで……。

それでも五六軒も大持てに持てて高価い魚がアラカタ片付く頃  
になりますと、もうへトへトになって、息が切れて、走ろうにも  
腰がフラ付きます。太陽様が黄色く見えて、生汗が背中を流  
れて、ツクツク魚売人の商売が情無うなります。何の因果で  
こげな人間に生れ付いたか知らん。孫子の代まで生物は売らせ  
まいと思いい思いい空からになった荷籠めごを担いで帰って来ます。  
それでも若い中うちは有難いもので、その晩一寝入りしますと又、  
翌る朝は何さかなのう生魚さかなを売りに行きとうなります。

バクチは親父おやじが生きとる中うちは遣りませんでしたが、死ぬると一  
氣に通夜の晩から初めまして、三年経たぬ中うちに身代をスツテンテ  
レスコにして終しまいました。それを苦に病んで母親も死ぬる……と  
いうような事で、親不孝者の標本おてほんは私で御座います。へい。

今では身寄タヨリが在りませぬので、イクラ働いても張合いが  
御座いまっせん。それでも世界中が親類かたと思うて、西洋人いじんの世話  
までしてみましたが、誰でも金かねの話だけが親類で、他事あつは途中みち  
擦すれちご違ちがうても知らん顔です。

『道楽はイクラしても構わん。貴様ぬしが儲けて貴様ぬしが遊ぶ事じゃケ  
ニ文句は云わんが、赤の他人でも親類になる……見ず知らずの他  
人の娘でも蹴倒けたおす金の威光だけは見覚えておけよ』

というのが死んだ親父の口癖で御座いましたが、全くその通りの懸<sup>かけ</sup>価<sup>ね</sup>なしで、五十幾<sup>いくつ</sup>歳のこの年になって、ようようの事、世間が見えて来ましたがチツト遅う御座いましたナア。人間万事身から出た錆と思うて……親不孝の申<sup>もうしわけ</sup> 訳<sup>わけ</sup> と思うて、誰でも彼でも親切にしてやる片手間には、イツモ親父の石塔に頭を下げておられますが、お蔭で恩知らずや義理知らずに出会うても格別腹も立ちません。両親の墓に線香を上げるとスウーツとしてしまいます。バクチの失<sup>しくじり</sup>敗<sup>ばなし</sup> 談<sup>だん</sup> ですか。バクチの方はアンマリ面白い事は御座いません。資<sup>か</sup>金<sup>ね</sup>に詰<sup>く</sup>ま<sup>つ</sup>て友達の生<sup>いき</sup>胆<sup>ぎも</sup>を売<sup>う</sup>つて大間違<sup>ちが</sup>いを仕出<sup>し</sup>かしたのを幕<sup>ちよん</sup>切<sup>き</sup>にして、立派にやめてしまいました。が、考<sup>かん</sup>え<sup>え</sup>てみると私<sup>わたし</sup>輩<sup>ども</sup>の一生は南京花火のようなもので……シユ

シユシユシユポンポン……ウワアーイというただけの話で……。

……へエ……その生胆売りの話ですか。どうも困りますなあ。アンマリ立派な話じや御座いませんで……あの時のような遣切ない事はありませんじゃった。今まで誰にも云わずにおりましたが……懲役に遣られるかも知れませんで……。決して悪気でした事では御座いませんじやったが、人間の生胆きもと枕草紙かよは警察が八釜やかましゆう御座いますケ二なあ……。

もつとも友達の生胆を売ったチウたて、ビックリする程の事じや御座いません。生胆の廃物利用をやって見た迄の事だす。前のバクチの一件の続きですが……私が二十三か四かの年の十二月の

末じやつたと思ひますケニ、明治二十年前後の事だしつろうか。

前にも申しました通りバクチは親父の生きとる中うちは大おお幅びらで遣まれませんでしたが、死ぬると一気に通夜の晩から枕まくら経きの代りように松切坊主まつきりぼうずを初めましたので、三年経たぬ中うちに身代みしろがガラ崩れのビケになつてしもうた。それを苦にした母親が瘠せ細つて死ぬる。折角来てくれた女房までもが見損このうたと吐こいて着のみ着のまままで逃げてしもうた。その二十三か四の年の暮が仙崖さんの絵の通り『サルサルの年祝うた』になつてしもうた。

借金で首がまわらぬと申しますが、あの味わいバツカリは借金した者でないわと理わか解かりまつせん。博多の町中、行く先々、右も左しらみも虱しらみの卵生み付けたゴト不義理な借錢しらみばかり。真正面の青天井

に見当を付けて兵隊ちんだいさん式にオチニオチニと歩まぬと、虱の卵を生み附けられた顔がイクラでも眼に付きます。その虱の卵が一つ一つに孵化われて、利が利を生みよる事を考えると、トテモ博多の町に居られた沙汰では御座いませぬ。こげな事にかけますと私はドウモ気の小さい方と見えます。……へい。

私の女郎買とバクチの先達せんだつで大和屋惣兵衛、又の名を大惣だいそうという男が居りました。最前チョットお話しました棺の中でお経を聞いてビツクリした豪傑で、お寺の天井に居る羅漢様と生き写しの面相つらようで、商売の古道具屋に座つて、煙草を吸うております中に蜘蛛くもが間違えて巣を掛けよるのを知らずにおつたという大胆者おちつきもんで御座います。

平生ふだんから私の事をドウ考えているか判然わかりませんでした。イヨイヨ押詰しまった師走しわすの二十日頃ころにこの男の処ところへ身の上相談に行きますと、相変すらず煤すすけ返かえった面つらで古道具の中に座まつておりました。が、私の顔をジイツと見ながら、黙もくつて左の掌てを出せと申します。何を云うかわからん、気味きびの悪いところがこの男のネウチで、啣くわえ煙管ぎせるのまま私の掌てのひらを見ておりましたが、

『これはナカナカ運のいい手相じゃ。長崎へ行けばキット運が開けると手筋に書いてある』

と云います。私は呆おろれました。

『馬鹿吐こけ。長崎へ行く旅費がある位なら貴様の処へ相談に来はせぬ』

『まあ待て。そこが貴様の運のええところじゃ。運氣のお神様は貴様の来るのを待つて御座つた』

と云ううちにチヨツト出て行きますと、瞬く間に五十両の金を作つて来たのには驚きました。

『実は俺も生れてから四十五年、ここへ坐つ居つたが、イヨイヨこの家へ居ると四十六の年が取れん位、借金の下積したづみになつとる。

ちようど女房と子供が、実家の餅搗もちつきの加勢に行とるけに、この

店をば慾しがつとる奴の処へ行て委任状と引換えに五十両貰うて

来た。序ついでに俺のバクチの弟子で女房の弟おととに当るチツトばかり耳の

遠い常つんしゅう吉きちという奴も、長崎へ行きしたがつとるけに、今寄つて

誘うて来た。三人連れで長崎へ行て一旗揚げてみよう。異人相手



の古道具ふるものは儲かる理窟を知つとるけに、大船に乗った気で随したがいて来い』

と云います。日本一アブナイ運の神様ですが、迷うておりました私は大喜びで、そこへボンヤリ這入つて来た、今の話のツン州という若者わかくと三人で久し振りに前祝を一パイ遣つて、夜汽車に乗つて長崎へ来ました。

ところで途中、湯町にも武雄（いづれも女の居る温泉場）にも引つかからず長崎へ着いて、稲佐いなさという処の木賃宿へ着いた迄は上出来でしたが、その頃の五十両というと今の五百円ぐらいには掛合いましたもので、三人とも長崎見物の途中から丸山の遊廓に

引つかかつて、チョツトのつもりがツイ長くなり、毎日毎日チャ  
ンチャンチャンと花魁船おいらんぶねを流している中に五十両の金うちが、  
すいどうねずみ

溝 鼠

のように逃げ散らかつてしもうた。仕方なしにモトの

木賃宿に帰つて来ると泣なきつら面に蜂という文句通りに、大惣が大熱

を出いて、煎餅布団をハネ除のけハネ除のけ苦しがる。今で云う急性

肺炎じゃつたらうと人は云いますが、お医者に見せる銭ぜになぞ一文

も在りませんけに、濡ぬれてのこい手拭で冷やいてやるばかり。そのうち

に大惣がクタバビレて来たらしく、気味きびの悪いくらい静かになつて

来た。半分開いた眼ビイドロが硝子のゴト光つて、頬ベタが古新聞のゴ

ト折れ曲つて、唇くるりの周囲が青黒う変なつて、水を遣つても口を塞ぎ

ます。洗濯板のようになった肋あばらぼね骨こつくりだを露出こつくりだいてヒヨツクリ

ヒョックリと呼吸いきをするアンバイが、どうやら尋常事ただごとじやないよ  
うに思われて来ました。

そのうちに夜が更けて二時か三時頃になります。背後うしろの山手やまのて  
でお寺の鐘が、陰に籠ってゴオオ——ンンと来ますと、私は、も  
うイカンと思いました。スヤスヤ寝入つとる大惣を揺り起いて耳  
に口を寄せました。

『……大惣……大惣……』

大惣が返事の代りに私の顔をジイット見ます。

『貴様はモウ詰まらんぞ』

何度も何度も大惣が合点合点しました。涙を一パイ溜めており  
ます。

『……イロイロ……セワニ……ナツタ……』

『ウム。そげな事あドウデモよかバツテン、イツソ死ぬなら俺へ形見ば遣らんか』

大惣は寝たまま天井をジイツと見した。

『……シネバ……シネバ……何モイラン……何デモ遣ルガ……何モナイゾ……』

『ホンナ事に呉れるか』

『……ウム。オレモ……ダイ……大惣じゃ』

『よし、それなら云おう。貴様が死んだなら済まんが、貴様の生き胆もば呉れんか』

大惣が天井を見たままニンガリと物凄く笑いました。

『ウム。ヤル。ひやくひろ臟腑デモ……きんたま辜丸デモ……ナンデモ遣ル。シネ  
バ……イラン』

『よしつ。貰うたぞ。今……きも生胆の買手をば連れて来るケニ、貴  
様あ今にも死ぬゴトうんうん呻唸うめきよれや』

大惣が今一度、物凄くニンガリしながら合点合点しました。私  
は直ぐに木賃宿を飛出しました。

その頃は長崎に、支那人の生胆いきぎも買いがよく居りました。福岡  
アタリの火葬場にもよくウロウロしおりましたそうで……真夜中  
でも何でも六神丸の看板を見当てにしてタタキ起しますと、大抵  
手真似で話を通じましたもので、私は日本語のすこし出来る支チャン  
那人を引っぱって木賃宿へ帰って来ました。

その支那<sup>チャンチャン</sup>人は体温計<sup>ねつばかり</sup>と聴診器<sup>のみラツパ</sup>を持って来ておりました。

私とツン州と二人で感心して見ております前で、約束通りにウン<sup>うめ</sup>ウン呻<sup>うめ</sup>吟<sup>うめ</sup>きよる大惣の脈を取つて、念入りに診察しますと病人の枕元で談判を初めました。

『この病人は明日<sup>あした</sup>の正午頃<sup>ひる</sup>までしか保<sup>も</sup>たん。死骸<sup>しかい</sup>を蒲団<sup>ふたん</sup>に包んで私の家<sup>うち</sup>に担<sup>かか</sup>いで来なさい。高価<sup>たか</sup>く買<sup>か</sup>います。私の店<sup>うち</sup>はこの頃開いた店<sup>うち</sup>じやケニ高い。ほかの家<sup>うち</sup>は皆安<sup>やす</sup>い。死骸<sup>しかい</sup>の片付<sup>かたづけ</sup>けも皆<sup>みな</sup>して上げます。頭毛<sup>かみげ</sup>も首<sup>くび</sup>の骨<sup>ほね</sup>もチャント取<sup>と</sup>つて上げます。生胆<sup>きも</sup>のほかに胃腸<sup>いぶくろ</sup>につながつている小さい青い袋<sup>ふくろ</sup>を附<sup>つ</sup>けて下<sup>くだ</sup>されれば七円五十錢。それが温<sup>ぬく</sup>い中<sup>うち</sup>に持つて来なされば十二円五十錢……』

支<sup>チャン</sup>那<sup>チャン</sup>坊主<sup>チャン</sup>は掛値<sup>かぢ</sup>を云うものと思<sup>おも</sup>いましたケニ、思<sup>おも</sup>い切<sup>き</sup>つて

大きく吹っかけました。

『イカンイカン。二十五円二十五円。一文も負からん。ほかの処へ持つて行く。ほかに知つとる店がイクラでも在る』

『それなら十五円……』

『ペケペケ。絶対たぐさんペケある。二十五円二十五円。アンタは帰れ。

モウ話しせん』

私は支那人の足下を見てしまいました。魚市場の俸だすけに物は云わせません。支那人坊主は未練チャンチャンそうに立上りかけました。

『そんなら十七円五十銭……ぬくい中……』

『ウーム……』

と私は腕を組んで考えました。ここいらが支那人チャンチャンの本音かな

と申しておりますところへ、横から大惣が蒼白い手を伸べて私の着物の袖を引っぱりました。

『……ヤスイヤスイ……ウルナウルナ……』

『わたし。最早もう帰ります。十八円……いけませんか』

『ペケ……ペケ……オレノ……キモハ……フトイゾ……ペケペケ

……』

『ええ。要らん事云うな。大惣……黙うめつて呻吟うめきよれ』

『ウンウン。ウンウン。水ヲクレイ』

『ホラ。遣まつるぞ。末期まつごの水ぞ。唐人さんドウかいな。もう死によ

るが。早よう話をばきめんとほかの処へ持つて行くがナ』

とうとう支那人が負けて二十円で手を打ちまして、ほかの処へ



持つて行かぬように、五円の手附を置いて帰りました。

『ヤレヤレ。クタビレタ』

『ウンウン……ウンウン……スマンスマン……』

『モウ呻吟<sup>うめ</sup>かんでもヨカ。御苦勞御苦勞。こちらの方がヨツポド済まん。ところで済まん<sup>ついで</sup>序にチヨツト待つとれ。骨休めするケニ』

私はその五円札を一枚持つて飛出して、近所の酒屋から土瓶に二杯、酒を買うて、木賃宿から味噌を一皿貰うて来ました。何しろ暫く飢渴<sup>かわ</sup>いておつたところですから、骨休めというので、ツン公と二人で爛もせぬ酒をグブリグブリやっております、とその横で大惣<sup>せ</sup>がウンウン唸り出しました。又、私の袖を引きますので五月蠅<sup>から</sup>しい奴と思うて振向きますと、大惣の奴、熱で黒くなつた舌

を甜なめずりまわしております。

『……オレ……モ……一パイ……ノム……』

『途方もない事をば云うな。馬鹿……その大病で酒を飲むチウ奴があるか。即死しまえてしまうぞ』

大惣の落ち凹くぼんだ眼の色が変りました。涙をズウウと流しながら歯ぎしりをして半分起き上ろうとします。

『ソノ……サケハ……オレノ……キモノ……テツケジャ……。オレモ……ノム……ケンリ……ケンリガ……アル……』

私は胸が一パイになりました。

『アハハハハ。これは謝罪あやまった。俺が悪かった悪かった。よしよし。わかったわかった。寝とれ寝とれ。サア飲め。ウント飲め。』

末期の水の代りに腹一パイ飲め……』

そんな状態わけで、病人と介抱人が日本一の神様みたようになってグーグー眠ってしまいました。が、その中に大惣の声で……、

『オイオイ。湊屋。起きんか。モウ正午過ぎぞ』

と云うて私を揺り起します。ので、ビックリして跳ね起きますと……ナント……大惣が起きて、私どもの枕元に座っております。

ごしん神霊の上がつたようなポカンとした顔つらをしております。

『ウワア。貴様……起きとるとや』

『ウン。気持きよくのええけに起きてみた』

『何や。……全快なおつたとや』

『ウン。今、小便いに行て来たが、ちいっとばっかしフラフラする

ダケじゃ。全快ようなつたらしい』

『ウワア……それは大變事おおごとの出来でけとる。いま全快ようなつちやイカン』

『イカンち云うたてチャ俺が困る』

『コツちも困るじゃないか。貴様の生胆きもの手附の金をばモウ崩くづいてしもうとる』

『何でもええ。貴様に任せる。生胆きもの要るなら遣る』

『馬鹿……今、貴様の生胆きもを取れあ、俺が懲役けいやくに行くだけじゃないか……おいツン州……大變事おおごとの出来たぞ』

『……芽出度めでたい……』

『殴くちわせるぞ畜生。芽出度過くわぎて運の尽きとるじゃないか』

『ドウすれあ良ええかいな』

『仕様はない。逃げよう。支那人チャンチャンが来て五円戻せチュータてちや、あの五円札は酒屋から取戻されん。そんならちいうて大惣の病気をば今一度、非道ひどうなす訳には尚更行かん……よしよし……俺が一つ談判して来てやろう』

それから木賃宿のオヤジに談判しますと、宿賃は要らん。大病人に死なれちやタマラン。早よう出てくれいと云います。

コツチは得たり賢しです。直ぐにヒヨロヒヨロの大惣をツン州の背中へ帯で十文字に結び付けて、外へ出ましたが、別段、どこへ行くという当ても御座いません。その中うちにフト稲佐の山奥へ、私の知っている禅宗坊主が居る事を思い出しまして、昨夜ゆんべの鐘の音は、もしやソイツの寺じゃないか知らんと気が付きました。何

ともハヤ心細い、タヨリにならぬ空頼みをアテにして、足に任せ  
て行くうちに、何しろ十二月も三十日か三十一日という押詰まっ  
ての事で、ピューピュー風に吹かれた大病人上りの大惣が寒がり  
ます。哀れなお話で、今にも凍え死にそうな色になって『寒い寒  
い』と云いますので、タツタ一枚着ておりました私の襜褕どてらを上か  
ら引つ被せて、紅禪あかべこ一貫で先に立つて、霜柱だらけの山蔭をお  
寺の方へ行きますと、暫く行く中うちに、大惣は元来の大男で、ツン  
州の力が足らぬと見えて、十文字に縛った帯ももじょうが太股ももじょうに喰い込ん  
で痛いとお惣が云い出しました。

私はトウトウ腹が立ってしまいました。裸体はだかのままガタガタ震  
えながら大惣を嘔鳴がみ付けました。

『太平樂吐こくな。ええ。このケダモノが……何かあ。貴様が死しさ  
えすれあ二十円取れる。市役所へ五十銭附けて届けられあ葬式は片  
付く。アトは丸山いに行て貴様の狂除なじみをば喜とばしようと思居とる処  
に、要らん事に全快ようなつたりして俺達をば非道ひどい眼とに合とわせる。  
捕らぬ狸の皮算用。夜中三天のコツケコーコーたあ貴様ぬしが事タイ。  
それでも友達甲斐ももに連れて来てやれあ、ヤレ寒もいと、太股ももの  
痛いとか、太平樂ももばかり祈り上げ奉る。この石垣の下に捨てて  
行くぞ……エエこの胆泥棒きもぬすと……』

『ウ——ム。棄てるなら……助けると思うて……酒屋の前へ棄て  
てくれい。昨夜ゆうべの釣銭つるをば四円二十銭置いて行いてくれい』  
『ウハツ……知つとつたか。外道げどうサレ』

そんな事で向うの禅宗寺へ逃込みますと、有難いことにその和尚という奴が、博多のしょうふくじ聖福寺から出た奴で、私たちの友達ですケニなかなか人物がでて出来ております。

『ワハハハ。それは芽出度めでたい。人間そこまで行てみん事には、世の中はわからん。よろしい引受けた。その支那人なら私も知ってる。ウチの寺へ石塔を建てて、その細工賃を一年ばかり石屋へ引つけて、拙僧わしに迷惑をかけたる奴じゃ。ええ気味きびじゃええ気味じゃ。文句附けに来たら私が出てネジて上げる。心配せず一杯飲まない。オイ。了念了念。昨夜ゆんべの般若湯はんじゃとうの残りがあるう。ソレソレ。それとあのギスケ煮にぼし（博多名産、小魚の煮干）の罐を、ここへ持って来なさい』



というたような事でホツと一息しました。その寺で大惣に養生をさせまして、それから三人で平戸の塩鯨の取引を初めましたのが運の開け初めで、長崎を根拠ねじろにして博多や下関へドンドン荷を廻わすようになりましたが、その資本もとでというたなら、大惣の生いきぎ胆も一つで御座いました。人間、酒と女さえ止めれば、誰でも成功するものと見えますナア。ハハハハ……」

湊屋仁三郎の逸話は、この程度のものならまだまだ無限に在る。仁三郎の一生涯を通ずる日常茶飯が皆、是々このて的で、一言一行、一挙手一投足、悉く人間味に徹底し、世間味を突抜けている。哲学に迷い、イデオロギイに中毒して、神経衰弱を生命いのちの綱にしてい

る現代の青年が、百年考えても実践出来ない人生の千山万岳をサ  
 ツサと踏破り、飄々乎ひょうたうひょうことして徹底して行くのだから手が附けられ  
 ない。もしそれ百尺竿頭かんとう、百歩を進めた超凡越聖ちようぼんおつしよう、絶ぜつ  
 学無造作くむぞうさり裡に、上は神仏の頤あごを蹴放けはなし、下は聖賢の鼻毛しもを数え  
 るに到つては天魔、鬼神も跣足はだしで逃げ出し、軒の鬼瓦も腹を抱え  
 て転がり落ちるであろう。……こうした湊屋仁三郎一流の痛快な  
 消息のドン底を把握し、神経衰弱の無限の乱麻を一刀両断しよう  
 と思うならば請う、刮目かつもくして次回を読め！

(中)

諸君は博多二輪加にわかの名を御存じであろう。御覧にならない方々のためにチョツと知ったか振りを御披露申上げておくが、博多二輪加の本領というものは、東京の茶番狂言や、大阪二輪加なぞと根本的に仕組みの違つたもので、一切の舞台装置や、台本なぞいふ面倒なものの御厄介にならない。普通在来の着のみ着のままに、めかつら半面をかけて舞台に上るなり、行きなり放題の出会い頭にアツと云わせたり、ドツと笑わせたりするのがこのニワカ芸術の本来の面目である（註曰——現在では台本や装置、扮装こに凝つて、単に普通の喜劇を、博多言葉に演ずる程度にまで墮落してしまつてゐる）。だから本来の博多仁輪加では、その出演者同志がお互いに、人生、人情、世態に通曉徹底していなければいけない。お互

いに舞台上の演出効果——蔭の花を持たせ合つて、透すかさず舞台気分を高潮させ合い、共同一致のフラインプレイを演出し合うだけの虚心坦懐さがなければ仁輪加の花は咲かない。この生活苦と、仁義、公儀の八釜やかましい憂世うきよを三分五厘に洒落しやれ飛ばし、上かみは国政の不满しもから、下しもは閨けいちゆう中の悶々もんもんじ事に到るまで、他愛もなく笑い散らして死中に活あり、活中死あり、枯木に花を咲かせ、死馬に放屁ていせしむる底ていの活策略の縦横無礙むげなものがなくては、博多仁輪加の軽妙さが生きて来ないのである。

湊屋の大将こと、篠崎仁三郎は、その日常ごとごとの生活が悉くノベツ幕まくなしの二輪加の連鎖であつた。浮世三分五厘、本来無一物の洒落しやしやくらくらく々々を到る処に脱胎だつたい、現前しつつ、文字通りに行き

なりバツタリの一生を終った絶学、無方の快道人であつた。古今東西の如何なる聖賢、英傑いえどと雖も、一個のミナト屋のオヤジに出会つたら最後、鼻毛を読まれるか、顎あごほね骨を蹴放けはなされるかしない者は居ないであろう。試みに挙こす。看よ。

前回の通り、親友の生胆いきぎもを資本もとでにして、長崎の鯨取引に成功した湊屋仁三郎は、生れ故郷の博多に錦を？ 飾り、漁問屋をやっている中うちに、日露戦争にぶつつかり、奇貨おくべしというので大倉喜八郎の牛缶みならに倣ならつて、軍需品としての魚の缶詰製造を思い立ったが、慣れない商売の悲しさ、缶の製造業者に資本を喰われて、忽ち大失敗の大失脚。スツテンテンの無一物となつた三十八年の十一月の末、裾縫すそぬいの切れた浴衣一枚で朝鮮に逃げ渡り釜ふ

山<sup>さん</sup>漁業組合本部に親友林<sup>こまお</sup>駒生氏を訪れた。林駒生氏は本伝第二回に紹介した杉山茂丸氏の末弟で、令兄とは雲泥、<sup>しょうじょう</sup>霄壤も<sup>ただ</sup>啻ならざる正直一本槍の愚直漢として、歴代総督のお気に入り、御引立を蒙っていた統監府の前技師であつた。左<sup>さ</sup>はその直話である。「ヨオ。仁三郎か。よく来た……と云いたいが何というザマだ。この寒いのに浴衣一枚とは……」

「ウム。俺<sup>おら</sup>あ途方もない幽霊に附纏われた御蔭で、この通りスツテンテンに落ぶれて来た。何とかしてくれい」

「フウン。幽霊……貴様の事ならイズレ女の幽霊か、金<sup>かね</sup>の幽霊じやろ」

「違う。金や女の幽霊なら、お茶の子サイサイ<sup>な</sup>狂れ切つとるが、

今度の奴は特別あつら逃えの日本の水雷艇みたような奴じや。流石さすがのバルチック艦隊も振放しかねて浦塩うらじおのドックに這入り損のうとる。その執拗しつこい事というものは……」

「フウン。そんなに執拗い幽霊か」

「執拗いにも何も話にならん。トテモ安閑として内地には居おられん」

「一体何の幽霊かいね」

「缶詰の幽霊たい。ほかの幽霊と違ちがうて缶詰の幽霊じゃけに、いつまでも腐らん。その執拗い事というものは……呆ばかれた……」

愚直な林氏は茲ここに於て怫然ふっぜん色いろを作なした。

「一体貴様は俺をヒヤカシに来たのか。それとも助けてもらいに

来たのか」

「真正正銘、真剣に助けてもらいに来たのじゃないか。これ見い。この寒空に浴衣のお尻がバルチック艦隊……宰丸のロゼスト・ウイスキー閣下が、白旗の蔭で一縮みになつとる。どうかして浦うらじ塩更紗おさらさのドツクに入れてもらおうと思うて……」

「馬鹿……大概にしろ。この忙しい事務所に来て、仁輪加を初める奴があるか……」

しかし篠崎仁三郎はどこへ行つてもこの調子であつた。魚市場の若い連中が何かの原因でストライキを起して、幹部連中が持てあましている場面でも湊屋仁三郎が出て行くと一ペンに大笑いに



なつて片付いた。

「貴様は〇〇のような奴じや。撫でれば撫でる程、イキリ立つて来る。見つともない」

結局、彼にとつては人間万事が仁輪加の材料でしかなかった。事窮すれば窮するほど上等の仁輪加が出来るだけの事であつた。彼は洒々落々の博多児はかたっこの生粹きつすい、仁輪加精神の権化であつた。

太閤様を笑わせ、千利休を泣かせるのは曾呂利新左衛門そろりに任す。白刃上に独楽こまを舞わせ、扇の要かなめに噴水を立てるのは天てん一天勝いちてんかつに委す。木仏、金仏を抱腹させ、石地藏を絶倒させるに到つては正に湊屋仁三郎の日常茶飯事おてのものであつた。更に挙こす。看よ。

やはり湊屋仁三郎が一文無し時代の事。連日の時化しけで商売は出来ず、仕様ことなしに、いつも仲好しの相棒と二人で、博多大浜の居酒屋へ飛込んだ。無けなしの銭ぜにをハタキ集めてやつと五合枥ます一パイの酒を引いたが、サテ、酒肴さかなを買う銭が無い。向うの暗い棚の上には、章魚たこの丸煮や、蒲鉾の皿が行列している。鼻の先の天井裏からは荒縄で縛った生鰯ぶりの半身かたみが、森閑とブラ下っているが、無い袖は振られぬ理窟で、五合枥の中に置いて涙ぐましく顔を見交しているところへ天なる哉、小雨の降る居酒屋の表口に合か羽包つぽみの荷おろを卸した一人の棕枥しゆるほ箒ほうき売うりが在る。

元来この棕枥箒売という人種は、日本中、どこへ行っても他国たぐの者が多い。従ってどこことなく言葉癖が違っている上に、根性の

ヒネクレた人間が珍らしくない。仁輪加なんか無論わかりそうにないノツソリした奴が多いのであるが、その中でも代表的と見える色の黒い、逞ましそうな奴が、骰子の目に切った生鰯の脂あぶらに肉くの生姜しょうが醬油に漬けた奴を、山盛にした小井を大切そうに片手に持つて、

「ええ。御免なはれ」

と這入つて来た。唾然として見惚みとれている仁三郎とその相棒を尻目くだんにかけ、件の小井を仁三郎の背後のバンコに置き、颯さつ爽そうとして奥へ這入り、店の親爺おやしを捉まえて商売物の棕櫚しょうじ箒で棕櫚ハタキを押付けて酒代にすべく談判を始めた。ところがその居酒屋の親爺なる人物が又、人気の荒い大浜界限でも名打ての因業いんごうおや

じでナカナカそんな甘手あまての元手喰さやく式慣用手段いんちきに乗るおやじでない。ヤツサ、モツサと話が片付かぬ中うちに二人は、代る代る手を出して背後うしろの小井の中味を掴つまんだ。

「ハハン。この家のおっさんのガツチリして御座るのには呆れた。両方儲かる話が、わからんチウタラ打出の小槌ぜぜでたたいても銭ぜぜの出んアタマや……ハハン。買うて下はらぬ位なら他の店へ行くわい」

とか何とか棄科すてぜりふ白で、大手を振って棕櫚箒売が引返して来た時には、小井の中にはモウ濁った醤油と、生姜の粉が、底の方に淀んでいるだけであつた。

箒売は土間の真中に突立つたまま唾然となつて、上機嫌の二人

を眺めておった……が、やがてガラリと血相を変えると、知らん顔をして指を舐めて<sup>な</sup>いる仁三郎に喰つて<sup>かか</sup>蒐つた。

「……アンタ等は……ダ……誰に断つて、この肴<sup>さかな</sup>をば、<sup>つま</sup>抓みなさつたカイナ」

湊屋がゲラゲラ笑い出した。

「アハハ、途方もない美味<sup>うま</sup>か鰯<sup>うま</sup>じやつたなあ。ホーキに御馳走様じやつた。まず一杯差そうと云いたいところじやが、<sup>ます</sup>赤柵の中はこの通り、<sup>さかさま</sup>逆様にしても一しずくも落ちて来んスツカラカン……アハハハハ。スマンスマン……」

真青になつて腕を捲くつた箸売が、怒髪天を衝<sup>つ</sup>いた。

「済<sup>きりみ</sup>まんて済むか。切肉<sup>きりみ</sup>を戻せツ」

仁三郎は柔道の免許取りであっただけにチツトも驚かなかつた。

「イヤ、悪かつた。猫に干鯛ほしかでツイ卑しい根性出したのが悪かつた」

「この外道等……訳のわからん文句を云うな。ヌスツト……」

「イヤ。悪かつた悪かつた。冗談云うて悪かつた。博多の人間もんなら仁輪加で笑うて片付くが、他国たびの人なら腹の立つのも無理はない。悪かつた悪かつた。ウチまで来なさい。返済まじうてやるけに。ナア。この通り謝罪ことわり云うけに……」

元来が温厚な仁三郎は、見ず知らずの箒売の前に鉢巻を取つて平あやまりに謝罪あやまつた。

「貴様うちの家まで行く用はない。金が欲しさに云いよるのじやない

ぞ。今喰うた切肉きりみを元の通りにして返せて云いよるとぞ」

押が強くて執念深いのが筭売の特色である。その中でも特別詔あつらえの奴と見えて、相手は二人と見ても怯ひるまなかつた。因縁を付けてイタブリにかかる気配であつた。

「他国たびもんの人間と思つて軽蔑するか。一人と思つて侮るか。サア鱈をば返せ。返されんち云うなら二人とも警察まで来い。サア来い」  
「まあ待ちなさい。チャンと話は附ける。ブリな事をば云いなさいな」

「又仁輪加を云う。何がブリかい。その仁輪加を警察へ来て云うて見い。サア来い」

湊屋の相棒は市場名物の短気者であつた。

「ええ。面倒な。鰯さえ返せば文句はないか」

と云ううちに、店の天井からブラ下つていた鰯の半身かたみを引卸して、片手ナグリに箒売を土間へタタキ倒した。

「持つて失せうれ外道サレエ。市場おおはまの人間を見損うのうたか」

箒屋は劍幕に吞まれたらしい。鰯の半身かたみも、持つて来た井もそのままに起たちあが上あがつて、棕櫚箒の荷を担いで逃げて行く奴を、追いつた相棒が引ずり倒してポカポカと殴り付けた。商売物の箒が泥ダラケになつてしまった。

その間に湊屋は黙つて鰯の半身かたみを拾つてモトの天井の釘へブラ下げるのを、居酒屋の因業おやじが奥から見ていたらしい。イキナリ飛出して来て仁三郎の前に立ちはだかつた。



「その鰯は商売物ばい。黙って手をかけたからには、そのままには受取れん」

仁三郎は返事をしないままその鰯の半身をクフンクフンと嗅いでみた。

「親爺さん、悪い事は云わん。この鰯は腐つとるばい。こげな品物ば下げておくと、喰うたお客の頭の毛が抜けるばい」

「要らん世話したい。腐っておろうがおるまいがこつちの品物じやろうが、銭を払え銭を……」

「ナニ。貴様もこの鰯が喰いたいか」

帰って来た相棒が割込んで来たのを仁三郎が慌てて押し止めた。

「まあまあそう因業な事をば云いなさんな。折角の喧嘩が又ブリ

返すたい」

「その禿頭はげあたまをタタキ割るぞ畜生」

「止めとけ止めとけ。タタキ割つても何にもならん。腐ったブリが忘れガタミじや詰らん」

この洒落がわかつたらしい。親爺が、眼をグルグルさしたまま黙つて引込んだ。

二人は連立つて店を出た。

「ああ、久しブリで美味うまかった」

「俺もチイツと飲み足らんと思つておつたれあ、今の喧嘩でポオツとして来た。二合分ぶりぐらいあつたぞ、箸売のアタマが……オツト今の丼をば忘れて来た」

「馬鹿な。置いとけ置いとけ。シヨウガなからう」  
飄逸、洒脱、織塵せんじんを止めず、風去つて山河秋色深し。更に挙こす。看よ。

仁三郎の友人に水野某という青物問屋の主人があつた。その又二人の友人で又木某という他県人の青物仲買人があつた。その又木某は身寄タヨリのない全くの独身者ひとりもので、兼てから湊屋仁三郎と水野某を保証人として何千円かの生命保険に加入していた。又木曰いわく、

「俺は篠崎にも水野にも一ひと方かたならぬ世話になつた。俺の家うちは代々胃癌で死ぬけに、俺も死ぬかも知れぬ。それで万一俺が死んだ

なら一つ頼むけに俺の葬式をしてくれい。ナア」

涙もろい二人は喜んで証書に印判を捺おしたものであつた。もとより無学文盲の二人の事とて、法律の事なんか全く知らず、盲めくら判ばんも同然で金額なども全然忘れたまま仲よく交際していた。

ところがどうした天道様の配り合わせか、間もなくその又木が四十五歳を一期として胃癌で死んだ。お蔭で思いがけない巨額の金ふところが、二人の懐ふところに転がり込んだので二人は少なからず面喰つた。

「何でも構わぬ。約束は約束じゃ。出来るだけ賑やかに葬式をしてやれ」

というので立派な石塔を建てた上に永代回向料えいこうまで納めてしまつたが、それでも余つた相当の金額を持ってソクナところは無暗むやみ

に義理固い篠崎、水野の両保証人が、又木の本籍地へ乗込んだ。色々身よりを探しまわって又木の後を立てるべく苦心したが、その又木のアトがどうしてもわからない。そこで……これでは詰まらん博多へ帰ろう。又木の菩提追福のためにこの金を潔く女共へ呉れてしまおう……というので仕事の休み序ついでに柳町に押上り、あらん限りの太平樂を並べて瞬く間に残金を成仏させて帰った。そうして帰ると直ぐに二人で一パイ飲んだ。

「ああ清々した。しかし水野、保険というものはええものじゃねえ」

「ウン。こげな有難い物もんたあ知らんじやった。感心した。又誰か保険はいに加入はいらんかな」

「おお。そういえばあの角屋の青柳喜平はまあだ三十四五にしかならんのに豚の様ごとブクブク肥えとる。百四五十斤位きんあるけに息が苦しいとこの間自分で云いよつた。あの男なら四十位になると中ち風ゆうきでコロツと死ぬかも知れんぜ」

「うむ。アイツの親爺おやしも中気で死んだる。彼奴あいつは保険向きに生れとる事をば、自分でも知らずにいるに違いない」

「貴様は何でも勧め上手じゃケニ一つ行いて教きえて来きやい」

「ウン。よかろう。行いて来こう。今から行いて来こう。善きは急きげ……」

「今度は又木の三倍ぐらい掛かけて来きやい」

「ウン。飲のみながら待まちつとれ。帰かえりに今少まじつと、肴さかなば提たげて来きるけに……」

青柳喜平というのは当時から福岡の青物問屋でも一番の老舗しにせで  
そうすいしつりゆう双水執流という昔風の柔道の家元で、武徳会の範士という、  
 仁三郎には不似合いな八釜やかましい肩書附の親友であった。現、角屋  
 の三右衛門氏の養父、現画伯、あおやなぎきべい青柳喜兵衛氏の実父。若くして  
 禅学に達し、しようふくじ聖福寺の東瀛とうえい禅師、建仁寺の黙もく雷らい和尚おしょうに参  
 し、お土産に宝満山の石羅漢の包みを提ひっさげて行つて京都の俵屋くるまや  
 と、建仁寺内を驚かした。日露戦争の時の如き、福岡聯隊の依頼  
 に応じて、ロシア露西亞ふりよの俘虜の中でも一番強力な暴れ者を猫の前の鼠  
 の如くならしめたという怪力、怪術無双の変り者で、筆者ともか  
 なり心安かつたので自然この話を同氏の直話として洩れ聞いた訳  
 である。

喜平氏は親友湊屋仁三郎の使者つかいとして同業の水野が、白足袋などを穿はいて改まって来たので、何事か知らんと思つて座敷に上げた。ちようど時分がよかつたので午餐ごさんまで出して一本爛つけた。

水野は遠慮なく厄介になりながら熱心に説去とききり説来とききたつたが、聞き終つた青柳喜平氏は米搗杵こめつきぎねみたいな巨大な腕を胸の上に組んだ。

「ウムウム。成る程成る程。よう解かつた。如何にも貴様の云う通り人間は老少ふじよう不定。いつ死ぬるかわからん。俺の親父おやじも中気で死けんどる故、血統すじを引いた俺も中気でポツクリ死なんとは限らん。実はこの頃、肥り過ぎて子供相手に柔術やわらが取れんで困つる。技術わざに乗つてやれんでのう」



「ウン。それじゃけに今の中に保険に入れと……」

「まあ待て待て。それは良う解かつとる。這入らんとは云わん」

「有難い。流石は青柳……」

「チヨチヨチヨツと待て……周章うろたえるな。そこでタツタ一つ解ら

ん事がある」

「何が解らんかい。これ位わかり易い話はなからう」

「さあ。それが解からんテヤ。つまりその俺がポツクリ死んだなら、取れた保険の金は貴様達二人が貰われるように、証文をば書いておくと云いよるのじやろう」

「その通りその通り。貴様は話がようわかる」

「そんならその保険に掛ける金は、誰が掛けるとかいネエ。貴様

達が掛けるか……」

「馬鹿云え。知れた事。貴様の保険じやけに、貴様が掛けるにきまつとるじやないか」

「……馬鹿ツ……帰れツ……」

青柳に大喝された水野は、上り口から飛降りて、下駄を提げたまま二三町無我夢中で走った。その白足袋を宙に舞わして逃げて行つた恰好が、今思い出しても可笑おかしいと青柳喜平氏は筆者に語つた。

「怪けしからん親友もあればあるものです。私が肥なっているのを見て煮て喰あいとうなつて保険の鍋なべに這入れとすすめに來る奴です。彼奴等あいつらの無学文盲にも呆あれました」

吉報を待つてチビリチビリやっていた仁三郎は、門口からしやう悄然ぜんと何か提げて這入つて来た水野を見てビツクリした。

「どうしたとや。何をば提げて来たとや」

水野は黙つて下駄を出して見せた。頭を搔きながらタメ息を吐いた。

「詰まらん。青柳は知つとる」

篠崎もソレとわかつて長大息した。

「そうか。知つとつちや詰まらん」

最後の一句、甚だ無造作。本来無一物。尻けつくら喰くえ観音である。

こうなると人格も技養もない。日面仏。月面仏。達磨だるまさん。ちよ

とコチ向かしやんせである。更にこ挙す。看よ。

前述の朝鮮、漁業組合長、林駒生氏は朝鮮第一の漁業通であり且、水産狂である。苟も事水産に関する話となると、身分の高下、時の古今、洋の東西を問わない。尽くタツタ一人で説明役にまわつて滔々とうとう数時間、乃至ないし、数十日間に亘り、絶対に他人に口を入れさせないので、歴代の統監、農林、商工の各大臣、一人として煙けむに捲かれざるなく、最少限、朝鮮沿海に関する問題については、視察に来る内地の役人を尽く馳け悩まして、一毫も容喙ようかいの余地なからしめた。或る材木商の如きは、同氏に話込まれたために新義州の材木に手附を打ち損ね、数万円の損害を受けたという程の雄弁家である。

その林駒生氏が嘗てこれも座談の名士として聞えた長兄、杉山茂丸氏と福岡市吉塚みすみぎい三角在、中島徳松氏の別荘に会し、きゆうか久潤つじよを叙し、夕食の膳に就いた。同席のお歴々には故八代大将、前九大教授武谷医学博士、福岡随一の無鉄砲有志、古賀壮兵衛氏、現釜山日報主筆、篠崎昇之助氏、その他、水茶屋みずぢや券番けんばんの馬賊五人組芸者として天下に勇名を轟かしたお艶えん、お浜、お秋、お楽、等々その中心の正座が勿体なくも枢密院顧問、八代大将閣下であっただけに極めて厳肅な箸はしの上げ卸おろしで、話題は八代閣下の松葉の食料法を武谷博士、林駒生氏が固くなつて謹聴し、記者として列席していた筆者がシキリにノートを取っている……といった場面であつたように思う。

ところへ表の扉ドアがガラリと開いて、湊屋の仁三郎が這入って来た。春雨に濡れた問屋張といやばりの傘を畳んで、提げて来た中鯛を五六匹土間に投出したスタイルは、まことに板に附いたもので、浴衣の尻を七三に端折はしおつた素跣足すはだしである。親友の林駒生氏が振返つて声をかけた。

「おお。湊屋じゃないか。この寒いのに風邪を引くぞ」

湊屋はほおかむり冠を取つて手を振つた。

「イカンイカン。これは医学博士でも知らん。自動車に乗る人間には尚更わからん。日本人一流、長生きの法たい」

「今その長生き話が出るところじゃ。貴公の流儀を一つ説明してみい」

「説明もへツタクレもあれあせん。雨の降る日に傘さいて跣足で歩きまわれれば、それで結構……そこで『才寒む』とか何とか云うてこの中鯛で一杯飲んでみなさい。明日死んでも思い残す事はない」

「アハハハ。賛成賛成」

武谷博士が妙な顔をした。蓋、同博士は同大学切つての謹厳剛直の士で、何事に限らず科学的に説明の出来ないものは一毫も相容れない性分であつたので、八代大将の松葉喰いの話で少々お冠を曲げて御座るところへ、湊屋一流の無学文盲論が舞込んで来たのでまさか議論の相手にもならず、ますます御機嫌が傾いた次第であつた。しかし湊屋仁三郎は博士であろうが元帥げんすいであろうが

驚ろかなかつた。サツサと裏へ廻つて足を洗つて上つて来た。

「へエ。皆さん。今晚は……今台所の婆さんに洗わせよる、昨夜ゆんべまで玄海沖で泳ぎよつた魚じやけに、洗いに作らせといた」

「ちようど今長生きの話が出とるところじやつたが、ええところへ来た。貴公なんぞは長生きの大將と思うが……そんな氣持ちはせんか」

と杉山茂丸氏が水を向けた。

「ハハハ。人間はアンマリ長生きせん方が良ええと思ひますなあ。

人間一代山は見えとる。長生きしようなんて考えるだけで寿命が縮まるなあ。八代さん。美味うまい酒をば飲むだけ飲むで、若い女子こどもは抱くだけ抱いて、それでも生きとれあ仕様がな。又、明日あしたの



魚は糶<sup>せ</sup>るだけの話たい……なあ武谷先生……」

八代閣下と武谷博士がグウとも云えないまま苦々しい顔になった。社交家の杉山茂丸氏が透<sup>す</sup>かさず話題を転じた。鍋の中でグツグツ煮えている鯨のスキ焼の一片を挟み上げて令弟、林駒生技師に提示した。

「オイ。駒生。この肉は鯨の全体でドコの肉に当るのかね」

サア事だ。林水産狂技師の得意の話題に触れたのだ。油紙に火が附いた以上の雄弁の大光焰がどうしても燃上らずにおられよう。八代大将の松葉も、湊屋仁三郎の短命術も太陽の前の星の如くに光を失わずにはおられなかった。

「そもそも鯨というものは」……というので咳<sup>がい</sup>一咳。先ず明治二

十年代の郡司大尉の露領沿海州荒しから始まつて、肥後の五島列  
 島から慶南、忠清、かんきよう咸、きやう竟、つうめんきやん南北道、つうめんきやん函們江、沿海州、からふ樺  
と太、千島、オホーツク海、べーりんぐ白令海、アリユウシヤン群島に  
 到る暖流、寒流の温度百余個所をノート無しでスラスラと列举し、  
 そこに浮游するかつそう褐藻、りよくそう緑藻の分布、回游魚の習性を根拠と  
 する鯨群の遊ゆうよく弋方向に及び、日本の新旧漁法をスカンジナビヤ  
 半島の様式に比較し、各種の鯨の肉、骨、臓器、油の用途、価格、  
 販路、英領加奈陀カナダとの競争状態といったような各項に亘つて無慮、  
 数千万語、手を挙げ眉を展のばして熱弁する事、約二時間半、夕食  
 が終つて、電燈が灯ついてもまだ結論が附かない。やつと二度目の  
 お茶が出てから、

「今の鯨の肉は、鯨の尾の附根に当る処で、肉の層がアーチ型になつてゐる処です。鯨肉の中でも極上飛切とびきりの処で、小鳥や牛肉でも追付かない無上の珍味だったのです」

という結論が附いた。しかし残念な事にこの時には流石さすがに謹厳剛直の国家的代表者、八代大将閣下も、武谷広博士も完全に伸びてしまつてゐた。勿論、二人とも最初は林技師の蘊蓄うんちくの物凄いのに仰天して膝を乗出して傾聴してゐたものであつたが林技師大得意のスカンジナビヤ半島談あたりからポツポツ退屈し初めたらしく、二人ともアンマリ欠伸あくびを噛み殺して来たためにスツカリ涙ぐんでしまつてゐた。令兄の杉山茂丸氏の如きは、そのズツと以前から後悔の臍ほぞを噛んでいたらしい。警告の意味で、故意と声を

立てて大きな欠伸あくびを連発していたが、それでも白浪を蹴って進む林技師の雄弁丸が、どうしてもSOSの長短波に感じないので、とうとう精も気魄きはくも尽き果てたらしく、ゴリゴリと巨大なイビキを掻き始めた。それを笑うまいとしている芸者連が、必死にハンカチで口を押えている始末……。

しかし林技師の雄弁丸は物ともせず、グングンスチームを上げて行った。俄然がぜんとして英領加奈陀カナダの岳詰業カムサツカに火が移った。続いて露領沿海のタラバ蟹に延焼し、加察加カムサツカの鮭にしんと鮓さながら宛然りように燎あ原げんの火の如く、又は蘇ソヴェート国の空軍の如く、無辺際あの青空に天まかけ翔まかける形勢を示したが、その途端、何気なく差した湊屋の盃うちを受けて唇に当てたのが運の尽き、一瞬うちの中に全局面を、無学文盲の

親友に泄さわれてしまった。

「フウム。これは感心した。日本中で鯨の事を本格に知つとる者もんなら私一人かと思つておつたが、アンタもいくらか知つとるなあ」  
「失敬な事を云うな仁三郎。林駒生はこれでも総督府の技師だ。事、水産に関する限り、知らんという事は只の一つも無いのが職分だぞ。そのために中佐相当官の待遇を……」

「ふむ。わかつたわかつた。それなら聴くがアンタは鯨の新婚旅行をば、見なさつた事があるかいな」

「ナニ。鯨の新婚旅行……」

芸妓げいしや連中が一齐に爆笑した。八代、武谷両聖人が今更のように眼をパチクリして湊屋の顔を凝視しているところへ、いびき軒を搔き止

めた令兄杉山茂丸氏がムクムクと起上つて、赤い眼をコスリコスリ、

「ハハア。新婚旅行……誰が……」

と云つたので今一度、爆笑が起つた。

林水産技師は憮然として投出した。

「……そんなものは……見ん……元来鯨は……」

「それ見なさい。知るまいが。イヤ。それは大椿事おおごとですばい。鯨の新婚旅行チュータラ……」

と仁三郎が間髪を容れず引取つた。

「イヤ。トテモ大椿事おおごとですばい。アンタ方は知りなざるまいが、

鯨はアレで魚じゃない。獣類けだものですばい」

「ウム。それはソノ鯨は元来哺乳類……」

「まあ待ちなさい。それじゃけに鯨は人間と同じこと、三々九度でも新婚旅行でも何でもする。私や大事な研究と思うだけに、实地について見物して来た。しかも生命いのちがけで……」

「アラ。まあ。アンタ見て来なさったと……」

「お前たちに見せてやりたかつたなあ。その仲の良ええ事というものは……お前たちは人間に生れながら新婚旅行なんてした事ああるめえ」

「アラ。済まんなあ。新婚旅行なら毎晩の事じゃが」

「アハハ。措おきなはれ。阿呆あほらしい」

「阿呆らしいどころじゃない。権兵衛が種蒔きなら俺でも踊るが、

鯨のタネ蒔きバツカリは真似が出来ん。これも学問研究の一つと  
 思うて、生命いのちがけで傍にきへ寄つて見たが、その情愛の深いこととい  
 うもんなア……あの通りのノツペラボーの姿しとるばつてん、そ  
 の色気のある事チユタラなあ。ちよつとこげな風に（以下仁三郎  
 懐ふところ手てをして鯨の身振り）」

「アハハハハ……」「イヒヒヒヒ」

「オイ仁三郎……大概にせんかコラ……」

「海の上じゃけに構わん。牝も牝よだれも涎よだれを流いて……」

「アラッ。まあ。鯨が涎よだれをば流すかいな……」

「流すにも何にもハンボン・エツキスちうて鬱紺うこんいろ色のネバナネバ  
 した涎よだれをば多したたか量かに流す」



「……まあ。イヤラシイ。呆れた」

「ハンボン・エキス……ハハア。リウマチの薬と違いますか」  
と武谷博士が大真面目で質問した。

「違います……そのハンボン・エキスの嗅くい事というたなら鼻毛が立枯れする位で、それを工合良うビール瓶に詰めて、長崎の仏フ蘭西人に売りますと、一本一万円ぐらいに売れますなあ。つまり世界第一等の色気の深い香水の材料たねになります訳で、今の林君の話のスカン何とかチュウ処の鯨よりも日本の鯨の新婚旅行の涎の方が何層倍、濃厚みごいそうで……」

「オイオイ仁三郎……ヨタもいい加減にしろ」

林技師がタマリかねて口を出した。

「ヨタでも座頭唄でもない。仏蘭西の香水は世界一じやろうが」

「……そ……それはそうだが……」

「それ見なさい。それは秘密に鯨の涎をば使いよるげに世界一た  
い。自分の知らん事あ、何でも嘘ソラゴト言と思いなさんな」

「……フーム。何だか怪しいな」

「怪しいにも何も、私は、そのヨダレが欲しさに生命いのちがけでモー  
トル船に乗つて随ついて行きましたが、その中うちに又、世界中で私一  
人しか知らん奇妙な魚類さかなをば見付けました」

「フーン。そんな魚が居おるかな」

「居るか居らんか、私も呆れました。鯨の新婚旅行に跟つ随いて行く  
馬鹿者が私一人じゃないのです。ちようど大きな鮫さめのような恰好

で、鯨の若夫婦のアトになりサキになり、どうしても離れません。鯨の二匹が、私の船を恐れて水に潜くぐつても、その青白い鮫の姿を目当てに行けば金輪際、見のがしません」

「ウーム。妙な奴が居るものだな」

「アトから古い漁師に聞いてみましたら、それは珍らしいものを見なされた。それはやつぱり鮫の仲間で、鯨の新婚旅行には付き物のマクラ魚うおチウ奴さかなで……」

「馬鹿。モウ止めろ。何を云い出すやら……」

「イイエ。決して嘘は云いませぬ。生命いのちがけで見て来たのですから。これからがモノスゴイので……私はそのマクラ魚を見た時に感心しました。流石さすがに鯨はケダモノだけあって何でも人間と同

じこと……と思つて、なおも一心になつて跟ついて行くうちに夜になると鯨の新夫婦が浪なみの上で寝ます。青海原の星天井で山のような浪また浪の中ですけに宜ようがすなあ……四海浪しかいなみ、静かにてエー……という歌はこの事ばいと思ひましたなあ。しかし何をいうにもあの通りのノツペラボー同志ですけに浪の上では、思う通りに夫婦の語らいが出来できまつせん。そこで最さい初ぜんから尾ついて来たマクラ魚が、直ぐに氣を利かいて枕になつてやる……」

「アハハハハ。馬鹿馬鹿しい」

「アハアハアハアハ。ああ苦しい。モウその話やめてエツ」

「イヤ。笑いごとじやありません。鮫さかなという魚は俗に鮫肌と申しまして、鱗うろこがすべららんように出来ておりますけに、海の上の枕とし

ては誠にお逃あつらえ向きです。しかし何をいうにも何十尋ひろという巨大おおきな奴が、四方向止まりのない荒浪あらうみの上で、アタリ憚おそからず夫婦の語らいをするのですから、そこいら中は危なくて近寄れません。大抵の蒸気船や水雷艇ぐらいは跳ね散らかされてしまう。岸近くであつたら大海嘯おおつなみが起ります。その恐ろしさというものは、まったくの生命いのちがけで、月明りをタヨりに、神かみ 仏ほとけの御名おんなを唱えながら見ておりましたが……」

「……ああ……ああ……もうソノ話やめて……あたしや……あたしや死ぬるツ……」

「それから夫婦とも波の上で長うなつて夜を明かしますと又、勇ましく潮を吹いて、鰯の群おを逐おいかけ逐おいかけサムカツタの方へ

旅立つて行きます」

「サムカツタじゃない。カムサツカだろう」

「あつ。そうそう。何でも寒い処と思いました。ヒヨツトすると鯨の若夫婦が云うたのかも知れません。ネエちよいと……昨夜はカムサツカねえ……とか何とか……」

「馬鹿にするな」

「そこで感心するのは今のマクラ魚です。若夫婦の新婚の夜が明けますとコイツが忽ち大活躍を始めますので、若夫婦の身のまわりにザラザラした身体からだをコスリ付けて、スツカリ大掃除をしながら、アトからつ跟いて行きます、つまるところこのマクラ魚という奴は鯨の新婚旅行が専門に生れ付いた魚で、枕になってやったり

後の掃除をしてやったりしながら、カムサツカでもベンガラ海でもアネサン島の涯はてまでも、トコ厭いとやせぬという……新婚旅行のお供がシンカラ好きな魚らしいですなあ」

爆笑。又爆笑。狂笑。又死笑。皆、頭を抱え、畳の上を這いまわって笑い転げた。流石さすがの謹厳な八代大将も総義齒いればをハメ直しハメ直し鼻汁はなと涙を拭い敢えず、苦り切ってシキリに汗を拭いていた武谷博士も、とうとう落城してニヤリとしたのが運の尽き。しまいにはアンマリ笑い過ぎて眼鏡の玉の片方をなくする始末。その中うちにタツタ一人林技師が如何にも不満そうにグビリグビリと手酌でやっているのを見た人の悪い令兄が、

「オイ。駒生。何とか註釈を入れんか」

と嘲弄したが、林技師が額の生汗なまあせを拭いて坐り直した。

「ハイ。註釈の限りではありません」

と云つたので満座又絶倒……。

(下)

かくして篠崎仁三郎の名は、次第次第に博多ツ子の代表として、花川戸の助六や、一心太助の江戸ツ子に於けるソレよりも遙かにユーモラスな、禅味、俳味を帯びた意味で高まつて行つた。

どんな紛争事件もめごとでも仁三郎が呼ばれて行くと間違ひなく大笑いに終らせる。しかも女出入り。金銭出入かねでいり。縄張りの顔立てなぞに



到るまで、決して相手を高飛車にキメ附けるような狭客式の肌合いを見せない。そうかといつて下手したてに出て御機嫌を取ったり、ヨタを飛ばして煙に巻いたりするような小細工もしない。いつもザツクバランの対等の資格で割り込んで行って、睨み合い同志の情をつくさせ、義をつくさせて、相互の気分にくトリを作らせ、お互い同志が自分の馬鹿にウスウス気付いたところを見計みはからつてワツと笑わせて、万事OKの博多二輪加にして行く手腕に至つては、制電せいでんの機、無縫むほうの術、トテモ人間業わざとは思えなかつた。通夜の晩などに湊屋が来ると、棺の中の仏様までも腹を抱えるという位で、博多魚市場の押しも押されもせぬ大親分として、使つても使つても使い切れぬ金かねが、二三方も溜まっていようかという身

分になった。そうして篠崎仁三郎の一生はイトも朗らかに笑い送られて行つたのであつた。

しかも天の配剤というものは誠に、どこまで行き届くものかわからないようである。その篠崎仁三郎の一生が、あまりにも朗らかであり過ぎたために、その五十幾歳を一期として死んで行く間に當つて一抹の哀愁の場面がてんてつ点綴されることになつたのはコトワリセメて是非もない次第であつた。

しかもその悲哀たるや尋常一様の悲哀でなかつた。笑うには笑われず、泣くにはアマリに非凡過ぎる……といったような、実に篠崎仁三郎一流のユーモラスな最期を遂げたのであつた。それは

地上、如何なる凡人、又は非凡人の最期にも類例のない……同時に如何なる喜悲劇、諷刺劇の脚本の中にも発見出来ない、セキスピアもバナードシヨオも背後に撞どうちやく着どうたい、倒退三千里せしむるに足る底ていの痛快無比の喜悲劇の場面を、生地きじで行った珍最期であった。

：註曰：篠崎仁三郎氏の晩年には、他人ばかりの寄合世帯で一家を作っていたために、色々と複雑な事情が身辺にまつわり附いていたが、ここにはそのような事情の一切を省略し、それ等の中心問題となっていた事実のみを記載するつもりである……。

篠崎仁三郎氏が五十四の年の春であったか……腎臓病かかに罹かかつて動きが取れなくなった。そこで自然商売の方も店員任せにして自

宅で床に就いていたが、平常へいぜいでさえ肥っていたのに、素晴らしく腫れ上つてまるで、洪水おおみずで流れて来たみたような色と形になつてしまった。瞼まぶたなんか腫れ塞がってしまったて、どこに眼があるのかわからない位で、そのままグングン重態に陥つて行つた。

枕頭に集まる者は湊屋の生前の親友であつた魚市場と青物市場の連中ばかりで、一人残らず無学文盲の親おやぶん方連中であつたが、それでも真情だけは並外れている博多ツ子の生きつすい粹すいが顔を揃えていた。最早もはや湯も水も咽喉のどに通らなくなつて、この塩梅あんばいではアト十日と持つまい……という医師の宣告を聞くと、一同の代表みたような親友中の親友、青柳喜平氏が二十四貫かんの巨軀を押し出し、篠崎仁三郎氏の耳に口を附けた。

「……オイ仁三郎……貴様はホンナ事に女房と思う女も、吾が後嗣と思う子供も無いとや……」

篠崎仁三郎は生前、妻子の事なんか一度も口にした事がなかった。しかし長崎に居た頃一人の情婦みたような女があつてソレに女の児を一人生ませているという噂を、皆、聞いていたので、それを慥たしかめるために青柳喜平氏がこう聞いたのであつた。

湊屋仁三郎は仰臥したまま黙つてうなずいた。やつと眼をすこしばかり開いて、布団の裾すその方の筆筒たんすの上の小筆筒を腫れぼったい指で指すので、その中を探してみると手紙が一パイ詰まっている。それが皆、長崎から来た女文字の手紙ばかりで、金釘流の年増らしいのは母親の筆跡であろう。若い女学生らしいペン字は娘

の文章らしかった。焼野やけのの雉子夜きぎすの鶴……為替の受取なぞがチラチラ混っている。そこで一同の中から二人の代表が選まれて、その手紙の主を長崎へ迎いに行く事になった。

その手紙の主は仁三郎が長崎に居る時分に関係していた浮気稼業の女であつたが、なかなか手堅い女で、仁三郎と別れた後のちに、天主教の信仰に熱中し、仕送つて来た金かねで一人の娘を女学校に通わせて卒業させていたものであつた。

湊屋仁三郎の余命がモウ幾いくばく何もない。だからタツタ一人の血のキレとして残っている娘にアトを継がせたいために迎えに来たと二人の代表が説明すると、彼女は娘と手を執り合つて泣き出したので、二人の代表が覚悟の前ながら相当貰い泣きさせられた。

しかしここに困ることには天主教の教理として、母親と父親が神様の御前で正式の結婚式を挙げていない限り、娘と親子の名乗りをさせる訳に行かない事になっている。しかもそのような事態ではトテモ結婚式を挙げる訳に行くまいが……耶蘇教の<sup>やさそ</sup>荳萱道<sup>かるかやどうし</sup>心<sup>ん</sup>み<sup>ん</sup>た<sup>ん</sup>ような事になりはしないか、という母親の懸念であったが、そこは大掴みな豪傑代表が二人も揃っていたので、大請合いに請合って、首尾よく<sup>おやこ</sup>母子二人を連れて博多に戻って来た。直ぐに福岡市大名町に在る赤煉瓦の天主教会へ代表二人で乗込んでこの今様荳萱道心問題を解消さすべく談判を試みる事になったが、そこへ出て来た宣教師のジョリーさんという<sup>フランス</sup>仏蘭西人が、日本人以上に日本語がよくわかる上に、日本人以上に<sup>すい</sup>粋を利かせる人だ

つたので助かった代表二人の喜びと安心は非常なものがあつたという。

その時の談判の結果、いよいよ結婚式の当日になると、湊屋の病床を中心にして上座に、新婦と娘、天主教会員、花輪なぞ……下座には着慣れぬ紋付袴の市場連中がメジロ押しに並んだ。が、流石さすがに盛装した新婦と娘は、変り果てた夫であり父である仁三郎の姿を見てシクシクと泣いてばかりいた。

そこへ宣教師の正装をしたジョリーさんを先に立てた和洋人の黒服が四五人ばかり、銀色の十字架を胸おに佩おびてゾロゾロと乗込んで来たので、居住居いずまいを崩していた羽織袴連中は、今更のように



眼そばだを聳そてて坐り直した。

式は型の如く運んだ。ジヨリーさんが羅馬綴ローマで書いた式文みた  
ようなものを読み上げる時には皆起立させられたが、モウ足しびが痺  
れて立てない者も居た。

「ウワアルエールアヌオの……兄弟キヨダイガが……神様クワミイサアマヌオの……思召オボスイメスイ  
に……よりまして……」

というのを、一同は英語かと思つて聞いていたという。以下引  
続いて儀式の模様を、済んだあとからの彼等の帰り途の批評に聞  
いてみる。

「耶蘇教の婚礼なんてナンチいう、フウタラ、ヌルイふうたろぬる（風多羅緩  
い？ 自烈度じれつたいの意）モンや」

「そうじゃない。あれあ大病人の祝言じゃけに、病気に障らん様、ソロオツと遣つてくれたとたい。毛唐人なあ氣の利いとるケニ」

「一番、最初に読んだ分は何じやつたろうかいね」

「あれあ神主がいう高天たかまが原またい。高天が原に神づまり在ましますかむろぎ、かむろぎの尊みこと——オ……」

「うむ。そういえば声が似とる。成る程わからん事をばいうと思うた」

「ところでそのあとからアイツ共が歌うた歌は何かいね。オオチニ風琴鳴らいて……」

「花嫁御のお化粧の広告じゃなかつたかねえ。雪よりも白くせよなあ……てクタビレたような歌じやつたが……」

「ウム。俺あ西洋洗濯の宣伝かと思うた」

「立てて云うけに俺あおら立つて聞きおつたら、気の遠うなつてグラグラして来た。今ま一時間も立つとつたなら俺あおら仁三郎より先に天国へ登つとる」

「うむ。長かつたのう。あの歌をば聞きおる中うちに俺あ、悲あしゆう、情のうなつた。この間死んだかか嬢が、真夜中になると眠つた儘なりにアゲナ調子で長い長い屁をば放こきよつたが」

「死んだ嬢よりも俺あおら、あれを聴きよるうちに仁三郎がクタビレて死にあしめえかと思うてヒヤヒヤした。歌が済んでからミンナ坐つた時にやホツとした」

「あのあとの御祈祷は面白かつたね」

「ウム。面白いといえは面白い。馬鹿らしいといえは馬鹿らしい。  
 (以下声色) ああら、我等の兄弟よ！ 神様の思召おぼしめしに依り  
 まして、チンブンカンブン様の顎タンを結ばれました事は——越え  
 つちゆうべこ  
 中禪ちゆうぜんのアテが外れた時と全く全く同じように、ありがたい、  
 尊い、勿体もったいない、嬉しい嬉しい御恵みで——ありや——す……  
 アーメン。と来たね」

「ようよう、うまいうまい貴様、魚屋よりもキリシタンの坊主に  
 なれ、どれ位人が助かるか判らん。あの異人の坊主の云う事を聞  
 きよる内に俺おらあ死にたいような気持になつたもんじやが、今の貴  
 様の御祈祷を聞いたりや、スウーとしてヤタラに目出度めでとうなつた。  
 あーら目出度めでたや五十六億七千万歳。鶴亀鶴亀」

「あの黒い鬚を生はやいた奴は日本人じやろうか」

「うん、あれがあの女のキリシタンの亭主らしい」

「あいつが篠崎の耳に口ば附けてあなたはこの婦人を愛しますかと云うた時には、俺は死ぬほどおかしかったぞ」

「うん。俺もおらマチツトで我慢しとった屁をば屁へ放り出すところじやった。あん時ばかりは……」

「花嫁御も娘御も泣きござったなあ——」

「そらあ悲しかろう。いくら連れ添うても十日と保もたん婿どんじやけんになあ。太閤記の十段目ぐらいの話じやなか」

「仁三郎が黙って合点合点する内に、夫婦で指いび輪がねば、取り換えたが、あの時も、可笑おかしかったぞ」

「うん。仁三郎の指は、平生でも大きい上に、腫れ上つとるけに指輪いびがねも三十五円も出いて〇〇の鉢巻位の奴をば作つとる。それに花嫁御の分または亦、並外れて小さいけに取り換えてもアアアパどころじやない。俺あ、それば見て考えよると可笑おかしゆうて可笑おかしゆうてビツシヨリ汗かいた」

「誰か知らんが、その後の御詠歌のところたぞで大きな声でアクビしたぞ」

「あれは俺たい。あの御詠歌の文句ばっかりは判らんじやつた。恵比須様えべすが味噌みそ漉こしでテンプラをば、すくうて天井へ上げようとした。死ぬる迄可愛がろうとしたバツテンてんぷら天婦羅が天井へ行かんちうて逃げた……なんて聞けば聞く程馬鹿らしいけに俺がそうつと

アクビしたところがそいつが寝ている篠崎に伝染<sup>うつ</sup>って、これもそ  
うつとアクビしたけに、俺<sup>おら</sup>あ良い事<sup>いい</sup>したと思<sup>おも</sup>うた。病人<sup>びやうじん</sup>も嘸<sup>さぞ</sup>アク  
ビしたかつたろうと思<sup>おも</sup>うてな——」

「何時間かかつたろうかい」

「俺あ時計バツカリ見よつた、二時間と五分かかつたが、その最<sup>し</sup>  
後<sup>ま</sup>の五分間の長かつた事。停車場で一時間汽車ば待つとる位長か  
つた」

「うん。何<sup>なん</sup>にせい珍らしいものば見た」

「仁三郎も途方もない嬥<sup>かか</sup>アば持つたのう」

「仁三郎はやっぱりよう考えとるバイ。達者な内<sup>うち</sup>にあげな嬥<sup>かか</sup>アば  
もろうて、あげな歌バツカリ毎日毎晩歌わにやならんちうたなら

俺でも考える」

「第一魚市場の魚が腐る」

「アハハハツ……人間でも腐る。俺は聞きよる内に腰から下の方が在るか無いか判らんごととなった、生命いのちにやかえられんけに引つくり返つてやろうかと何遍思つたか知れん」

「俺は袴の下に枕を敷いとつたが、あのオチニの風琴の音をば聞きよる内に、自分の首が段々細うなつて、水みず飴あめのごとダラアと前に落ちようとするけに、元の肩の上へ引き戻し引き戻ししよつたらその中うちに済んだけに、思わずアーメンと云うたら、涎よだれがダラダラと袴へ落ちた、まあだ変な気持がする」

「ああ非道ひどい目に遭うた。どこかで一杯飲み直そうじゃないや」



「ウアイー賛成！ 賛成！ 助かりや助かりや、有難や有難や、勿体なや、サンタ・マリア……一丁テレスコ天上界。八百屋の人参、牛蒡ごぼうえ——」

「踊るな馬鹿！」

「アーメン、ソーメン、トコロテン。スツテンテレツク天狗てんぐの面めんか。アハハハハ。鶴亀鶴亀」

以て当時の光景を察すべしである。

而も、しかこうした儀式が済んだ後のち牧師等が引上げると、一座が急にシーンとなった。後には可憐な母親と娘が仁三郎の枕許に坐つてシクシクと泣くばかりになった。

その時に湊屋仁三郎は、ホンの少しばかり腫れぼったい目を開

いて、左右を見た。下座に居流れていた市場連中を見て、泣くようにシカめた顔で笑って見せた。

「何チウ妙なモンヤ」

一同が腹をかかえて笑い転げたというが、そうしたサ中にも仁三郎一流のヒョウキンな批判を忘れないところが正に古今独歩と云うべきであろう。

ところが話は、未だ済んでいない。仁三郎の珍最期はこれからである。しかも、仁三郎が完全に呼吸いきを引取ったアトの事で、御本尊の仁三郎のお陀仏自身にすら思い付かない……しかも仁三郎一流の専売特許式珍劇がオツ初まって、オール博多の人口に膾かい炙しする事になったのだから痛快中の痛快事である。

その仁三郎が係かかり医いの予言の通り結婚後キツチリ十日目に死んだ。

もちろんその時には、何の変哲もなかった。一同が眼をしばたいて快人篠崎仁三郎の一代を惜しんだだけの事であつたがここに困つた事には、一旦、天主教に入った以上、葬式もやはり、大名町の赤煉瓦の中で執行せなければならぬというので、市場連中は相当ウンザリさせられたものらしい。

然し仕方がない。何にしる博多ツ子の中の博多ツ子、湊屋仁三郎の葬式じゃけに、一ツ思い切つて立派にしてやれというので、生魚、青物両市場の大問屋全部が懸命の力ちからこぶ瘤こぶを入れた。

「相手がアーメンと思うと、いくら力瘤を入れても、入れ甲斐がないような気がして、チーツト力瘤を入れ過ぎたようです、とうとう大椿事おおごとになりましたなあ——」

とその時の有志の一人が語った。

当日は予想以上の盛会であつた。

「仁三郎さんが、ヤソ教で葬式されさつしやるげな、天国へ行かつしやるげなけに、死んでも亦と会われんかも知れん」

というので、知るも知らぬも集つて来た結果会衆は会堂に溢れ会堂を取り囲み、往来に溢れるという素敵な人気であつた。

同時に、その時の葬式が亦、師父ジョリーさんの全幅を傾けて

計画した天主教本格の盛大、長時間のものであったらしい。但し今度は会堂の中が椅子席だったので、重立った連中は、大部分脚のシビレを助かったというが、それでも中央の通路に突立っていた者は二三人引くり返ったくらい盛大荘重なものがあつたという。そのうちに正午から夕方迄かかつて、やっと葬式が済んだので会衆一同は、思わずホツと溜息をした。その音が、ゴーツと堂内に溢れて、急行列車の音に似ていたというが、マサカそれ程でもなかつたらう。

そこへ棺担ぎが出て来て棺桶に太い棒を通した。そのまま、市営の火葬場へ持って行こうとすると、一番前の椅子に腰をかけていた市場の親友二三人が何事かタマリかねたらしく立ち上つて馳

けよつた。

「……チヨ……一寸待ちなさい。こげな葬式で仁三郎が成仏出来るもんじやない。ふうたらぬるい。もう辛棒が出来ん。カンニン袋の緒おが切れた。一寸貸しなさい。私達が担いでやるけに……オイみんな来い、ついでに前の花輪をば、二ツ三ツ借りて来い」

魚市場だけに乱暴者が揃うちっていたからたまらない。得たりや応という中にテンデに羽織をぬいで棺桶を担ぎ上げた。牧師連中が青い目をグリつかせている前で花輪を二ツ三ツ引つたくとその勢で群衆を押し分けて、

「ウアーイ。ワツシヨイ、ワツシヨイ」

と表の往来へ走り出した、生魚さかなを陸上あげるのと、おんなじ呼吸で

どこを当てともなくエツサエツサと走り出したので消防組と市場の体験のある者以外は皆バタバタと落伍してアトにはイキのいいピンピンした連中ばかりが残つて了つた。<sup>しま</sup>

そこで、ヤツと棺桶が立ち止つた。

「オーイ、みんな揃うたかーア」

「後<sup>あと</sup>から二三人走つて来よーる」

「ああ草<sup>くたぶ</sup>臥れた。恐ろしい糞<sup>くそぶくろ</sup>袋の重たい仏様じゃね——。向うの酒屋で一杯やろうか」

「オツと来たり、その棺桶は門口へ降<sup>おろ</sup>いとけ。上から花輪をば、のせかけとけあ、後<sup>おく</sup>れた奴の目印になろう。盗む者はあるめえ」

一同はその居酒屋へなだれ込んで、テンデにコップや枺を傾け

てグイグイと景気を付けた。

「サアサアみんな手を貸せ手を貸せ。ヨーイシャンシャン、ヨーイ、シャンシャンウアーイ」

と一本入れた一同は、又もや棺桶を担ぎ上げて、人通りを押分け始めた。すると上機嫌で先棒を担いでいた湊屋の若い奴が向う鉢巻で長持唄を歌い始めた。

「アーエー女郎は博多の——え——柳町ちや——エエ」

「柳町へいこうえ」

「馬鹿！ 仏様担いで柳町へ行きやあ花魁おいらんの顔見ん内に懲役に行くぞ」

「ああ、そうか」



「とりあえずお寺へ行こうお寺へ行こう」

「仁三郎は何宗かい」

「仁三郎が宗旨を構うかいか」

「そんなら成丈なるたけ景気のええお寺へ行こう」

「あッ。向うで太鼓をばたた敲きよる。あすこが良かろう」

「よし来た。行け行け。アーリヤアーリヤアーリヤ。馬じや馬じ

や馬じや馬じやい」

「エート。モシモシ和尚おしょうさんえ和尚さんえ。一寸すみませんが

ア……お葬式の色直しイ。裏を返せばエー」

「いらん事云うな、俺が談判して来る」

博多蓮池町はすいけ○○寺の和尚は捌さばけた坊主であつたらしい。

「どうも後あとくち口くちが悪うて悪うてまあだムカムカします。一ツ景氣のえいところで一ツコキつけて、つかあさい」

という交渉を心よく引受けた。直すぐに中僧小僧をかり集めて本堂の正面に棺を据え、香を焚たいて朗かに合唱し始めた。

「がしやくしよぞうしよあくごう我昔所造諸悪業——いっさいがこんかいざんげ一切我今皆懺悔 エエ——」

まだ面喰っている小僧が棒を取り上げて勢よくブツ附けた。

「グワ——アアアンン……」

一同グツタリと頭を下げた。

「あッ。あああ……これで、ようよう元手もと取った」





# 青空文庫情報

底本：「夢野久作全集Ⅱ」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年12月3日第1刷発行

底本の親本：「近世快人伝」黒白書房

1935（昭和10）年12月20日発行

初出：「新青年」

1935（昭和10）年4月号～10月号

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2006年7月26日作成

2011年4月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 近世快人伝

夢野久作

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>